「雪国の来訪神」採訪資料（続篇）

高橋六二

目次

はじめに……四七
蔵王山東麓の白鳥神……四八
大物忌神社の管粥神事……五一
山形県遊佐町のアマハゲ……六〇
新潟県越路町神谷の見聞録 ※……七七
小千谷市大崩の鳥追い ※……八三
能登―端竜助家のアエノコト（一部※）……八九
能登―門前町皆月のアマメハギ ※……一一三
白山麓の見聞録 ※……一二二
信州―新野の雪祭り ※……一二六
文献一覧……一四九
地図集成……一五四
写真記録……一五九
おわりに……一五三

はじめに

表題に「続篇」と付したのは、次のものの続きだからである。

○本学紀要　第十八集（昭57―三刊）
　男鹿市門前のナマハゲ
○本学紀要　別冊第三集（昭58―三刊）
　鹿角市小豆沢の大日堂舞楽
　米代川の民俗を聞く

それぞれに副題として「採訪資料」1～3を付したので、この「続篇」では4から始まっている。体裁は従前にならったが、一部改めたところもある。それぞれの採訪に応じてくださった方々に厚く御礼申し上げると同時に、聞き書きは録音テープをできるだけ忠実に起こしたあと、項目ごとに順序を編成しなおしてあって、その文責はすべて筆者にあることを明記しておく。なお、目次の題目の下に※印を付したもの以外は、昭和五十四年度跡見学園特別研究助成費の交付を受けて行なったものである。

蔵王山東麓の白鳥神

――「雪国の来訪神」採訪資料4――

◎採訪地　宮城県刈田郡蔵王町、柴田郡大河原町・村田町

◎日　録　昭和五十五年三月十五日（土）

09：25　大宮駅発（特急ひばり5号）（晴）

12：42　白石駅着（晴）

13：00　白石駅前発（宮城交通バス）

13：18　宮大橋下車（昼食）

13：58　刈田嶺神社（～15：15）

15：30　宮大橋発（タクシー）

15：35　大高山神社（～15：45）

15：56　大河原駅前着（タクシー）

16：10　同、発（宮城交通バス）

16：31　村田営業所着

16：32　同、発（タクシー）

16：37　稲田姫神社（～16：54）

16：58　白鳥神社（～17：35）（曇、雪ちらつく）

17：45　村田営業所発（宮城交通バス）

18：05　大河原駅前着

18：30　大河原駅発（急行まつしま7号）

18：56　仙台駅着、泊

1　刈田嶺神社

鎮座地　蔵王町宮字馬場

「**県社刈田嶺神社一覧**」（社務所発行）抄

○祭神　日本武尊　合祀六社

○由緒　当社は往古倭建尊東征の時在陣し玉ふ地を尊崇して日本武尊を祭り別号を白鳥大明神と称へ奉る　紀元八百五十二年人皇第十四代仲哀天皇元年冬十一月刈田郡主に詔して白鳥社を挿艸し且つ神田を置く人皇第五十代桓武天皇延暦二十年田村麿将軍の中興にして延喜式内明神（ママ）大に列し古来皇室よりの御信仰厚く藩主伊達家領主片倉家累代の祈願神社なり　文治五年、天正十八年、文緑（ママ）年間、其の後一回の四回共兵火に罹りたるを享保三年願主片倉小十郎村休（領主）白鳥社一宇を造営し奉る現在の社殿是れなり　明治五年六月十日郷社に列せられ明治四十年三月一日神饌幣帛供進指定神社となり更に御大典の年昭和三年十一月九日県社に列せらる

○祭典　暁祭　毎年旧正月十四日　徹夜を以て祈願祭を行ふ　参拝者十万人　春祭　毎年四月十九日　神幸式　例祭　毎年十月十九日月次　毎月九日、十九日、二十九日（即ち九の日）

○境内社　四社　山神社、宝蔵稲荷神社、愛宕神社、赤子養育神社

見聞記

○参道入口の鳥居の額に「刈田嶺神社」とあり、参道脇に山神・蠶供養・聖徳太子・黄金山神社の石塔が並ぶ。

○拝殿に「白鳥大明神」の扁額があり、その脇の額に熊野神社・八雲神社・籠石稲荷神社・桑竹山神社・荒子入山神社・雷神社を明治四十三年四月吉日に合祀、とある。

○拝殿内の奉額に寛延四年（諸願成就之所）・文久三年・享保四年・明治二十七年のものがある。

○境内社（山神社か）の賽銭箱脇に藁苞（わらつと）が一つ供えられ、稲荷社に土または陶製の狐のほかにダルマ、そしてマユダマ状のものが納めてある。

○社殿裏に「白鳥塋域」があって、昭和十六年旧一月一日に三四会（沼沢末吉ほか二十五名）が整備した旨記されている。五基の墓碑にはそれぞれ白鳥の姿が刻されていて、向かって右から次のごとくある。

1、元文四巳未歳十二月二十四日化　于米蔵沼

2、元文元丙辰年十一月二十日化　於米蔵沼

3、文政十一年三月十九日　山崎忠兵衛

（表に二羽の白鳥像と「奉納」の字がある）

4、奉納　元禄十二巳卯大　九月吉祥日　当所丹野勘平

5、奉納　寛文十三年癸丑年　九月九日　旦理町　川亦庄三郎・高橋次兵衛・佐藤勘左衛門・高橋作蔵・我妻八内・草刈角兵衛・佐藤孫作・小林想七・作間五郎兵衛・佐藤長蔵・川又想吉・西山彦右衛門・森庄次郎

○社務所での聞き書き断片　別号の由緒―児捨川に尊の妻（？）が児を捨てたら、それが白鳥になって飛んで行った。暁祭―現在は新暦正月十四日に行なう。宝蔵稲荷神社―実のならない木に実がなるようにと祈る。豊作を祈る。マユダマ状のものは正月十四日に、家の中の各部屋に飾ったものである。

2　大高山神社

鎮座地　大河原町金ヶ瀬

○式内社。祭神―日本武尊・橘豊日尊。扁額―拝殿正面に「正一位大高宮」、左に白鳥二羽を描いたもの、右に天女像（？）を刻して「御大典紀念」とある。正応六年銘鰐口―国指定重要文化財。境内社―蠶影神社ほか。

3　稲田姫神社

鎮座地　村田町足立（あしたて）

縁起（昭和四十三年建立の記念碑より摘記）

寛永十二年まで足立郷社地神囲に鎮座。同年四月九日、今の筑地明神囲に移す。五穀成就の守り、縁結び、母乳の神。寛永十五年二月八

日、伊達公の奥方が母乳の御授けを祈願、念願叶って寛永十六年四月二十八日に御礼詣り、神田両側に相楓を手植。

寸見

○小高い丘の上にある。拝殿正面に「稲田姫神社」の扁額があり、左に須佐之男命の八俣大蛇退治図がある。境内に「八雲神」「若木大権現」の石塔がある。小祠の〆縄に松の小枝がさしてある。

4　白鳥神社

鎮座地　村田町村田字七小路

「白鳥神社御縁起」（社務所発行）抄

○祭神　日本武尊

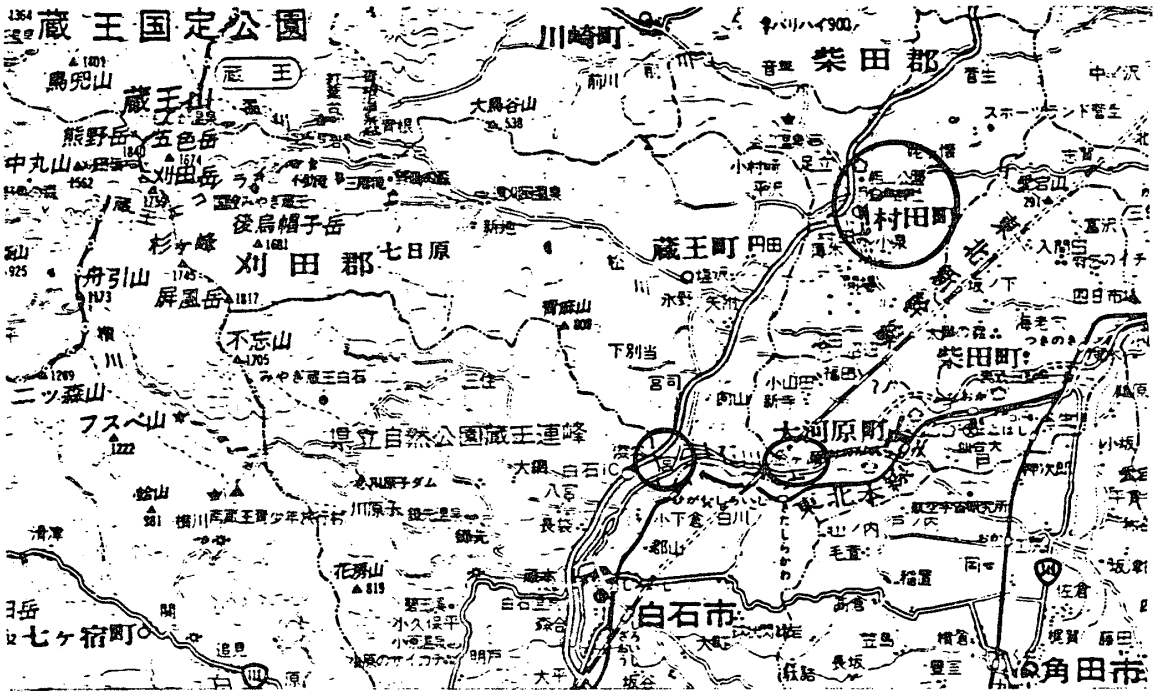
○縁起　（前略）やうやく陸奥（ムツ）の亘理の浜（ハマ）に御着き遊されたのが景行四十一年八月六日で御座います（中略）村田郷には景行四十二年春の頃、この地に御陣を定められて刈田の賊夷を御平定遊されたのであります（後略）

見聞記

○境内前の橋脇に案内板があり、祭日十月十五日、「皇子御薨去の後天皇深く皇子を御追慕の余りこの地に皇子の御神霊を御祭祀白鳥大明神と尊称」云々、名木に蛇藤ほかがある等と記してある。

○社務所で聞いた話では、大高山白鳥神社はここで迎えた妃を祀るもので、尊からの迎えを待っていたが来ないため、子を児捨川に捨てて自分も身を投げた、という。

○村田は蔵の多い町だ。


蔵王国定公園
蔵王
蔵王山
熊野岳
五色岳
中丸山
刈田岳
後烏帽子岳
杉ヶ峰
舟引山
屏風岳
刈田郡
七日原
不忘山
二ツ森山
フスベ山
県立自然公園蔵王連峰
大鳥谷山
川崎町
柴田郡
村田町
蔵王町
円田
柴田町
大河原町
白石市
角田市
七ヶ宿町
花房山
下別当
宮司
長袋
小下倉
白川
都山
毛萱
稲置
佐倉
芝島
長坂
豊三
明戸
大平
坂谷
白石IC
八宮
大鳥
小久保平
小原
追見
清津
蔵本
森合
大船
福田
南山
新寺
小山田
福岡
海老
つきのき
四日市場
坂ノ下
入間田
富沢
中沢
スポーツランド蔵王
愛宕山
足立
小村崎
平沢
小泉
新地
塩沢
永野
矢附
大鳥
海老
大船の森
坂ノ内
三ノ内
北本
若木
小坂
佐倉
横賀
藤田
横倉
長坂
豊三
大平
坂谷
明戸

大物忌神社の管粥神事

――「雪国の来訪神」採訪資料5――

◎採訪地　山形県飽海郡遊佐町吹浦

◎日　録　昭和五十五年

一月二日（水）大滝温泉泊

一月三日（木）秋田市内にて資料収集、泊

一月四日（金）秋田県立博物館見学、市内泊

一月五日（土）秋田城跡等見学

14：52　秋田駅発

16：59　吹浦駅着（雪）

17：15　酒田屋旅館着

19：10　大物忌神社管粥神事宵宮祭（～20：50）

21：50　旅館着

一月六日（日）

11：58　旅館発（バス）（雪・雷）

12：03　女鹿着、高橋力さん等に聞く（霙）

14：50　大物忌神社にて聞く（～16：15）（雨）

17：00　鳥崎のアマハゲ等採訪

20：28　アマハゲ、旅館から帰る

一月七日（月）

11：05　旅館発（雨・霙・雪・風）

11：20　遊佐町教育委員会（～12：25）

12：35　遊佐駅前発（バス）

13：25　酒田駅前着、資料収集等

15：20　酒田駅発（特急いなほ6号）

21：10　大宮駅着

1　宵宮祭

祭典

一、祭員参入（奏楽）―修祓―降神―献饌（奏楽）―祝詞奏上―祈禱

（申込者名と祈願内容とを祭員五名で読み上げる）

一、舞（20：10～）

(1)、神宝御頭舞（おかしらまい）

神殿を背に祭員一名が拝殿上段の間に正座する。それにむかう形で獅子が舞う。一頭の獅子頭に付いた、緑と、橙・黄の縞模様からなる衣装（この年に東京在住者から寄進されたもの）とを被っ

て、二人遣いで舞う。頭は黒色で朱の縁取り、頂に五色の御幣が付けてある。楽は太鼓・笛・擦り鉦で、調子は早い。終わって、頭・衣装を祭員に渡す。

(2)、巫舞（みこまい）

巫女一名が金の扇と鈴とを手に舞う。楽は太鼓・笛・擦り鉦で、鈴の音が加わり、調子は早い。

(3)、諾冊二尊（だくさつにそん）の舞（まい）

一名が冠、青い面、茶の狩衣、袴姿で舞う。楽は太鼓・笛で、調子は遅い。

(4)、猿田彦（さるたひこ）舞（まい）

一名が鳥甲・天狗面を付け、途中で鉾・鈴を持って舞う。楽は太鼓・笛で、調子は遅い。

籌堂にて

境内の一画に葭簀張りの小屋があって、中の炉で人々が餅を焼いている。

（ココノ名ハ）ゴマドウ（護摩堂）とゆうねえ。このあと、神主さん、ここで、行事するの。（燃シテイルノハ）去年の前の、何年もこの、神様の上、さげてたアノ、〆縄とか、お札なんかもな。（餅ハ）いただいて食ッべるんです。今日、うちで、持ってって食ッべるの。（丸イノガフツウノ形カ）はい、そです、ここは。（神棚ニ飾ッタモノカ）いえ、飾らないの、持って来てんの。ほんばって食ッべる餅で、まず神様サあげたの、まだそのまんま、あがってるもんで……。（ナゼコウシテ焼クノカ）やっぱり、病気しねよに、食ッべるじゃないですか、はい。

2　志田真鍬（ますき）宮司（明27生）の話

宵宮祭のこと

（今ノガ宵宮祭カ）そうですね。午後七時から。ただ、今の、この獅子舞の行事は、朝っから、二頭（ふたかしら）でもって、ま、巡行するわけです。（祭典ノ時ノ御祈禱ハ）身体健康とか、海上安全とか、大漁満足とか、五穀豊穣だとか、これあの、書いて、そして名前を書いて、そしてその、まあ、みなさん御祈禱して……。（参拝者ハ土地ノ人カ）ええ、遠く、まあ青森県とか……。（吹浦ノ生業ハ）半農半漁ですね。（漁師モ参ルノカ）そうです。

（舞ハ）えー、ま、あのう、獅子舞のあとにやったのは、いわば、まあ、巫舞、どこにもありますがの、巫舞。その次やったものが、諾冊二尊の舞ですの、伊奘諾伊奘冊の。その次がまあ、猿田彦舞です。まだまだ、他にも、ここにまあ、あの、伝承された舞はありますけれども。（榊舞ハ）ええ、前はやりましたが。御幣舞もありましたが、今は、まあ……。剱（つるぎ）舞も。翁舞も今までやったのですが、今日はやりません。（柳幣舞ハ）ええ、ヤナギ舞です。これが今の、ソウソウトウ（？）ギョウのお祭りでもって、そのう、明日、今の占いをでかして、やって、それでその、それといっしょに今度、七日の日から、その柳にお札を付けて、そして各、まあ檀家々々に、廻わってぐんです。まあ、

いわば、ゴハンタテ（御判立）て、俗に、おいて、その柳舞が、すなわちそのまあ、御判舞て、そういことです。今は、こんどまで、こっちのほうは、いちおう、えー、中止しております。もう二、三年前まではやりましたけども。（神宝御頭舞ハ）その、御頭舞とゆうのは、今さっき舞った、それです。

……まあ、五穀豊穣のお祭りでありまして、これから、午前零時に、その、まあ、あの、その、カガリドウ（籌堂）でもって、菊の御紋の鍋でもって、お粥を煮て、そして葦管……。そしてその、あす午後から、管開きと言いまして、まあ……。これから、も一回お祭りがあるわけです。これが、宵祭りてえなかっこうでありまして。

管粥神事のこと

俗に、まあ、神仏混淆時代にせば、まあ、イッカドウ（五日堂）と。この、五日に、その、お祭りしますから、ま、五日堂ってゆうわけです、はい。まあ、もとは旧正月五日でやったすが。でまあ、そいで、ほんとの名前は、管粥神事ってゆうんです、はい。

そのう、午前零時から、そこの籌堂です、もと神仏混淆時代は護摩堂てゆうんですけど、まあ籌堂ですが、その籌堂でもって、その、菊の御紋の鍋でもって、そのう、お粥を炊くわけです。それがいつ頃から、その鍋が用いられたか、なんてことまでは、はっきり……。その鍋、ずっと昔のことですが、少しどっかこわれても、酒田まで行かなければ、その修理ができないと、ゆうことで、その、お婆さんが、酒田まで背負って行ったそうです。（テープ交換のため少々中断）自分の足元を、ずうっとこの、火の玉ですの、を照らして、そしてその、ちょうどここの、石の鳥居まで来たば、お社さ入った、ですの。それが、ま私のひこ婆さんですけどの、その人がよく、伝えにですの、言っておりましたがの。それでまず、その暗闇の中、まあ、ちょうど半分くらいで、こりゃたいへんだともって……。そういふうにまあ、神様の力で、まあ、菊の御紋の鍋なもんだから。そうゆう、導きがあったと、ゆうことが、一つ話んなって、やっぱり言い伝えられてます。

その、ま、葦管、それからその、お粥を煮るところの、お米も、北畠頭房が、秋田県小石の、乙友村を、この、お社に寄進したと、その文書が、まあ、終戦までは、国宝であったんです。その、今日のお祭りに、そこから、葦管とお米、まあ寄進されたと。まあ、正平十三年中の。それがいつの時代か、今現在のものは、酒田市の豊川とゆう所から、毎年これを、ここに献納してくるわけです。（ナゼ葦ヲ使ウノカ）それはその、まあそこまではどう、ですかのオ。まあやっぱり、昔からその、まあ豊葦原瑞穂の国、とゆうなことで、そういったことからその葦、ってゆうことでんのオ。

これも、社家の人が、あそこに、まずお祓いをしまして、それ以外ん人はいっさい、入ることはできません。お籠りした人もぜんぶいちおう出ていただいて、そして、潔斎して、まあ、入るわけです。そしてお粥を煮るわけですの。そのお粥、ちょうど、まあ四十分、か……。そこが、見、きわめることスの、この、元老の、大役だわけです。あまりやわかったならば、その葦管が、ひっくり返るんです。固くなっ

て、もう差せばこれ、なんの、結構なことですが、それでも、それではやっぱりだめんなるです。だいじょうぶだかだいじょうぶでないか、そこが、まあ多年の……。だから神の、体験でなかったら、できないですね。みなさん入ってるうちも、いっさいよその人は、もうだいじょうぶとか、もういいなんてことは、いっさい、口、はさみません。ですから、ま、最初の一、二本は、もう、少し倒れて、きても、二十本の管を差すには、少し、時間がかかるわけです。ま、たとえば、五穀のもんであれば、八本です。それから、十二ヶ月の、その月を、見るです。お天気とか、まあどうだとかですの。たとえば一月がどうとか、二月がどうだって、とにかく、その、二十本の管を差すわけです。この二十本の管さ、まあ、一月から十二月まで、それからさ、今の、五穀の名を記して、こういに示して、そしてまあ、これをこう、まあ、立てるわけです。そして、その二十本ぜんぶ、終わりましたら、二人でもって、その、そこから、神殿にあげて、そしてその、オニヤライとゆうものを、まあやるわけです。そしてまあ、その、太鼓などたたいてのォ、それがまあ、その、暁（あかつき）の祭りです。まあ結局、その、この、これの、本祭典を執り行なうわけです。午前一時にの。（籌堂ノ行事ハ見ラレナイノカ）ええ、まあ、そうゆうことでの。ただ、午前零時にお粥を炊いて、そして、神さんにまあ、あげて、あげたそのお祭りはほれ、見れますけども。そして、午後から、その、運勢、ま、占い、いわば神さんのお授けですか、教えさとしを……。（ソレモ見ラレナイノカ）そうですの。結果は、わかりますけども。発表しますけども。

明日の午後から、その、葦管でもって、運勢、判断するんです。もとはまあ、こっちに斎館ありますけども、ここに〆縄張って、まあ、ここを斎館にして。もとは、旧社家の人がたはみな、まあ、礼装でもって、入ったわけです。だけど、今こんど、勤めなもんですから、それもやりませんが、とにかくいちおう、みなさんには、明日、十二時半に、管開きをするから、とゆうことは、お伝えするわけです。だいたい、まあ、二時間、三時間ぐらいかかりますかの。（参拝者ハ）前は、ほんとにあの、午前零時の、お祭り済みますとゆうと、今のオカシラ行事、すぐ、あの、秋田県に、巡行したものです。ですから、その、秋田県のかたは、その頃は、もう汽車もなし、車もないもんですから、みなその、お籠りしてしの、そしてオカシラさんといっしょに、その、三崎峠、行ったもんです。

（管開きの結果―六日）ゆうべ申し上げたように、旧社家のみなさんに、ここさ寄っていただきまして、そして、やっと、終わったばっかりです。（早稲が八分半カ）そうですの。（判断法ハ）え、それがまあ、多年の、ま、体験ですの。別に、大神様は、そのとおり、教えさとし、わけですけども、まあ、見る人、たとえば自分らですの、見る人の判断に、これが、あるわけですから。たとえばですよ、みなさん、それぞれ、まあ、いろいろ、判断の違うわけです。わたしは、こう思うと、この葦管でもって、こう思うと、それから私はこう思うと、とゆうことを、それによって、まあ、元老、まあいちばん、いわ

ば。ピーチョウとゆうことがありまして、いちばん年輩の人ですの、それがその、みなさんにおはかりして、ま、そうすれば、ま、これでもっていかがですかと、けっこうでしょうと、ゆうことん、なれば、そこで決定するわけです。ですから、なかなか、その、時間もかかるわけです。（葦管ニ入ッタ粥ノ量ニヨルノカ）え、その、量もありますし、たとえばですの、まあ、ここまで入れるですから、ここまで入るのが、これまあ、ふつうであるんです。それが、もう、これまで入ることがあるんです。それからその、ぜんぜんその、ここまで、差しても、ま、これしか入らないと、また、ぜんぜん入らねえこともあるんです。ここにその、ま、月と、今の五穀の名を記して、そして、これをこうやって、みなさんに廻わすわけです。ただし、まあ、月であれば、まあどうだと、こうこうであればどうだと、お天気であればどうだと、これであればどうだと、こうゆうことですね。それでもってその、まあ、いちおう、そういふうにしるわけです。そして今年、もう終わりまで、自分な、はたしてそれが、神さんの教えさとしなさったの、自分ら判断して、それが間違ってる間違ってねえこと、見ねければなりません。で、多年の体験をですの、ずうっとその、積み重ねですの。そうゆうことです。ふつうであれば、当然、ここまでお粥を差したもんですから、まあ、常識としては、ここまで入るわけですの。ぜんぜん入ってないのもあるんです。それからもう、ここまでも入ってるのも……。それがその、多年の体験によって、まあ、五穀であれば、まあこうだと、またお天気であれば、こう、まあ、こうゆうことを、いろいろ、おのおの、判断するわけです。そして、まあ、一年中、眺めて、この管はこうであったの、何号の管はこうであったの、いろいろ判断がありますんです。で、反省して、ま、翌年にそなえると、ゆうことですの。（入ッタ量ノ多少ト豊凶ハ）いや、あります。まあ、五穀であれば、多く入れば、今年は豊作だと。まあ、ここはそのう、ほんとにここまで入っておってもですのォ、十分、ふつうは十分ですけど、十分とゆう答えは出ません。最高が八分半です。それからその、最低もですの、ま、ぜんぜん入らなくても、入らねばほんとにゼロとゆうことですけども、まあ、七分てとこで、最低をおさえます。まあ、最高を八分半、ほんとにまあ、最高であれば、まあ九分も、十分もってことございますけども、それもまあ八分半にして、まあ最低も、今申し上げたとおり、もうぜんぜん入ってなくとも、まあ七分ってことで。七分以下、六分半でも、五分でも、ありますけどもの。月は、あの、発表はいたしません。その十二ヶ月、一月から二月、三月、ずうっとこれに、記すわけです。まあ、こういったものは、もう、からからしてるでしょう。ここまでがまあ、ほんとはここまで、入らなければならないですが、まあここまでしか入ってない。もう、ここはあと、その、お粥どんどとこう、煮てるとこでこれなんですから、当然その、ここまで、そのまあ、お米なくとも、いちおうその、湯気ですのオ、入んながこれ当然ですよね。これ、ぜんぜんからからです。そうしますと、月であれば、五穀であれば、まあ、豊作で、まあ何分、でしけれども、月であれば、これはまた、ひじょうに

お天気はええですけども、こうゆうことをまあ……。（判断スル元老ハ）旧社家の、いちばん長老ですね。（旧社家ハ）えー、現在は十九です。もとは、ここは、まあ社家が、三戸で、坊が二十五あったんです。二十五坊。それがだんだん〳〵、まあなくなって、現在は、社家は二軒、あと、坊が、十七。で、ここはその、神仏混淆時代までは、神宮寺でもって、だいぶ勢力が、あったもんですから、むしろ社家は、まあ分離なってから別れとるですけれども、その前は、社家が三軒あっても、もうそうゆう神宮寺を初め、坊の圧力が強かったもんだから、そのむしろそのう、社家がまあ下になったようなかっこうだったようですの。

オカシラ行事のこと

元日からはですの、まあ、オカシラ行事っとゆうに、まあ、俗に獅子舞ですがの、ま元旦祭あって、終わるとすぐ、獅子舞に、秋田県、それからこの飽海、酒田、一円を、まあ現在も廻わっておりますけども。これがもう、四、五名ですが、八十日間、もう巡行するです。お廻わりするです。北のほうは、仁賀保、五十三ヶ村と、西目に参ります。こっちのほうはまあ、現在の遊佐町内、酒田・鶴岡、それから八幡（やわた）・平田。あの、今まではですの、一つのまあ獅子でもって、廻わったですけど、それが、元旦祭から三月の十六日まで、八十日からありましたが、今なかなか、時代がこうなったもんですから、二頭でもって、四十日間、二月の七日まで、そうやって廻わって……。前は、二、三年前までは、元旦から始まったんです。今はこんどその、なかなかその、奉仕しる人もですの、まあ、元日と二日は、休めていただきたいと、ゆうな申込みもあって、三日から巡行しております。だいたい、こうゆうな日程を組みましてですの、そしてその、まあ巡行するわけです。

（人数ハ）八人です、一行での。なんとしても、オカシラが重いもんですから、まあその、太鼓とか笛・鉦は、まあたいへんですけども、一ん、もできますけども、オカシラはやっぱり、交替にしなければならないスのオ。ですから、まあ笛や太鼓は、これはまあ二人、専門に二人やって、あとのよったりは交替で。太鼓・笛・鉦、これがまあ拍子方。あと、その、者は舞方。（太夫ハ）え、それ、二人いますよ。もう二人ぐらいも、この増員すればですの、その、ほんとにまあ、舞方なんかも、だいぶ楽なんですけども、なかなかその、そこに、費用と、ともなうわけですから。またオヤドに行っても、そのオヤドが八人の者を、十人すれば、またそこに、そうゆうオヤドのほうにも、御迷惑をおかけすると、ゆうなこともありまして、まず今まで、八人で、したもんですから。（職業ハ）まあいろいろですの。まあ、漁業だとか、まあ農業だとか。（代々ノ奉仕カ）まず、ですの。んー、まあ、前はですのオ、ほんとのこの、社家、の人がたが、ほとんと、やったもんです。ところが、時代が、末でもって、みなどっかにお勤めすれば、当然、休みの時は、御奉仕願われるわけですけど、まあ、それはできないことですから、まあそれ以外の人がたが、やっぱり、ありがたいもんで、みな、やっぱりその、御奉仕、してくださ

るもんです。

前は、元日は、湯ノ田から始まったんですよ。ですから湯ノ田のほうでは、やっぱりその元日から来ていただきたい、昔っから来たもんだから、まあ、このオカシラサン来るのに、お参りして、それからその、鎮守様に、お参りして、それからお寺さんに行ぐと、こうゆうその、ことんなってます。ですから、女鹿のあたりは、二日の日、まあ参ったもんだから、元日の日は湯ノ田・鳥崎・滝ノ浦と。それから滝ノ浦にお世話んなって、そして二日の朝早く、女鹿に行ったもんです。で女鹿では、そのお寺参りも、いっさいその、オカシラ行事しなければ行かないと。ですから朝行ぐ人と、ま、夕方行くうち、あるわけです。それ、夕方行くうちも、まあ、吹浦のオカシラサン、にお参りしなければ、お寺さんにも、行かないと。今は、きのう、廻わったです。いちおう、その、こっちから午前六時に出発しまして、そして今の時期にはまあ、暗いわけです。そして、拍子、まあ太鼓・笛・鉦、の三拍子でもって、そしてその、ずうっとこっちの端からもこうまでスの、拍子をつけて、まあいちおうお祓いをあげるんです。オカシラおいで〳〵、ってゆうことで。その、カドバライです。そしてその、そこの主人が、まあ今は電池ですけども、もとは提燈をつけて、そしてその、やっぱり、礼装でもって、お迎えしるわけです。そして必ずその、まあ初穂をもって、お盆に初穂を盛って、そしてその、お参りをしるわけです。そしてずうっと最後まで、八十軒、八十二、三軒ありますが、行って、そしてそれ行ぎまして今度、昔は、その部落長のうちに、お世話んなったもんですけェども、今、公民館できたために、公民館で、その部落でもってお世話してくださる。そこでも、その、まあ村中安全の御祈禱しまして、そして朝飯ちょうだいしまして、そして女鹿に松葉寺さんてお寺さんあります。そのお寺さんにまっすぐ行きまして、それから、端からあっちのほう、ずうっと廻わるわけです。

その、オカシラサン、お入りになる時ですの、まあ、門松の根元に、その、化粧砂をこう盛ってんですよ。ぜんぜん人の踏まない、砂ですよ。（ドコニアル砂カ）まあ、たいていはそのう、お社の境内からですのオ。海のものもあります。まあ清浄な砂をこう（門松ノ根元ノ両方ニ円錐型ニ）盛って、今オカシラサンおいでんなる時はこんど、鍬でもって、（ナラシテ）敷くわけです。まあ、今、オカシラサンお通りんなった時だけ、敷くと。誰も踏まない所を、オカシラサンから、この、清めてもらう。そして、いま一つ、まああっちこっちまだ、その風習見られますけども、潮水でもって、んなお祓いして。お入りんなる前。それからその、こうゆうお米とか、重ね餅とか、昆布・スルメ、そういったものを、こうゆう三方に、あげるわけです。そのオカシラサンにおあげするものを、あのう、火で清めて、忌み火でもって。それをそのう、オカシラサンに、まあ、そして噛んでもらって、それを家中いただくと。お米も、紙に包んで、オカシラサンに噛んでもらって、それをその、御飯にして炊くと。これをいただくんです。んな、置いてきますんで。ここではそのう、オカシラサンの信仰

てのは、これ、たいしたもんですよ。もう、ほんとに家内中潔斎しまして、もう着るもんでもなんでも、みな潔斎しまして、もう十二時んなっても十三時んなっても、みな子どももお待ちしてるんですよ。必ずその、この行事に会わなければならない、もう仕事どころの話でないと。まあ、一年一回の、一年のお祓いですから、ぜひとも、ほんとに、何事もないように、まあ一つ、まあ働かしてもらわんけならんと、そうゆうその、まあ、ことなんです。ですからまあ、どんなに天気悪くとも、どんな吹雪でも、どんなこうゆう雨ん中でも、必ずその、こうゆう日に日割りがもう決まってるもんですから、必ず行かなけやならないです。翌日に渡すことはできません。（オ宮カラ配ルノハ）え、その、お守り札ですの。まあ、たとえば……（ヤドノモノト各戸用ノモノ、厄祓イ等ノ違イガアル。家カラノ初穂料ハモトハ米一升グライ、今ハ二、三千円）。（舞イハ）え、いろいろありますよ。まあとにかく、一年の、その、お祓いですから、俗にオカシラ十二段の舞い、十二ケ月の、まあお祓い、とゆうことで、まあ、常に舞いながら、その、廻わってる途中に、その、まあ大祓い、を奏上するわけです。（座敷デカ）そうです。そうして今度、家内安全とか、また他に厄祓いとか、またいろいろ、交通安全とか、そんなもの。

ヤドとゆうのは、お昼、お世話んなる所、また夜のお世話んなる所が、まあ、オヤドだわけです。ですから、各、まあ、部落にも、いつのいつか、恒例のこの行事が、巡行するから、みなさんにも、まあ周知してくれと。これも、どんな、三軒、五軒しかない部落の、その部落の総代にも出します。してまた、オヤドのほうにも、いつのいつか、その、またお世話んなりますと、ゆうこと、出して、してオヤドのほうには、そのあとに、まあ、いろいろ、お礼状出すわけです。ほとんと、その、泊りです。ですから、八人を、この寒い時ですから、八人をお泊めしていただくとゆうことは、たいへんだ、わけです。お昼もたいへんですけども、とにかく寝具がたいへんなんです。まあ八人の寝具とゆうのは、寒い時なもんで、時期が時期ですから、まあなんとして、それがまあ、その、土蔵から出してですのオ、まあ、お天気とゆうことも、ないもんだから、もうずっと前から、ま、出して、準備しねけらならんですよ。ですから、ほんとにもう、たいへんですけども、そいでもまあ、やっぱり、神事のことなもんだから……。

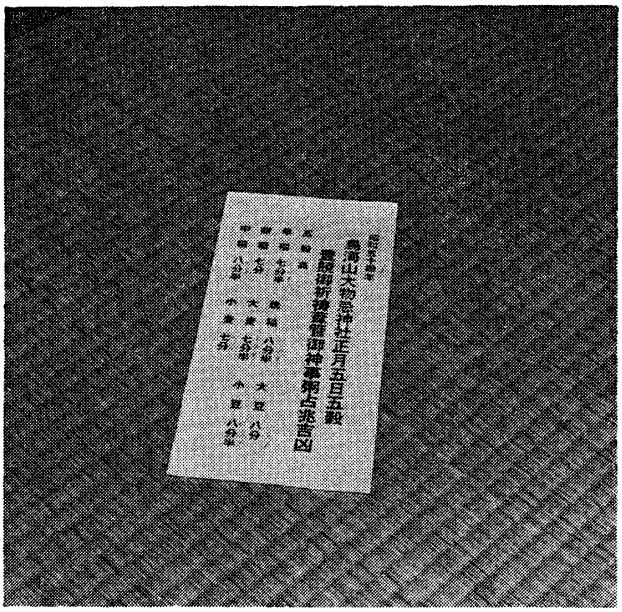
（北ハ）西目、あの、本荘の手前の西目です。（日ハ）えー、十八んちです。その西目も、あとに入ったものらしいです。前は仁賀保、ま五十三ケ部落ですの。あそこまあ、大西目・沼田・中沢・井岡、潟保・田高と、こういな部落、こう廻わってます。今日のようなこうゆう、お天気悪い時にはほんと、たいへんなんですよ。まあ雪であれば、雨具なくとも、吹雪であっても、なんとかあれだばすけども、これではもうなんともならんです。そいでもほのう、もう、ちゃんと日程、決まってるもんだから、その、どうしてもそこまで行かねわけなんです。ほして行ってれば、夜、だんだん遅くなったり、ゆうことです。ですから、その、巡行には、いちばん、この、雨は大敵です。二月の七日で、終了奉告祭です。えー、一つのほうは、酒田市の、ま、

古湊、えー、下市神とゆう所から、やっぱり引きあげて来るわけです。あと、一つは、こっちの遊佐の、白井新田とゆう所から、まあ剣積口の所が最後で、まあだいたいこういっしょになって、そしてそこで、ここで終了奉告祭とゆうもの、ま、やりまして、そしてその、簡単にお直会をやりまして。

社務その他のこと

ここは、伊勢の外宮さんと、御同神です。ですから、鳥海山頂の御本殿も、お伊勢さんと同じに、二十年ごとにお建て替えの、いわゆる式年の制になっております。現在の御本殿は昭和五十二年、御遷座申しあげたものです。それが、四十八年の暮れに、いちおう造営奉賛会とゆうものが結成いたしました、ほんとの十二月ですが、翌四十九年の三月一日、あの噴煙をはいたんです、鳥海山が。一五三年ぶりですの。それだもんだからこんど、当然、登山も禁止、入山禁止、でやったもんです。ほしたら、こんどその、お建て替えの騒ぎでないわけです。それでも、ま、ちょうど、御神慮によって、五十年の年に、解除なりまして、それからすぐこんど、まあ寄付募集に入りまして、いちおう、目標額は一億五千万でもって、どうも、ありがたいもんですから、一億八千万も、みなさんの御協賛でちょうだいしまして……。

（生マレハ）蕨岡です。ちょうど、鳥海山頂が御本殿でありまして、あと蕨岡のほうも吹浦のほうも、まあ、三角形のような、里宮。女鹿にはあの、八幡神社、鎮守さんありまして、私、兼務しています。その県境へまた三崎神社あります。あの三崎神社、私、兼務しています。（滝ノ浦ハ）大鳥神社ですの。鳥崎は三上神社です。それから湯ノ田は由豆佐売神社です。それと、あそこ、学校の所には諏訪神社、また駅近くには愛宕神社ってあります。これみんな、私、兼務しています。（コノ神像等ノ描カレタ掛軸ハ）このお社は、まあ、衣食住、五穀豊穣の、守護神ですから、すべてこの衣食住にちなんだところのまあ、蚕だとか、牛・馬、まあ海の、そういった、海上安全・大漁満足、えーまあ五穀豊穣、そういったものを……。



山形県遊佐町のアマハゲ

――「雪国の来訪神」採訪資料6――

◎採訪地　山形県飽海郡遊佐町鳥崎・女鹿

◎日　録　「大物忌神社の管粥神事」参照

一、鳥崎のアマハゲ

1　高橋寛一区長の話

鳥崎のこと

んー、我々まあ、調べたり聞くところによればですね、あの、もとは、あのう、鳥海登山の、入口であったと、もとはこの、鳥居崎ててゆうな名前であったと、話は聞きますけれどね。それまあ、その鳥居もどのへんさあったかってことは、わかあねけえども。そいでまあ、もとは鳥居崎ですけども、それが訛って鳥崎ってゆうなことなったとゆうな、話はまあ聞いております。もとはあの、ここの部落は、むこうのほうにあったらしいんです、昔は。湯ノ田の、こっちのほうですね。湯ノ田から来る時に、山あったでしょう。あのへんの山の麓のほうですね。それがまあいつ頃か、明治以前と思いますけども、このへんにまあ移転して来たってゆうな、実際、現在でもまあ、うち建たった、名残りは、現在でもあるんです。（戸数ハ）今は二十二戸です。人口は一一一人か二人ぐらいです。

由来のこと

ずっと以前から、調査のほうはやってるようですけども、まあはっきりした起源とか、そうゆう由来とかね、そうゆうものはあまり、はっきりしたこと、わからないんです。まあ起源なんて、何百年ぐらいなってっか、ぜんぜんまあ、我々、あのう、子ども時代から、ちょっとこう聞いたところでは、はっきりしないんですね。まあなんのためにやったのか、まあだいたい、こう、行事内容そのものから、見ますると、だいたいまあ、厄祓いといったようなそうい感じ受けますけどね。

前はね、これ、あの、小正月の行事なんです。小正月のの、結局、今あの、新なったけども、旧の時代から、まあ小正月ってあんですよ。お正月ってまあ七草で終わりだわけだね。そのあとこの、その月の、二十日まであんですだね、ちょうど。それで十五日の日がまた、小正月の、結局、大晦日とゆうな形で、あるんです。そいで、十六日

ってまた、お餅食べるんですね、このへんで。十五日の行事なんです。（六日ニナッタノハ）結局やっぱり、そのう、戦後の、ま、物のない時代ですね、食糧難とか、ま、そうい時代に、物のないのにこんな、ことやっていられないとゆうなことで、結局まあ、なったわけなんです。まあ、生活改善の一部だと思いますね。それでまあ、大正月で、終わりにしようと、ゆうようなことで、それから六日とゆうことで、だいたい昭和二十五、六年頃からじゃないかと思いますね。

維持者のこと

んー、以前はですね、あのう、青年会ってあったんですね。だいたいねえ、もとはですねえ、だいたい十六歳頃から、まあ二十五歳とゆうのが限度で、そいでもその前にまあ、妻帯者の場合は、ま、除外すると。二十五歳過ぎても、結局結婚の、しないかたは、ずっとこう、それぞれにまあ、協力してたんです。それでも、戦後、さまざまの関係でまあ、人口も少なくなったしね、ま、子どもも少なくなった関係からね、そうゆう関係でできなくなって、結局まあ消防団とゆうな形にまあ、お願いしてるわけなんです。あの、部落のほうでまあ、それをまあなくしてならないとゆうことから、保存、部落でまあ保存会てゆうな形で、今まではね、作って、そいでまあ、その行事の施行しるほうは、消防団のほうにお願いしまして、まあそうい形でやってんです。だいたい、はたち頃から、現在でまあ、四十二、三歳、四、五歳ぐらいまでの人が、みんなまあ、やってくれるんです。十一人、じゃないかと思いますね。ま、都合、できるかたはね、ほとんとまあ、来てくれると思います。それにまあ、正月、とゆうな関係でまあ、都会のほうに行ってるかたがたね、そいかたがたも、ま、ちょっとでも手伝おうてなことで、そうゆう場合もあります。

装束のこと

（準備スル所ハ）あのう、三上神社って言います。だいたい、年寄りだちから聞いてみると、豊宇気比売だの。あれ、どこもまあ、祀ってるんだとゆう話です。あそこには、諏訪神社、それから稲荷神社と、三っつありますね。（三上ノ名ノ由来ハ）さあ、それ、ぜんぜんわからないんです。

（始マリハ）きょう、（午後）六時。したくしるやつは六時ですけれども、朝からこう、ずっと、連続してこうやってんです。結局あのう、藁の、あのう、昔なら十把（じっぱ）でね、一束（いっそく）ってゆうんですね。あれあの、一束でもって、**ケンダン**てゆうやつ一枚作るんです。だいたいねえ、そのう、お面かぶって、する人たちが、一人につき、だいたい五枚から六枚ぐらいする、だいたい六パぐらいですね。そうすうとまあ、だいたい十人ぐらいの、のはみておかなくちゃならない、だめだからね、そいで、だいたい、六十か七十くらい作ります。

（面ハ）えー、ま、三っつあるんですね。そいであのう、一つが、だいたいあの、**イワクラ**（岩倉・岩蔵？）と、ゆうんです。それからあの**カサモリ**（笠森）とゆうのと**ミヅツボ**（水坪）とゆうのと、三っつの面あります。このへんでまあ、ミッツボてまあゆうんです。そいでまあだいたい、その山の名前が、現在まあ、ここの地名になって残

ってる山なんです。部落からちょっとこう、見える山なんです。（ソレヲ三上山ト言ウカ）ん、まあ、そうゆうわけではないと思いますけどもねえ。イワクラと、まあ、すぐ隣に笠森て、まあ山あんです、地名ですけどね。字名ではないんですけど。（アマハゲハ山ノ神ナノカ）まあそういことじゃないかなと、自分たちは、考えてんですけどね。（面ノ）色はぜんぶ、赤なんです。かっこうがそれぞれ、太ったり、など、してあの、中ぐらいのやつと痩せてるほうと、まあ、三っつなって分かれてます。実物まあ見てみないと、どうゆうふうに言ったらいいかね、ちょっと……。恐らくまあ、太ってるほうと、ちょっと小太りのと、ま、痩せてるほうと、そうゆう、外観から見てますよ。それがなにを意味してんだか、それはわかあないけれどもね。

（手ニハ）ぜんぜん持たないです。履物は、もとはね、最近は雪なんかあんまり、多くないからね、もとから雪多かった時代は、藁ぐつってあったでしょ、あれ履いてね、今だらほとんと、下駄、とか長靴ね。あと、足袋履いてですね。こいほあ、着物、今だばアンサンブルてまあ、ゆうけどねえ。こうゆやつぜんぶ着てるんですよ、ずっと。この上にすぐケンダンてやつ付けるんですよ。

訪れかたのこと

（事前ニ水ヲカブルコトハ）そういったことはないですね。ほんともう、うちのほうのはもう、こうゆう形でやるんだってゆうような、まあ形式とゆうものはぜんぜんないんです。その場に合わせてまあ、即興みたいなもんですから。アマハゲが、まあ門付けして歩く場合ですね、一人ではまあたいへんだからね、まあ、うちのほうが二十二ほど、湯ノ田のほうってのでやっぱり、三十何戸、四十戸近くも、恐らくまあ、うちかけて、歩かなくちゃだめだからね、それでまあ、だいたい、一人で三軒か四軒ぐらいずつ、交替するんです。そいでまあ、すぐまあ、お面のほうだけこう取り替えればええようにして、衣装はぜんぶ付けてんです。鬼が三人で、あと、太鼓とか鈴っとゆうのが一人付いて、その他にまあ交替する人たちが、まあその他にいるわけなんですね、六、七人もね。

あの、結局、太鼓といっしょで、ま、合図で、太鼓ドン〳〵とたたいて、そのままずっとこう、三人、ずうっとこう、続いて入ってくんです。そいでまあ、うちに入って、結局まあ、ハゲ〳〵、このへんでまあ、ハゲ〳〵〳〵とゆうまあ、声ね、奇妙な声を出して、あまりまあ、んー、三人とも、ほとんとまあおなじような声、にまあ、作るんです、そうい声を作り声するんですね。（ハゲノ意味ハ）ちょっと、なんとゆえばええかのお……。それやっぱり、実物見ねえとちょっとこう、説明が、付かねえようだもんなんです、だいたいね。そいでまあ、そこのうちの、子どもなんか、まあ、悪い子どもいねかっとゆうな、まあ、口には言わないけれども、そうゆ場合、子どもを、まあ外へこう引き出したり、引きずり出したり、別にあのう、大年寄なんかいた場合に、ま、肩とか、このへん具合悪いから、ちょっとこうさすってくれとか、ま、そうゆう注文もありますね。そうゆう場合はなぜてくれたりね、まあそういことともやるようです。（唱エ言ハ）ん、ぜ

んぜんやらないです。お参りもしないです。

結局まあ、うちへ廻わって来ますと、うちの人たちは結局、ほんとにまあ、神様に向かうような気持で、結局は迎えるわけなんです。そいでまあ、今はあんまりやあなくなったけれども、うちの人たちも、アマハゲ入ってくる、手合わせて、こう拝んだもんですなす。結局アマハゲて、怠け者とか、そうい者を結局、戒めるとゆうような、意味もあるようですね。でまあ、ほとんとまあ、男鹿のナマハゲっとゆうの、ちょっと似か寄ってるような点も、あんですよ。ごちそうなんかはね、やっぱりあの、そこのうちで、特別まあ、個々で違いますけども、まあごちそうする場合もあります。御祝儀なんかはね、あのう、うちのほうは、餅なんですよね。丸い餅ですね。だいたい三っつか、五つぐらいね。それにあの、御祝儀付けてくれるんです。そうしっどまあ、前のほうからやって、やって過ぎたほうからまあってきたお餅を、一つまあ、あの、お護符ってあんでしょう、その代わりに、もう、一つだけ、こう返すんです。それしてあの、次の朝まあ、七草たってんで、七草の雑煮に入れて、ま、それをいただくと、そういような形ですね。（餅ノ名ハ）そいな、ないようですね。それあのう、アマハゲの、もとは、えー、最近はほれあの、御祝儀としてお金なんかすると、出してくれるけれども、昔は、そういことなくして、お餅がその、こいにやって来てくれた、ま、御苦労分として、あげたなと思いますけどもね、それがどうだか、はっきりそのへん、わかあないんです。（護符ヲ配ッタコトハ）さあ、やっぱり、そういことはないと思いますけどもねえ。ほとんとまあ、やりかたとしては、昔からちょっとも変わったとこ、ないと思いますけれども。多少は省略んなってとこ、あるんじゃねえかなと思いますけえどもね、だいたいそんな形でまあ、継続してんです。（餅一ツヲ次ノ家ニ与エル意味ハ）わからないですね、ほんとに。文章で残したとか、そういなもの、ぜんぜんないものだから。ほとんとまあ、これなくしてならないてゆう気持から、まあ、そうゆう関係でやってるだけ、みたいなもんでね。お神酒はね、神社に、持ってぐんです。

事後のこと

（部屋ニ散ッタ藁ハ）あれは、そのう、結局ね、いつの頃だかよくわかあねえけども、あの、落ちるもの、金だとゆうんですね。結局、記念で、まあ、ある程度、あやかったんだかしらねえけれども、アマハゲからこうしてこの、金くれるとゆうことで、こう、自分の体からこの藁取ってこう、くれるわけなんです。そした場合、えー、金だとゆうことで、結局それを、まず、うちにこう歩けば、そうすっと、藁、散らばるでしょう。それそのまま、次の朝の、七草の、雑煮食べ終わるまで、ぜんぶ掃除しないんですよ。それ、金の上にいるとゆうな、ま、そうゆうなこともあるようです。それが、結局あの、年男って、そこのうちの親方がの、掃除しるわけなんです、その場合はね。だいたいこう、大まかなところ集めて、それ、よく焼くとか、してあの、堆肥、の、肥塚ってあんでしょ、そういとこにやるとか、焼くうちもあんだろうと思いますがね、さまざまです。（ナゼ焼クノカ）さ

か七人とかって。そいでまあ、鬼面、の場合と、なんと言えばいいか、さまざまの面、お爺さんみたいな面とかね、そういな違うんです。うちのほうは、鬼の面ですけどね。（古イノハ）さあ、これ、ほとんとまあ、はっきりしたこと言えないですね。さまざま、そうゆう、研究していらっしゃるかたがたね、さまざま見えて調べたんですけども、はっきりした、断定したことは、今まではまあ、ないようですね。だいたいまあ、三百年、ないしそれ以上はなってんじゃないかってゆうような、ことは言われておりますけれども。

2　村人の話

○滝ノ浦は（ケンダン編ムノヲ）一時からやりました。ここのは、ケンダン着て、手足は見せても関係ないと。滝ノ浦の場合は手足を見せない、所作である、と、違いがあります。ひじょうに、鳥崎の場合は、静かな行事らしい。

○（面ハ）ぜんぶ違うんです。これが、カサモリ、こんながミツボしな。（顔ノ太サガ違ウ。顔ノイチバン大キイノガイワクラ、中クライノガカサモリ、細イノガ）ミツボしな。口あいてるね。（性別ハ）さあ、やっぱ、男でねんでしょうか、これのオ。なかなかやっぱり、滝ノ浦とか女鹿の面よりは、まあ精巧にできてる、の。これみんな、こんどのために、漆塗ったんだ、これ。

○（トリオイハ）ヨンドリ・ヨナカドリ・アサドリと、ヨアケドリ。（アマハゲガ鳥崎ヲ）終わって、ここまで、公民館の前まで（来ルア

あ、それわからないです。

あのう、ケダンて、着て廻わるでしょう。ぜんぶできたあと、あの、山で焼くんです。ぜんぶまとめて。終わってから。それあの、今日です。終わってから、だいたい九時も十時もなると思いますけんども。それあの、子どもたち、焼くんですよ。あの、中学三年までの子どもたち。それあのう、行事の一環としての、結局あの、門松が、今日まず、取ったわけだの。その門松もそこでみんなこう、焼くんです。その場所で焼くの。そこの、神社のちょっと裏のほうですけどね。ん、まあ、**ホンテンゴヤ**ってゆうんですね。（意味ハ）さあ、それ、わからんですね、ぜんぜんもう……。行事のことは、やっぱり、恐らく**サンドヤキ**とか、**サンドゴヤ**とかなんとか、やっぱしドンドヤキとおんなしような意味だと思いますけども。サンドゴヤともゆうし、ホンテンゴヤともゆうんです。それ、朝からの引き続き行事なもんだから。

それでその、ほのアマハゲ終わったあとに、**トリオイ**ってあるんですね。あの、子どもたちやるんです。これは、部落のこう、ずうっとこう、こっち、道路だけ、部落こうあって。子どもたち、太鼓たたいての、太鼓たたきながらずっとこう、村の、道路こう、なんかこう唄いながら歩くんです。

他所のこと

（コノヘンヲ浦通リトイウノカ）ええ。今日、滝ノ浦とここだけです。滝ノ浦の場合は二人です、女鹿の場合は五人だそうです。五人と

トヲ子ドモガ)、ヨンドリ追って来るわけ。そいで(アマハゲハ)ケンダンの着替えしたり、こわれるやつもあるから。それで、こっから湯ノ田へ。そのあと子どもたちが、湯ノ田終わってアマハゲ帰って来てから、ヨナカドリ追って、ヨアケドリ追って、アサドリ追って。滝ノ浦のほうは三回。子どもは今日、ここへ泊まるんだそうです。昔からそうだってな。(ヨアケドリハ)三時。アサドリが六時頃。(違イハ)ただ、唄の、しりのほうへいって、アサドリとかヨアケドリとか、入るだけであって、あとはみんなおなじ。(服装ハ)なにもしない。唄があって、太鼓たたいて廻わるだけ。(子ドモニ与エルモノハ)トリオイの時はないんだけれども、朝あの、門松焼くでしょ、その時いっしょに、みんなそれ、金でやってるんでないの。おれたちがきの頃は、餅だったけどなあ。餅、一軒あたり、三っつとか四っつとか。○(ジゾウフリハ)これ、私も、見たことないんです。お地蔵さんがあって、子どもさんたちがなんかこう、行事やるんじゃないですか。稲川とゆうとこで。

3　アマハゲ巡行

三上神社拝殿にて

17：50　ケンダンを付けながら、したく開始。

(タオルノカブリカタハ)ほっかぶりだ。(ケンダンハ)どうゆう意味だか。(付ケル枚数ハ)五枚。(アマハゲニ扮スルノハ)もとはワカジェって言った。今の名前では青年団だ。あの、昔の、元服と同じで、十五歳んなると、初めてかぶせるわけ。昔は十五歳んなると、元服と言った、それと同じ意味だよ、考えてみるとね。初めてかぶるのが十五歳。今の中学三年だから、数えで十五とゆうことだねえか。二十、七くらいまでのかた。(初メテノ時ノ気分ハ)なんてゆうかのオ、まじ、うちの者ども、すぐわかったんやのオ。入ってったあと、すぐ名前ゆわれて、あと、なんともならねえって感じだったのオ。かっこう悪いですのオ。(世話ヲスルノハ)おれたちは消防団で。

(今年初メテノ少年ニ)ん、ちょっと、あんまり、いいって感じしない。

(大キナ餅ノ上ノ小サイノハ)あれ、お供え餅だえな、やっぱり。これみんなほれ、神社へお参りに来た時、納めてたもんで、そのうち〳〵で違うわけよ、形が。

18：17　太鼓を打つ。一同、拍手をうって拝礼。

18：20　外へ出て、家を廻わり始める。太鼓を打つ。

家廻わり

太鼓・鈴・奇声。

(廻ワリカタハ)だんだん、シモのほうへ行くわけ。

A家(酒をふるまわれる)→B家→C家(太鼓・鈴)→D家→E家(太鼓)→F家(太鼓・鈴・奇声。子どもの泣き声。大人の笑い声。鈴・太鼓)→G家(太鼓・鈴)。

ここは村の社交場みたいな場所で、洗濯とか、前はのオ。まあ我我、一般に、セキ〳〵って言ってんだどものオ。神社の下から流えて

くる水を利用して、前は、このへんも、あんまり川なんかなかったもんだからのオ、この水を利用して、ずいぶん、さまざまな、生活の場、にしてた、な。ええ、若水に使ってました、前は。二、三年前まで、ここの源んなってる井戸から、若水汲んで、やっとりました。

（水神様ヲ祀ルカ）ええ。これは、いちばんのもとは、このアマハゲ、三っつの面あるでしょう、このいちばん元ってのは、やっぱりその、一つは水の神様とゆう、そこの、名前をとって、あの、ミヅツボとゆうどこから出てる、アマハゲが一つあるんです。それで、もう一つはイワクラとゆう山、これは石山なんです。それでもう一つはカサモリとゆう、これは純然たる山ですけれども、この三っつの山から、とったものが、そっから、出てくるとゆう、アマハゲの、あれ、あるんですのオ。我々、聞いたとこによればねえ。

H家（太鼓・鈴）→I家。

（鬼カラ一ツモラッタ餅ハ）それ焼いて、みんなで。あしたの朝。それ分けて、みんなで風邪引かないようにって。あの餅のこと、さあなんてゆうか、おらわからねえ。（トリオイハ小学）んだと、三年生以上。

トリオイ

（太鼓をうちながら）ヘ……ホーイヤホーイヤ、ヨンドリ、ホイホイ、イナーカノトリハ、タナーカノトリハ、……ヲクレテ、ホーイヤホーイヤ、ヨンドリホイホイ、イナカノトリーモ、タナカノトリーモ、ゴーハンタベーテ、ホーイヤホイヤ、ヨンドリホイホイ、……。

酒田屋にて

（湯ノ田ハ）二十一世帯なんですけど。ナマハゲあがんのは、十五、ぐらいでねえか、と思うんです。（人口ハ）五十ぐらいかな。昔はなんか、七軒だったそうです。（昔カラ鳥崎ノアマハゲガ来ルノカ）そうです。結局あのう、部落の共有林なんか、いっしょなんです。（七月ニ）ヒアワセ。十四、五、六か。あのね、鳥海山の山頂と、この大物忌神社と、飛島と三っついっしょに。

20：16　アマハゲ来る。酒・ごちそう・肩もみ。歌謡曲。太鼓・鈴。

（コノアトハ）もどって、この、藁を焼くわけ。ヤグラ組んで。太鼓たたいて。（ソノアトハ）解散。（トリオイハ）前は、さっきやってきたヨンドリと、それから十二時のヨナカドリと、朝五時のヨアケドリってな、三回やってる、あの、歌詞がおんなじで、名前がちょっと違うだけで。（文句ハ）ヨンドリホイホイ、イナカノトリト、タナカノトリト、ワタランサキニ、ホンニヤホンニヤ。あと、ヨンドリがヨナカドリ・ヨアケドリに変わるだけ。

20：28　アマハゲ帰る。

（ケンダンハ）今まではね、着てるのをとったりして。今度、作ってきてくれたの。これが福なんですって。フクワラ。あとは燃します。今夜だけ、部屋の中へとどめておいて。

二、滝ノ浦のアマハゲを聞く

村上良一社会教育主事の話

したくやっぱり、あのう、大鳥神社。やはり青年がですの。まあ前は青年会てゆうなことでしたけども、青年会ではなくて、いわゆる消防団、の団員のかたがたですね。おなしです、あの鳥崎と。（ケンダンハ）十三から十五だの。十六枚着る人もあるけれども。とにかく、ケンダン付けるの、一時間ぐれえかかるんですの。人数、二人です。鬼の名前はですの、赤鬼と青鬼でですの、順序は不同でしたの、どちらから入ってもええてゆうなことでした。滝ノ浦の場合は、交替なしです。（鬼ニ山ノ名ハ）そんなこと、ねえんだっけのオ。（鬼ノ他ハ）太鼓と鈴と、それとあと、お餅を運んで歩く人と、それから、最近御祝儀あるわけですけど、その御祝儀をいただく人と、それから、その代表のかたがたと、まあ、一行、十五、六人、いたんでないですか。（カケ声デ入ル）そうですの。滝ノ浦の場合は、玄関から入らないです。座敷に行って、そしてその太鼓の合図で、あのう、その、いわゆる足踏みをすると。そして足踏みをすると、その、いわゆる藁のコゴツが落ちるんです。そのコゴツが落ちるようにして、足踏みをして、そして、やって、そして、ま、これがあのう、お参りのしるしだとゆう話でしたの、手を合わせるとゆうな、説だらしいですけども。そしてこんどは、あのう、ハゲ〳〵て。ハゲ〳〵て始まったらこんど、子どもを抱くなり、すると。そして、それ終わったら鈴鳴らして、そしてまた、帰りの太鼓を打つと出てくる。（餅ヲモラウノハ）その中であるわけですの。ハゲ〳〵とゆうなことをしたあとに、やるようですの。これは、一致してないようでした。最初にこうもらう人もいた、だったようです。ただあのう、ちゃんと礼儀があってですの、ちゃんと一歩出てもらうとか、（オオイカブサルヨウニスルトカ）なんとかゆうな、練習をしてたです。（鳥崎ノケンダンヲ焼クノハ）ただ焼くだけですの。滝ノ浦の場合も、きのう焼いたんですけども、あそこもただ焼くだけで。前は、そこで餅を焼いたり、そいから、あれですか、子どもたち、これは子どもたちの行事だから、子どもたちが、書初めをやったものを、その火にくべて、そすっと、その火くべると灰がずっとあがるわけですけども、それが高くあがればあがるほど、字がうまくなる、とゆうふな、ことでしたの。滝ノ浦も、同じようなことでした。（トリオイハ）あります。（ヤリカタハ）同じですの。（女鹿ハ）前はやったそうですが、今は、ないようですの。

三、女鹿のアマハゲを聞く

話者　高橋　力さん（昭25生）—A
　　池田正美さん（昭25生）—B

女鹿のこと

A（名ノ由来ハ）なんかのオ、あの、すごくあの、さまざまのこと、あるんだえのオ。あの、沖で、ソ連の船がほれ、難破ししたと、ど、おらほの人がほれ、あの、女鹿さ、こう、着いたわけだ。そい、男の

人が、あの、男鹿さ行ったわけだ、こんど。ふんで、女鹿と、男鹿とゆわえた、話だば、あるんだえの。

B（男鹿トノ関係ハ）いやあ、これ、ぜんぜんねえだっちゅう、なあ。

A　ねえだってゆう、なんでも、おらわからねえのオ。男と女ださけえのオ。あっちは男ださけえ、こっちは女ごじゃ……ども、ちょっと、それは、わからねえ、詳しいことだば。

A（ソノ他ノ話ハ）んーでの、鳥海山爆発した時、まじ、これはまあ、迷信だったろう、思うんでも、アシナガ・テナガっていたもんだって。でのオ、鳥海山からあの、三崎神社が、あそこの、あそこさ、足の跡あるんだいの。で、あそこさ跨いで、飛島まで跨いだとゆういわれもあるし。なんか、こんだら、やっかいな、ことわざみてえなあらば。でまた、白い鳥とゆうての、聞いたことねえか。

B　白い鳥て、ただ、時たま、ババさんいでるの。ただ、こう、わからねえもんだ、おらババ。ただ、あれ、うちらの人に伝わってんなは、女鹿とゆうものはほの、じーっと、あの、なんだ、駒止か、駒止周辺さいたもんだての。吹浦の、鳥海山の登り口になってっかや、ブルーラインの途中なかさによ、駒止ってとこさ、あのなんだか、まず今の、遊佐地帯とゆうのは、まずみんな、いたらしいだいのオ、昔は。ここいらへんはまず海だと、とゆう話もあるんだいのオ。だけえ、女鹿と、この杉沢とは、あのう、似てるらしいだ話だもんなあ。ヒヤマそのものが、面も似てっし、なんだかそんなもんも、ぜんぶ似てっべや。して、むこうは、田んぼおっきいもんだけえ、田の百姓し人なども、むこうさおったと。こっちおった人は漁師していくて、降って来たと、とゆうことだっけのオ。

A（戸数ハ）八十五ぐれえ、あんでねえの。

B　もともとは、五十、六十、ねえかもしんねなあ。あらかたそんでも、六十ちけえもんだかな、もともとは。今だいぶほれ、国道渡るさほれ、そで侵入して来たわけだこてのオ。だいぶ増えたさけえ。

A（人口ハ）ちょっと詳しいことはわかあねねや。

B　二百人ぐれえばいる。

A　二百人できかねえ。

B　まず一軒のうちから五人ぐれずつしたって、四百人か。

B（多イ苗字ハ）池田。

A（ソノ次ハ）菅原・高橋。（池田ガ多イ理由ハ）さあー、わかんねなあ。

A（仕事ハ）今はほとんど、勤め人ださなあ。

B　今はほれ、海の物もとんねくなったもんだからよ。今だば、まずだいぶ若いもんだば、会社員なってきたんでねか。前だば、みんな漁師だった。

A　でほれ、山なんかでこう働いてめし食ってる人いたもんだけえ、前だばほれ、あのほれ、ウイカテも、やらったわけだ、アマハゲも。

B（三崎ノ関所ハ古イノカ）古しなや。三崎峠って、昔からほれやっぱり……。

A　やっぱりそこもほら、取り締まったどこだもんだけえ。で、そこと、観音森とゆうとこと、やっぱり、山の道路あっただんだよな、昔よ。

B　まだ今もあれだすけんね、シャレコウベ、出るあんだ。して、青銅の刃物、発見さえたのも、三崎峠のちょっと手前だんだえな。ここはいつも、浦通りとゆうのやの。湯ノ田・鳥崎・滝ノ浦・女鹿と。まず、吹浦地区の浦通りんなってんねやの。

A（コッチノ道ガ）ええ、古い道だ。

A（雪ハコノ程度カ）いや、もっと積もるどき、ある。してほら、海岸、海ばただもんだけの、すぐこう、溶けてしもうて、泥なんかこう、ただぐちゃぐちゃんなってる。

B　一メートルもしたら、ちょっと珍しいんねえ。

A　珍しいな。最高で、ざあっとあれして、六十センチ、まあ。（イツ頃マデ降ルカ）三月、ちょっと、だな。

正月のこと

B（大晦日ハ）トシコシとゆう。三十一日のお昼から、（山ノ神様ナドノ軸物ヲ）さげるやのオ。

A（太陽ト月、神像・鏡・御幣・蚕・牛・馬・稲・麦・魚ノ描カレタ軸）どこの人来ても、それいちばん古しいんあねかあって……。どこのうちでも、こういふうな、あるもんだでのオ。だいぶ古しくなったでのオ、これ。（コウイウ飾リ物ノ名ハ）さあ、これはちょっとわかんねえなあ。注連飾りは玄関の前にさしてるだけで、こっちのほうはあんまり。してるうちもあんでも、おれのえでは、省略してもらって。（カサネモチハ神棚ノ上ニ供エル）そう。ただ、それを約して、お神酒なんかも、こういにして、（卓上ニ）祀ってるわけだ。（大物忌神社ノオカシラサンニ）まず、お供えすのは、こうゆう餅とか、それから、このスルメとか、で、御祝儀くっだりして、で、置いてぐのがこれ（神符）だねえ。

B（大晦日ハアト）ただ、あと、年越すだけ。やっぱりそば、食うなんが、やっぱりよけいだんねかなあ。年越すと、ほれ、元日の餅食べっどき、ほの、ワカミジってあんだやのオ。ここさ、部落の中さ、湧き水あるもんださけよオ、カミコとゆうんだのオ。そっから汲んで来て。前だばやっぱり、木でできたものでねえかな。今だばぜんぶプラスチックでできたもの。バケツみたいなもん。誰ででこと、ねんでものオ。ただ汲みに行って、まず縁側さ置いて、あと、中さいって、まずほれ、ごっそうのあとで飲むと。おもにやっぱり、年寄りが（飲ム）。結局、年いった人が若返ると、ゆうことでまず、新年を新たに、心を新たにして、していぐって、あれもあんねやのオ。ワカミズって、ちゃんと用意すんだ、どこのうちでも。（元旦ノ餅ハ）お雑煮。それから、あの、スマシ餅てゆうのがある。餡入ってるやつと、あと餡入ってねえやつで、このう、まず油揚げ・コンニャクとかよオ、ワラビとか、あと地元でこう穫れたもの、こういって、そいさ、餅入って、スマシ餅ってゆうんだえの。（鍋デ煮ル）ええ。（餅ノ形ハ）これはさまざまだな。そこのえ、そこのえで。一日、あとほれ、やっぱり

参拝し行ぐ人は行ぐんでるし。

由来のこと

A　なんか話に聞くとの、四五〇年前くらいから、これ始まってるとゆうわけでの。よく、わかんねえども。あの、寺さ残ってるやつをのオ、ぜんぶ調べて、こう、写真なんかとって、あのう、分類してもらたば、アマハゲってことは、四五〇年前頃から、こう、始まってるてことが、役場の人だは言うわけ。で、鳥崎・滝ノ浦は、あまり、わかる人、いねえの。残ってるようんものねもんだ、今。で、それは、一人の人聞くと、明治より、もっとあとだっちゅ、いわれもあんなあけ。すと、おらほだが、小せえ頃ほれ、あれしどきほの、十五日だっけや。

B　ん、小正月になったんだ、十五日。昔だば、こい、やったんねやの。

A　だんだん時代変わるてもんだけえ、して、六日んなったわけ。んで、今度、会社員もよけいなもんだし、じゃ三日やろうってゆうことで、三日さ、変えたわけだ。

A（六日ハドンナ日）それは、どうだかなあ。

B　いぢおう、まじ七草でまじ、いぢおう締め切りとゆうことで、えさ、切変えたと思うんだ、詳しいこと、わかあねんでも、そう思うんで……。（七日ノ行事ハ）いや、まじほれ、あのう、行事って別にねえんでも、こうゆうサゲモノではほれ、こうゆうサガリモノ、ほら……。

A　あと、門松は今日やの。

B　門松だてらかたづけるのは、今日だでんべの。こうゆものは、七日の日、かたづけんだ。

A　七日であの、正月終わり、ってことだな。で、前ほれあ、**ヒヤマ**なんかもやったやの。杉沢の、ほれ、あそこのとおんなじだ、こう、道具も全部あんなや。人いねさけやんだか、なんだこんだ、やめたはや、あとは。んー、もう十五年もなんなんねえ。

維持者のこと

B（青年ガスルノカ）うん。

A（青年会トハ別カ）んん。まだ、アマハゲ会んなってんだ、今の。

B　もともと青年会はあったんでも、その青年団が指揮してやったんでも、今現在の場合、ほの、青年団とゆうものは、発足しねえんだよな。んなもんだけえ、やっぱり、つぶさんねもんだけえ、結局、名を変えて、アマハゲ会と、一年に一回のことで、アマハゲ会だとゆうことで……。組織ってゆうのはほれ、まず部落の若い者が、まず学校、高校あがって、頃から、年のまじ、だいたい三十くるまでか。

A　前だば、ほら中学でもえかったんども、今ぜんぶ、高校さ入るもんだから。やっぱりほれ、面かぶってうちさあがってくとやっぱりこう、酒飲まさらえるわけだ。そういことで、高校生を、ちょっとの……。

B　おもに、だいたい長男だの。長男が多い。

A（長男デナイトダメカ）いや、そういこともねえな。（長男ガ主ニ

家ヲ継グカラカ）ああ。（会員数ハ）だいぶ集まった、今年な。二十人ぐれえ、いるな。やっぱり、学校あがった連中も、こう入ってきたんでな。前だあ、この、おらほうで、まず去年、おととしあたりから、まあまあ、十人、十五人ぐれえか。会長って別にいねえなあ。今まで、おらがた二人でやってきたもんだけえなあ。また若いもんでも、こう引っぱってきたわけだ。で来年からは、おらがたの年の下さ、やってくれってことで、ゆったんでも、そのかわり、ケンダンなんか編む時、手たんねゆうた時はなんぼでも行くってゆうたわけ。（会費ハ）いや、ぜんぜん集めねえ。あの御祝儀ってあっだろう。あれ、もらってぐっど、二、三日のうちか、反省会をやるわけ。来年はまたやっさけえ、盛りあげろってことで。

準備と装束のこと

A　ほっちから、いちのいちいちやっさけえ、ってことで、ゆうわけだ。してほら、あの、ケンダンてあるわけ、それ、その日にちを決めて。今年はまあ、あのう、一日の日やったんだよの。で、去年は三十一日か。で、こいからはぢーっと、一日、なるなんねかの。一日のほうが、人集ばるんだよほれ。あの、のオ、池田ソウザブロウさんの、あの、蔵あんねや、そこの二階でよ、藁、それをもらって、で編む。昔からだな。

B　んでね、最近だの。アダンでも、キモトでも、あったこともあるし。タヨでもあったこともあるし。まず、百姓やってほれ、藁少しあるうちだの。

A（ケンダン作ル時ノ禁忌ハ）いや、そいことねえね。で、ケンダン編んで、で、三日の夜ってことで、三日の三時頃から、こう神社さ集ばるわけだ。

B　あそこ、八幡（やはた）神社か。

A　まあ神社へ入って、すぐこう、新年の挨拶しるわけだ、神社へ。

B　お祓いをやって、してそこで、ほの、着替えて、してまず……。

A　で、ケンダン着て、時間がかかるっさ、ほれ、三十分、かかるか。でそれからまた拝んで、であと、お神酒飲むわけだ。

A（ケンダン着ルノハ）五人。あの、ケンダンものオ、おらほだば七枚ぐれえの、さめてんだよのオ。前だと、十二、三も着る人あるが。やっぱり、こう、体ぜんぶ、隠したもんだよ、藁でほれ。しと、今の人は足長えもんだべえのオ、しってェしばらえてあんど……（笑）。体からおおうわけ、それで。で長さはのオ、まあ、こう、だいたい編んでいって、くるっとまた二回半ぐらいの長さにし、でそれをほら、んー、七枚ぐらい、順に重ねていぐわけ、ぜんぶ。あのう、体こう、まあっでろう、まず一つ、一つ締めるわけ。で腰さまた、その上さまた重ねるわけや。三枚重ねて、であのこう、襷にしてこう、一枚。そいまた襷にし、一枚と。そい上さこう首からすぽっと、二枚着るわけ。まあ、一枚がケンダンや。で、ぜんぶ合わせたて、ケンダンとゆうことでねか。（ケンダンノ意味ハ）ちょっとそこまではのオ。

A（面ハ）あの、赤鬼とか、青鬼とか。赤ジンジ・青ジンジ、せいガンゴージってゆうんだや。でこれ、なんか杉沢あたりで、ガンゴウ、

てゆうのと、女鹿のガンゴーとこう、名前がすごく似てんだいのオ。

B　面も似てっし、そのヒヤマ（比山番楽）自体も似てるってことだな。

A（ジンジトハ）あの、ジサマっとゆう意味だってな。

B　面見れば、いちばんわかんどものオ。まじ、年寄りのほんと、ジサマみてえのもんだえの。

A　もっと、中に深い意味あんなんかもわかんねえども、現在、今、おらがたが、こう、意識してんなば、そうゆう意味だ、と思うんだえの。

B（角ハ）赤鬼・青鬼は、角生えてんだ。して、赤ジンジ・青ジンジなると、このう、眉が、こう、たれさがってんだな。長あくなってたれさがって。して、こっちもあるわけだ、あごひげか。これもちゃんと、さがってんだよな。ガンゴジとゆうのは、まじふつう、個人的に考えっど、やっぱり面そのものも見ても、なんだこう、しゃくってるゆた、ヒョットコみてだ、形なんだえの。んー、ふつうの顔ではねえからやっぱり、こう、そり形みてえだ、こう、まあ、目エ片一方こう、カシルでよう、なんだか、そんだ形してんねやのオ。ふんだもんだけえ、やっぱりそんなあから、まじ、悪ことゆう、まじ地元の、ことばでゆえば、ガンゴとゆうんだえの。まヒョットコとおんなじだよだもんでよオ。顔がしゃくってるわけやえのオ。はっきりしたこと、わかあんねんでもよオ。大将が赤鬼んなってるさけえ。

A（面ノ材料ハ）木だの。

B　なにの木だもんだ、あれは、すげえ堅え、赤味のさせる木だもんだのオ。ちょうどあの、欅の、あのう、赤味さしたやつとおんなしだいて木だもんだ。重いもんのオ。

A　んん。なんかこう、さわった感じが、どしっとこうくるような感じでの。

B　面自体は、そってはおっきくはねんでもよ、まじ、おっかねえなばおっかねえなあ。こちらの場合は。滝ノ浦・鳥崎なんて、ぜんぜん面違うもん。

A　やさしいもんの。

B（他ニ身ニ付ケルノハ）下は、まじ足袋はいて、下駄、それから着物。あと、ほんでもモモヒキの人もいる。

A（手ニハ）いや、なにも持たない。

訪れかたのこと

A　四時頃だな、出はんなは、そこから、神社から。で、ほれ、ケンダン着て面かぶって、太鼓鳴らすわけ。で、さがって来るわけだ。で、村はずれのむこうから、ずうっと、こっちまであがって来るわけ。

B　五人を中心にして。赤鬼・青鬼、すいから赤ジンジ・青ジンジ・ガンゴと。入（は）って行く順も、そのとおりや、一軒ずつ、廻あってって。（他ニハ）太鼓たたく人一人いる。

A（鳴物ハ）太鼓だけ。道を歩きながら、たたくわけ、ずうーっとこう、むこうさ行ぐ時も。（大キサハ）丸さはこのぐれえ（五、六十セ

ンチ)、あるかな。あの、吹浦で、オカシラする、ああゆう太鼓だ。しょってるわけ。手首こう、やっぱり、疲えてあれあっどよオ、手首も疲えるし、こう、かつぎっぱなしだろう、ここ痛くて。かついで、前のほうにして、そのまんまたたくわけ。一人でやるわけ。

B　斜めにやって。

A　太鼓たたくの、くたびれるんだもの。交替で。やっぱり疲れるもんだから、どうしても。入ってぐ時ほら、ダダダダッってたたくわけだ。で入って、あの神棚さ向いて坐わって、入ってしまうと、もう、ドーン〳〵と、ゆっくりこう。で、出はってくっ時も、ブァバァッっとこう……。

B（他ニハ）だいたい予備。予備ってゆうのは、すぐかぶらえるよだ人、やっぱりほれ、すぐ……。

A　疲えるもんだからよオ。

B　三人くれえいんだ、予備。あと、交替し人がほら、今年の場合は、ずいぶん人いたわけなあ。

B　うちらの場合は、ぜんぜん初めから、ど、どがどがと行ぐもんだだけよオ、うちさ、入るもんだからよオ、やっぱりほの、子どもて、まっでちゅうしなしまて、子どもて、びっくりしるわけだな。

A　まあ、怠け者をこう、祓うてことか。そうい説もあんだよのオ。

B　怠け者に泣く者だてら、（言ウコトヲ）聞かね者だてら。

A　で、入ってって、神棚こう、向かって、で、そっちから、大将からずらっと、こっちからこう並ぶんわけ、神棚さ向かって。こっちのほうさ神様あれば、こっちからこういぐ。

B　ぜんぶ赤鬼を中心にして並ぶんだ。

A　で、神様さ、こう、あれするわけだ。

B　ぜんぶ赤鬼が指揮とっと。指揮とってばほれ、ほら挨拶からなにからぜんぶまあ、やっぱりのオ、先頭にたって。

A（コトバハ）いやあ、しゃべねでのオ。だまって。

B　ただ、ギィー〳〵〳〵て。

A　ま、声出すとよオ、「ウーッ」てこうゆう感じで行くわけだ。で、足の音、ダダダダッと、こう、行って、あの、玄関から出るもんだけえ、そのままぶっとんでくわけだ。（座敷ニ）んん。で、子どもなんかいっどほれ、かもったりしてよオ。文句ってゆうよりも、「泣く子はいねか」とかよオ、そうゆことも……。

B　ただギィー〳〵〳〵て、態度で、あと示すだけでよ。

A　挨拶ってこと、あのう、そこの主人から、まあ「明けましておめでとうございます」とかすとよオ、「ウゥーッ」とかよオ、なんかそうゆう、声で、こうい声で、答えるわけだ、こっちでよオ。お神酒飲ませてもらたり、で、餅もらたり、みかんもらたり、祝儀ももらうんでものオ。あの、出あってぐっどきほれ、あの、大将がもらうわけだ、赤鬼が。んどこう、太鼓たたくるわけさ、こう、持ち物し人いるわけだ。で、そいさこう行ってよオ。で、それを、ま、貯まらないように、あまりよオ。で、ほこの家さこれ、その家がァまた他の家さ持って、また、くって来っと。そうい、あれだい。

B　ぞーもすみでして、餅は、くってぐと、御祝儀だけちょうだいして。

A（鬼カラ家ニ出スモノハ）ああ、別に、そういのはねえな。ただ、鬼が、自体が、そこのうちさはってぐってことが、お祓い、なってるもんださけ、んん。で、別に、おらだ、あの、鬼のほうで、くれるってことはねえだえの。ただ、ほれ、餅なんかもほれ、そこのえからもらったやつ、他さ持ってくってことも、あんでも。ほの、御祝儀は、昔だば、ねえどもうよの。

B　最近だと思うんだよのオ、お祝儀、ちけたのは。だけ、昔は、ぜんぶ、まあ餅、くれたわけだども。あと、だいたいまず、あれだべやあ、あのう、不幸あたり、こんちさまず不幸あたりしっと、そこのえさはまず、あがらんねと、まず……。

A（御祝儀ハ）だいたいのオ、一軒のうちから、まあ、さまざまなんでも、五百円・千円、よけえんなってきたさけえのオ。

B　いちおう、三百円以上ってこと……。

A　は決めたんだ、部落で集ばってほら。

B　たいがい五百円・千円だ。

A　時間も長げえもの、入ってる時間は。わあ、こいふだ盃で、ガーッ〳〵、ベロン〳〵でくんだふんだ（笑）。

B　ほで、やっぱり、ブチからほれ、旦那さんから、すすめさえればよオ、やっぱり、赤鬼歌ってくれ、しゃえれば……。

A　指名して、歌わねばねんでも……。前だばほら、民謡なんか歌ったわけだ。今だ、歌謡曲なんかも出やってきてなあ、若けえもんだけえ。

B　だいたい主なもんでも、民謡のほう、よけいだな。大衆向きなもんだけ、どうしてものオ。

B　やっぱり、ほんでも、今までこうやってきててよオ、やっぱり、雪、不足だもんださけえのオ、どうしてもやっぱり廻わっ時、雪ねえと、なんだか、殺風景で、よオ。

A　ほんとに殺風景のもんだ。それもほれ、雪降っても、霙だば困るんでも、さらっとした雪だばほれ、なんかこう、太鼓たたくにも、酒くれっとゆうことで、寒いもんだからほら、で、こうっと飲むがで、盛りあがってくなんでけえよオ。

B　うちらの場合も、かなり問題はなってんねやの。むこうはやっぱり、どうしても早く廻わるもんださけよオ、あのう、気分が出ねわけだ。こっちゃ来るとこんど、やっぱり時間的にもやっぱりよオ、惜しくなるもんださけよオ、かなり、どっちからも苦情、きてんだよのオ。

A　こっちではもっと早く来いとゆうし、むこうでは暗くなってから来いちゅうもんでよオ（笑）。

B　まさか、面二つも作らんねえらもんでよオ。

A　前なんか、おれなんか小せえ頃なんか、十一時頃来るんだぜえ。十一時、十一時半。まいったの、眠たくて。そいでも、おっかねくて、ブル〳〵としながらこう、いるわけだあ。昔の鬼ってものはほ

ら、きかねえもんださけえのオ。今のあれは、やさしいもの、ほんと。

B　今ほんと、だいぶ、ブチも違って、きたさかいのオ。前だばほれ、みんな囲いしててよオ、やっぱり木の囲いしてるもんだけえ、やっぱり、障害物さまざまあるもんださけえ、時間もかかんのやのオ。今現在の場合は、この囲いとゆうのは、みんなねえもんだけえ、あと、すぐ隣さ行くの、すぐ行くあんだんなあ。

B（終ワリハ）今年の場合は早かったの。終わり、時は、そん時そん時でわかんねんで、時間は。

A　だいたい九時頃だな。

B　九時から、遅くとも十時半だな。

A（アトハ）公民館集まって、で、一坏やるわけ。

事後のこと

B　まずほれあ、あと、藁で作るもんだけえ、個人の家さあがっと、この藁が散らばるわけや。

A　で、これをほれ、こう、散らばしておくわけだ。あの、アマハゲが来ると、で、この藁、厄祓いとゆうことで、でこれを、朝まで、あのう、しておくわけ。で、次の日、片付けるわけ。なんでこうゆうゆわれだか、おれ、わかんねども。あの片付けらんね、てゆうわけだな。（片付ケテ）焼くもんでもんのオ。

B　あとそのう、焼くあんでろうのオ。各個人であと、焼くわけだ。

A　どこでもえあんねがのオ。あと、それさ、お祓いを、こう、まず、なんだ……。ああ、この藁さ、家の悪いものを、もう、藁さ、こう、へまへっど、で、それをあと、焼いて祓うってことなんだよな。（藁が）吸うわけだ。それを焼けば、あのほれ、厄を祓えるとゆうわけ。そうい意味だともんでもの。

A（ケンダンハ）焼くわけ。

B　焼いてお祓いしたのよ。

A　あの海で、磯。

B（バス停下ノ）海ばたで。ただあと焼いて、拝んで、終わりだの。

A（焼クノハ）次の日。四日。

B　朝、だいたい九時頃かの。

A　全員集合で。

A　二、三日のうちか、反省会をやるわけ。来年はまたやっさけえ、盛りあげろってことで。

B（御祝儀ハ）それが四万ぐれえ、あるんだ。

A　あのう、面、ぼっごってきたのよのオ。面がこう、はげたりしてほれ。で、そのほうさよオ、ちょっと廻わしでえなあってことも、考えたこともあったんだよなあ。

B　ましてほれ、文化財んなったってへば、やっぱり自由にも、やっぱり、そういこともできねもんだしのオ。今までだいたい、反省会みたいのもんさ、こう使ったんだよのオ。

A　そういもんやっぱり、あとこう、道具あればほれ、やっぱりなおさねばねえってことがあるもんだけえ。そういだのも、色塗りかえも

さねばねえ、もあったかもしんねどものオ。あっちこっち、こうはげてきたもの。で、そいだらさも、こう廻わさねばねえ、っともってんだども、なかなか、やっぱり、終わればあと、反省会で、終わるだけ（笑）。

文化財指定後のこと

A（役場ハ）んん、だいぶ、力入れてるらしなあ。んでほんで、あのう、まあ、あのこう、観光、男鹿みてえんしてほれ、こっちも観光みてえんして、こう遊佐さ客をこう引っぱるってことも、そうい考えも、あんなんねのかのオ。

B　やっぱり、おれ個人として考えんだばよオ、男鹿と女鹿と、ここらへんのまずアマハゲだば、そったけ差は、ねえともうんだやあ。まず、だいてえおんなじだと思うんだよのオ。ただ、むこうの場合は、まじ、地域もえかった、んでろんでもやっぱり、開発、むこうがあんまりにもし、し過ぎたもんださけよオ、あとうちらの場合はあと、まずおかしくなっていたもんでよオ、ほんな差ってゆうのは、ねえともう、むこうと。まずだいたい似てるもの。そのものが。ただ、むこうの場合は、地域的に発展して、やっぱり宣伝がかなりあれ、男鹿半島で出たもんだからなあ。かなり売れたと思うんだ。

A　なんかやっぱり、不思議がる人もいたどものオ、知らね人でよオ。もし女鹿のアマハゲってことで、全国さ行ぐっとすっと……。

B　やっぱり男鹿から来たんねか、男鹿からまねしたんねかって、必ず思われんねやのオ。

A　やっぱりこっちだって、伝統を守ってこうきてんだんだけえ、昔、どのぐらいの時代から始まったか、わかんねんでもよオ。それはやっぱり、女鹿と男鹿ってことは、どっち早えか、どっちかってことは決めかねんども。おれ、個人の考えとしてはよ、観光もいいと思うんでもよ、やっぱり観光化んなってげば、遊佐の発展のためになんなんださけえ、こういった考えもあるあんだんでも、今、こういってしゃべらってしまうと、なるほどなあてことも、こっちもかたがるえたもん、ちょっとあやふやんなってくるなあ。これ、遊佐のアマハゲってことで、してくんねえかってゆうはあや、この三部落で、相談をして。そこまでは、結論まで出てねえ。やっぱり、おらがたの部落は、やっぱりおらがたのやりかたを残してぐし、やっぱり鳥崎・滝ノ浦って、そうゆう気持は、持ってっともうすよ。そこはあと話し合いでいかねばねあんねかなともう。

新潟県越路町神谷の見聞録

――「雪国の来訪神」採訪資料7――

◎採訪地　新潟県三島郡越路町神谷
◎日　録　昭和五十六年
三月二十二日（日）笠井源造家の上棟式
三月二十四日（火）高橋玉枝さんに聞く

1　笠井源造家の上棟式

○午後、棟梁ほか大工一同、当主ほか親戚等一同、屋根上にあがり、祭壇を囲むように居並ぶ。祭壇は三本の御幣を据え、その前に鏡餅・神酒などの神饌が供えられている。
○棟梁のことば「ヒトツヲモ　マゼアヨロヅニ　タタエナルタカラヲ……」
○棟梁が祭壇に酒を少し撒く。一同、めいめい拍手。
○棟梁の祝詞（大祓）

高天が原に神(かむ)づまります　すめろぎすめろみのみことをもって
よろづの神たちを　神集ひ集ひたまひ　神はかりにはかりたまひて
わがすめみまのみこと　豊葦原の瑞穂の国を安国と　平らけくしろ
しめせとことよさしまつりき。かくよさしまつりし国中に　荒ぶる
神たち　神問ひしに問はしたまひ　神はらひはらひたまひて　語(こと)問
ひし磐根・きたね・草のかき葉をも語やめて　天の磐座を放ち　天
の八重雲をちわきにちわきて　天降りよさしまつりき。かくよさし
まつりし四方の国中と　大倭（日）高見の国を安国と定め奉りて
下津磐根に宮柱太敷き立て　高天が原に千木高しりて　わがすめみ
まのみこと　みづのあらたまを仕へ奉りて　天の御蔭　日の御蔭と
隠りまして　安国と平らけくしろしめさむ国中に　成り出でむ天の
益人らが　過ち犯しけむくさぐさの罪事は　天津神は天の磐門をお
しひらきて　天の八重雲をいづのちわきにちわきに聞こしめさむ。
国津神は高山の末　短山の末にのぼりまして　高山のいほり　短山
のいほりをかき別けて聞こしめさむ。かく聞こしめして　罪といふ
罪をとがめ　科戸の風の天の八重雲を吹き放つことのごとく　朝の
御霧　夕の御霧を　朝風・夕風の吹きはらふことのごとく……はら
ひたまひ清めたまふことの由を　八百万の神たちとともに　平らけ
く安らけく聞こしめせと申す。
○一同、拍手。
○棟梁「エンツーヅツー　センザイトウ」

大工「オートウー」（木槌を一つ打つ）
棟梁「フクトクジザイ　マンザイトウ」
大工「オートウー」（木槌を一つ打つ）
棟梁「四悪退散　ジニョートウ」
大工「オートウー」（木槌を二つ打つ）
○棟梁、御幣を振る。
○棟梁のことば「きはめてきたなきも　とどこほりなければ　きたなきことはあらじとのたまがき　清く清しと申す」
○一同、拍手。
○棟梁「いやどうも」
当主「ありがとうございました」
○米・酒を棟の両端に少し撒く。御幣を打ち付ける。餅等を撒く。

2　高橋玉枝さんの話

菅谷の不動様のこと

（コレヲ祀ッタ由来ハ）ね、それはね、おらとこの、あたしの父親ですこてあの、高橋勝造。じーちゃんが、あのほれ、昔ほれ、ハサに稲ほれ、投げて掛けたでしょう。そのどきのねえ、あのほれ、あれが目に当たったがだそうです。おいで、それがもとで、おのほら、目が悪くなって、おいで、あの頃あ、今らけあ医学が進んでますのでさ、お医者さんに行げばすぐなおったかもしんねけど、ああゆう昔んことですんで、貧乏人だけあへえ、神仏（かみほとけ）にへえ頼るほかねえわねえ。ほいであの、それがもとで、あの、目がまあ失明に、もうほとんど失明に近かったらしらですねえ。そいでもってあのう、ほれ、あるおかたが、貧乏人はお医者もほら、今と違って、お医者様が数少ねえですんでの、目の神様、菅谷（すがだに）の不動様だから、菅谷の不動様に、行してみたらなじらと、そうゆう、あのう、ほれ、話で、そっで、そうでもあるかてがれもって、ほいであの、菅谷の不動様へ行ってね。菅谷はのお、あの新発田のほうですてえ、はい。こっから行くと、遠ございますいね。そいでもほれ、新潟でも、菅谷の不動様て、有名であんなさらのお。

そこでもってあのほれ、二十一ん ちか、その、もの食べねで行したわけんがえのお。水も一口も飲まないでね。ほいてあのほれ、したんだけえども、おらとこのじいちゃんはちっとやっぱしほれ、なおりてえ一心で、もい二十一ん ち間行してえと、こーいふんなって、ほいで合計のお、二十一ん ち間、三回しましたそうですて、話聞くとこらとの。今でもおらとこのじーちゃんが、あのほれ行しられた、行石（ぎょういし）がありますいね、はあ。ほいで二回目んどきもやはりものを食べねえで、行しようとゆうことんなったけえども、師匠さんが、そこのお寺様の師匠さんが、君それじゃ体悪くすると、のお、いっくら行は行でも、ものは少し食べたほうがいいがでねえかとゆう話で、それであのほれ、最初の時あ、お湯てらかね、一坏と、茶飲み茶碗で一坏とゆうことんなって、そっであの二番目の、行は、あのほれ、二十一ん ち間無事に終わって、ほいで三度目んどきあ、こんど、あの、昔のね、そ

の、お粥ですこてやのお、あのう、麦てがかね、コーセンてがかのね、お粥、茶飲み茶碗で一坏。そういであのほれ、行、しられたそうですて。そいでやはり、まあ気持のせいらか、あの、ぼんやりとそのそこらの明るいのが見えてきたてがれもっての、ほいからあのうほれ、えー、どこてがかののお、あのう、それ、なじょうんか、その目にそのの、あのお湯、湯治がええてがれもって、あの、湯治にあのほら、まあしばらく行って、そいで帰って来られて、それがもとでもって、自分がその、神様から不動様から助けていただいたとゆう意味でもって、不動様祀るようんなったがですて。やっぱし、目てや恐ろしいもんだなと思いましたえね。そいで、自分がそれが行でねえ、あえ、まあ、不動様の力でもって、まあ、目があけさしていただいたその恩返しってもって、自分が菅谷のほうからその、おうせえ、お前やひとっつの、不動様祀ってみれとゆう、許可をいただいて、ほいで、神道とゆうのお、許可ですこてやの。ほって、名前があの、高橋順道てゆう名前いただいての、はあ。そいて、ずうっと死ぬまでの。（ナクナッタノハ昭和）三十一年です。（八海山ヲ祀ルヨウニナッタノハ）八海山のほうはあとですわの。

春祭りは三月の二十八日、秋祭りは十一月の二十八日です。年に二回のお、お祭りがあって、あのうほれ、当番で御飯していただいて、四人ぐれえ当番での、御飯していただいて、ほいでおらとこでもって、あのうほれ、二階でオトキを食べて、下でもって、あのうほれ、オツトメがあったんですの。（二十八日トイウノハ）ま、不動様の、命日らしいですわねえ、はあ。わたしあのう、不動様だけあ、お御堂だけあねえ、祀ってありますけども、もうそういことは、いっさいわたし、しておりません。朝晩お参りはね、あのしてますけども、そうゆうあのほれ、行者から来ていただいてね、あの、オツトメしていただくとゆうことは、わたししておりません。

ザトンボウのこと

んん〳〵、ザトンボウてがいの。男のかた、目が見えないです、はあ。あのう、秋だそうですて。あの頃、農家はほれ、今みたけに機械がないの、ぜんぶでもって手でしるわけでしょうね。提燈をつけてあのう、ほれ、秋の稲、掛けていたどきに、ある人が、あのうほら、そのう、ザトンボウ、七人連れて来なしたとの、その頃で。ほしてある人がね、おめさんのうちで今晩この人たち泊めてもらわんねろうか、おーしてゆうて来なんしたら、おっで仕事中らろも、何人だえ、一人や二人らけや泊めてやるれえ、こいてゆうてられたろも、おめさん、七人もぞろぞろっと、ほういっで来られたんだ、おらとこへ二人でも泊まったら、あとの人はの、泊まる場所があるのかって、あのほら、おじいちゃん聞きなしたら、いいや、これから探さんばならんと。そーれや気の毒らとの、目の悪い人がこれから探すなんて、てえへんだからね、あのほんーの、夜露しのいでええとこらければ、みんなしておらとこへ泊まんなせえと、こう言わえて、それが因縁でね、ずうーっと何十年もおらとこへ、はあ、それが因縁がですて。よそのかたが、おらとこへの、あそこに行げば、不動様らんだが、泊めてもらわ

れるがないのかて、連れて来なした、てゆうのが、因縁だそうです
て。

それからの、毎年のその、春秋の、お祭りにの、不動様、お祭りに来てね、ほいで、あのほれ、唄うとうたりね、あの昔のことばでチョンガレですこてやの、今らけや浪花節ですこてやの。そういの語ってあの、みなさん喜こばして、いなしたがですて。ほとんど三味線だの。（村ノ婆サンタチハソレヲ聞イテ）はあ、喜こんでねえ。はあ、チョンガレや、たまにはね、あの頃、流行歌みたけなこともねえ、あのほれ、うたったこともありますわねえ。だいたいのお、チョンガレはのお、四十七士。四十七士のようなの、関係のお。赤垣源蔵の東下りらとか、天野屋利兵衛は男でござるらとか、厨子王丸なんて言いなしたえの、あたしたち子ども心ら、ねえたもん。ああゆう、あの、涙っぽいようなことゆうての、年寄りんどこですんだ、そういようなことゆうての、年寄り喜ばして、んな泣かしてましたいの。そうい記憶は、子ども心らろも、覚えてます。（村ノ人ハ）いや、なんにも持ってこない。おらとこで、たとい米一升でも、お金十銭でも、あの当時のことですんだあの、あげると喜んでね。あのほれ、ゴボサはさあ、目が見えねえ人は、親方んどこへ行って習うがとおんなしで、こんだ、ああゆうゴボサらてゴボサの親方があらしゃるんだ、そこへ行って、あのほれ、習って、の、ある程度、そこで修行しゃしてもろうがねえですか。

ゴボサはねえ、あーの、ゴゼと違って、ああゆう、ほれ、笠かぶってるわけじゃなし、ただほんの、ふつうの、ちょこんとした帽子ぐれえ程度でね。おして、荷物を、ほら三味線を持ってますので、三味線をほれの、よくたたんでぶて来なさる程度らんだ、杖をついて来なさるんだ、うっかりしてるとのお、ゴゼとほれ、ねえ、違うから。（家家ヲ廻ワルコトハ）ん、そんなこと、ないです。きっとあのほら、長岡とか来迎寺あたり、ね、あのほら家並みがそろてるどこらければどうだかしりませんけど、わたしたちみたけのザイ来ると、そういことはないわね、はあ。ただほんとの、泊めて、もらって御飯食べさしてもらうてゆうだけでのお。ほいで、夜は隣近所の、年寄りまあよばってくるとゆうだけなもんでの。だすけ、ゴゼと違うて、収入があるやらねえやら、わからんこてやのお。あってねえよんもんだわのお。だから数やっぱしほら、ね、泊まりに来るわけだわの。ただ御飯さえ、お風呂へ入れさしてもろうて、泊めてもらって、御飯食べさしてもらえばええ、っとゆうようなもんでしょうねええ。（泊マルノハ）はあ、だいたい一晩です。だからあの、うちの年寄りなんとねえ、あの、ええ蒲団なんて作りませんですて、木綿でもって、数作ったほうがええって。少々ぐれえ小さい蒲団でもねえ、数作らんばならんゆうてねえ。泊まるどきは、おめさん、四人も七人もなんと泊まることありますんだのお。

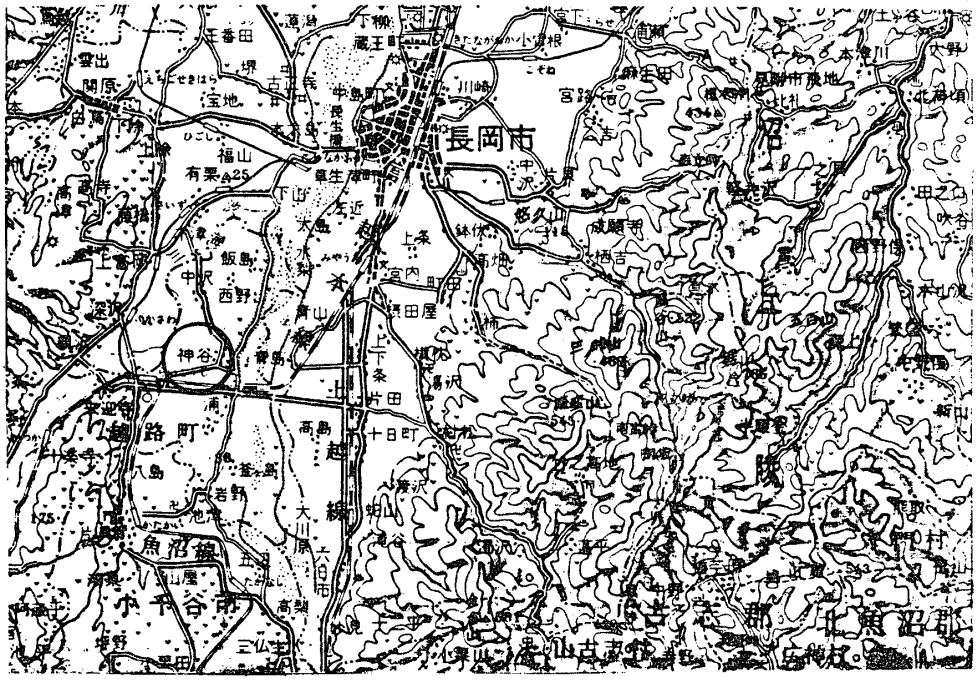
そして、なんだたて、ああゆうかた、勘が鋭いでしょう。わたしたちがめえのほうへ、あの、こっそり立つんですて、子どものどきにの。いっしょけんめ三味線こういて弾きなさると、おもしろ半分にこ

っそりと立つとね、めえ立つなッ、て。なんかすごいがねえ、ああい人はね。おらとこへ来てなしたゴボサは、特徴のことば使うてらしたえのお。アヅキボボ・チャチャ・ナガイチチらとかね。そういことでその、人の見分けを付けてらしとうの。だすけ、ああゆう人たちの、そのう、なんでえ、習慣てらか、そのう、あれがあるんだわねええ。我々にわからねえ、そのう、合いことばのようなのが。わたしたちなんか子どものことはの、あの、アヅキボボと言いなさるが。アヅキボボ来たあの、なんて。男でも女でも、小さい子どものことへえ、アヅキボボとこう言いなさるが。チャチャてや、そのまあ、フッカア(母)てこういがらろうの。ばっばことの、ナーゲンチチノチャチャらな。

ああゆうかたはきっとね、ほうぼうから来なさるがでしょう。わたしのうち、最後までいなした人はあの、ほれ、六日町でした。やはり、その、目が不自由だとての、ぐるぐる〳〵と、あれ、セキを、渡って歩いてなさるがいの。へえヤド決めておいてね。ほいて、あ、来月はあそこのうち、来月はあそこの部落らてて決めてある。こっちはね、浦村とわたしのうちの、ほいて、年にだから、二回も三回も来なさることがあるの。ほいて、あのその、四十五、六年の頃だと思いますて、ほいて、十二月ののお、あのうほれ、二十九んちらからね、来られたわの。ほいでそれも、わたしたちが寝ようとゆうどきにばっか、めがけて来なさるがで、無理もねわの、目が不自由ですんだね。おしてだいたいあのへえ、そのゴボウサが来なさるてゆえば、来迎寺のほうの人でも、わたしのうちへ人が届けてくれなさる。おらとこへ泊まるもんだて思うてなさるわけらえのお。ゴボウとゆうとのお。ああゴボウサンだけえ、神谷の不動様へ泊まるがだろうてがれもって、おらとこの玄関まで、こっそり届けて来なはるて、はあ。ほいでそんどきにあのほれ、わたしがあのほら、あんたのお、こうしるとへえ、あすあさってお正月らのにの、おめえさんも体がへえのお、年取って来たから、もしかのことがあるとてえへんだからの、老人ホームに行ったらなじらと、わたしがまあ話しかけた。そしたらねえ、老人ホームへ行ぐがやらて、怒りましたて。おーして煙管なんと割りました。おめえ怒ることいらねえと、の、今こういて二十九んち来てるとのお、来年はおらとこへ三十一んちに来るようんなるねかてが、わたし冗談で言いましたこてやのお。泊めるの、わたしはなんでもねえと、の、いっくら来て泊まろうが、ええけど、もしか体が悪うなった場合には、あたしたちも困ると、女ばっかだからの。体が悪うなったどきには、わたしはどごへそれゆうてええかわからねえ、との。そして話しましたら、そんどきはでえぶのお、あの腹立ててのお、人ばかにしてる、んーに、おら老人ホームなんてへえるがやらて言いなしたろも、また次の年、春三月に来なしたんだ、またわたしは、それ言いましたの。の、あんた憎くてわたしがゆうがでないと、あんたの身を案じてゆうがが、わたしたちも、やっぱり気が気でねえわのお、病気んなった場合には、困るでしょう。だから老人ホームらとねえ、今ええ施設があるから、老人ホームにへったほうが、あんたのためにもなるがでねえかと、こいてゆうたら、それっきりあのうほれ、来ねとこみ

ると、老人ホームへへったんじゃねえかとわたしゃ思いますいの。おーしてむこうへあのうほれ、行ったどきにも、むこうのかたにものお、そうい名前ゆうてあのう、こういかた老人ホームへへえってなさんねかねえと聞きましたけども、あのう、わかんなさんねかったわのお。それっきり、あのほら、音沙汰なし、はあ。

不動様んどこへ行げあ泊めてもらわれるて、へえ〳〵、名売ってしもうてへえ、アンジョサマであろうが、あのほれ、ザトンボウであれ、ほら女の、眼の悪いかたね、あの、ゴゼですこてやの、まあ、泊まるうちがねえてことんなると、みんなわたしのうちへ来て、よく泊めてねえ。



地図 4　「新潟県越路町神谷の見聞録」関係図

小千谷市大崩の鳥追い

――「雪国の来訪神」採訪資料8――

◎採訪地　新潟県小千谷市大崩
◎日　録　昭和五十五年一月十四日（月）
18：35　大崩小学校着（雪）
21：05　〃　発

1　小野塚勤公民館長（大7生）の話

この部落、まあ昔は、六十何戸もあったけど、今、四十四軒しかねえけど、部落はだいぶ散在してるんですてえ。この下へ八軒あるんですて。こうして、こんだ、道つけをしるの、毎朝やるんですよ。雪が降ると。これ、カンジキとゆうの、丸いのをね。昔はみんなワラグツだったから、こんな（道ニ消雪ノ）水なんて流してもろうたら、たいへんだった。（昔ハ）この部落へね、六ケ所やっぱり、各まあ隣組てがあった。地区ごとでみんな、あのう、カマクラを造ってねえ、そしてにぎやかにやりましたねえ。（カマクラノ名ハ）このへんはトリオイドウなんです。大きさは、（今ト）変わりないです。昔は、わりあい、子どもたちばっかで造るもんだから、もう一週間も十日も前から、毎日〳〵、学校帰って来ると、やり〳〵したもんです。少しずつ掘ってさあ、おーして今晩に備えるようにしたもんですてえ。まあ、子どもたちはトリオイだし、部落の衆てゆうか、まあ、今、うちを改善したしよ（衆）はそんなのはありませんですけど、昔のイロリやねえ、イロリの中でも、一晩中そのう、火の気を絶やさないとゆうことでねえ。ほしてあのう、大きなマキをくいてさあ、一晩中夜の明けるまで、火をトコ〳〵〳〵焚きながらねえ、ほしてこんだまあ、夏の農作業に備える、まあ今、こんな長靴とかあれあるけれども、その頃はなかったからねえ、ワラジだとかさあ、あの、ゾーリなど作ってさあ。（イロリデ焚ク火ノ名ハ）んー、特別の名前はないんですけども、しかし大晦日の晩とおなしで、今晩はやっぱりその、火の気を絶やさんで、もう今あ、どこのうちでもやってませんですけどねえ。そのまあ、あのう、古しい年から新しい年に移るんでやっぱり、そのう、火種をそのう、まあ昔はあいであったんでしょう、そのう、まっつ、まあ、ごく昔からやっぱり伝わってきたもんでもって、まあそのう、火を絶やさんであれしるどゆうことを、まあ、トシコシとゆうかねえ、そんなようなもんでもって、そいで続けるとゆう意味を持って、あれしたんでないでしょうかねえ。

2　宣伝ポスター（横書き・ワラ半紙大）

小正月を楽しもう

主催　大崩小学校・公民館

大崩・池ノ平部落　青年会

13日（日）地区新春書初大会

9：30～11：00　学校にて。

新年の気分新たなうちに、真白い大紙に「らくがき」を楽しむ会です。上手下手いわず童心にかえって、どうですか。用紙は学校で準備します。（一人三枚一三五×三五㎝）用具のない人も貸し与えます。課題は当日発表。「参加」に意義あり。

14日（月）新年子ども大会

13じ～16じ　学校グランドで。

13時～　ジャンボカルタ大会、はねつきほか

15時　さい（塞）の神（どんどやま）

カルタで笑い、ワラ火にあたって、今年の幸福と健康を祈りましょう。村中あつまってください。

おねがい――各戸ワラ一束、正月飾りなどいただきたい。13日にもらいにゆきます。当日は、モチ・するめなどもってきてね。（もちつき大会は、二月の雪まつりに行います）

14日（月）鳥追い

17時ごろより　大崩部落―学校グランド　池ノ平部落―稲場さん前

百姓が豊作を祈った小正月行事の代表的な鳥追いを復活。鳥追洞で火たき、モチをたべ　ゲームし、夜遅く鳥追いの歌うたって、拍子木うち、部落中の悪まを追いはらう。

村の行事として成功させましょう。

楽しく住みよい郷土をみんなの手で。人の去る村サヨナラ、訪ねる村づくり。

3　鳥追いの歌

子どもたちの歌

拍子木を打ちながら村中を巡って歌う。

〆アノトリドッカラオッテキタ
シナノノクニカラオッテキタ
ナーニヲモッテオッテキタ
カーヤヌイデオッテキタ
シーバーヌイデオッテキタ
カーヤノトリモ
シーバノトリモ
ミーンナタチャガレ
ホーイホイ　ホンヤラホーイホイ
〆オラーノムラノ　イモホリジサハ
イモーモホラズ　トリーモオワズ
ジュゴンチノアサゲ

ケェーモチナメルドモ
トリイチワオイデーネオイデネ
ホンヤラホーイホイ

以下、これを繰り返し歌い、最後にトリオイドウに近づくと、「ハラヘッタ〳〵〳〵……」と唱える。

おとなたちの歌

トリオイドウの上を廻わりながら、おとなたちが歌っていたもの（断片）。

〽アラーダイガートリオイダ
ダイロードンノトリオイダ
カーシラキッテ　シラキッテ
オーサマガーイ　ツメコンデ
キョーツカーノ　オーバーゴノ
ヘーソノシッタヘ……
ホーイホイ　ホンヤラホーイホイ
〽オラガウーラノ　ワセダノトーリハ
ナンナッテ　ナーニトリガクッタヤラ
スズメスズドリ……
アガリホーイホイ　ホンヤラホーイホイ
ホンヤラメックリメックリ
シャックリシャックリ
ホーイホイ

4　トリオイドウの中で

老幼男女おおぜいの村人が一つのトリオイドウ（十二帖ほどの広さ）の中に集まり、餅を食べたりなどしながら雑談に花が咲く。

（昔ハ）これほどにぎやかでねかったども。町内各班に一つずつこしらってさあ、ほっであのお、子どもとそお、まあやっぱりそのお、うちへ家うちが来て、おっでここで鍋かけて、お餅を煮て、甘酒とかさあ、ま、こらほどいっぺえんならんねえ。まあ（昔ト）おんなしだども、今日は、こってえいっぺえなことは、今日が初めて。今まで初めて。まあ、だって、約十年ぐれえ、休んでたんだんだんが。そでまあ、校長さんが、それまあ、おい、昔の郷土のがんの、復活しようと。去年やる計画であったども、今年は青年会がね、あいほうしてくれて、おして、こんだけのまあ、盛りあがりんなったと、こういわけだ、ハッハッハア。（十年デナク）七、八年だなあ。

えー、これは、トリメンドウ。トリメンドウとゆうことがだの、だまあ、トリオイドウともゆあんだ。昔ほれ、豊作願って、雀やね、おおゆう、農家のことで説いてるがんだんだが、トリオイドウ、それからトリメンドウ。（アノ菓人形ハ）これはねえ、ドウラクジンサマてがんに、まあ、道祖神だの。昔の道祖神を、ドウラクジンサマと言って、ほしてまあ、こんにゃ、ここへ、お祀りして、ほしてあのう、まあ、こうゆうことをやってわけです。（昔モ飾ッタカ）そう〳〵〳〵。

（作ルノハ）人形はね、あのう、なんだ、厄年、なんだかね、このの

お、年男みたいなしょおが、やってさあ、ほいでここへ、供えるが。昔っから。代表者がの。（大キサハ）だいたいねえ、これが標準だのお。いちばん最後にてえ、このドウラクジンサマて、これ厄男、これを焼くどきはねえ、これぜんぶみんな取り払って、ほして最後にほんの、あるだけのマキをみんな燃して、大火をあげるのを、これ、楽しみにしてたんだから、そんとき、おしてし、加勢してもらんけならん。あのさあ、メクリしたりさあ、百人一首取ったこともあるんだえの。ああ、夜が長げあんだんが。最後ねえ、これおろして、あそこにいっしょに置いて、おしてこれみんな、おっぱるん。そっで火をつけて、「ドウラクジンノバカメガ、イモザカヘトマリッテ、アトデエーヲヤカェータ、ヤカェータ」と、こう言って、拍子木をはたいて、やったもんだ。みんな大声で合唱しるがら。そいで終わりんなるがあ。

（トリオイハ）昔っから十四日。まあ、歌にもそお、いろ〳〵のそのう、あれがあるども、まあ昔のがんを、だいたいそれ、我々古しいしょが、教えて、まあ、歌はやってると思うがろも。だいたい、文句は、おんなじようじゃねえかな。（子ドモノカブッテイタノハ）これはスゲボウシ。オンコンボウシともゆうし。そらあ俗名らねえ。どうゆう意味かねえ。まあ、おらたんしょはオンコンボウシ。（昔ハ何歳ノ子カラ）いやあ、ほんの小せえ子どもからぜんぶ。（今ノ）児童数は十七人。

おして、今晩はもう、イロリの火を、こういのを絶やさねがん。大きなマキをくいて。小せえのは、すぐちょこちょこしねけあ、なくなるからね。あのねえ、ヒキャウツの乾燥したんど、ジロ（地炉）へでーんとくべてさあ、トコ〳〵〳燃やして、一晩中。おして、その、藁仕事したもんねえ。寝ずでのお。いや、おらも若えろきやった、若い衆がみんなやってさあ。おらっち何足作った、草履何足作ったなんて、競争でやったもんだ。ほっで、縄なった、何把なったて。あれだって、三十三尋が一把んなってる。それを何把作ったなんて、まっで競争でやったもんだ。

十五んちの朝げねえ、えー、各家庭が、先を争って、こんだねえ、ここと違うんだよ、そのう田んぼの畦を、もぐらが潜るろお。そのモグラオイてゆうものをした。ほんの、我先に早く起きて、ヨコヅチて、藁はたくヨコヅチあるろい、あの柄にさあ、縄えつけて、ほっで、うちのめぐらを、ぐるぐる〳〵と廻わって、えーなんだかな。あのう、こういのだこてあの、「モグラモチアドコヘイッタ。ヨコヅツドンノオトーリラ。ソコラヘカッツブセ」と、豊作を願うわけです。もぐらてゆうのはさあ、畦でも畑でも、どごへでもあのう、潜ってあるくからねえ、そうしと、農作物が被害をこうむるからさあ、それを防止しるあんだえね。そのまあ、お願いだこてあね。ヨコヅツドンてのあ、ヨコヅツ、殿様だから、ドノてゆうが。そしてね、トリオイの文句にもあるように、明日の朝餉はね、カイモチて、小豆粥のカイモチ、やったがら。「十五んちの朝餉、カイモチはなめるども、鳥を一羽追いでね」ってゆうようの、文句、ある。

サイノカミは今日ほれ、あのう、午後三時から、ほこでやった。

（昔ハ）十五んち、らな。だいた午後から。いや、やっぱり、部落でもって、二ケ所ぐらいやってましたね。ほしてね、正月の注連縄とかさ、あれを持って納めたもんだ。元旦のどきは公なんだ、こったあ、この小正月んなるとさあ、嫁さんやみんな、若い新郎新婦んしょは、実家へ泊まり行ったり、いろ〳〵、仏様の行事もあるし……。昔はあいだこて、ひと月遅れであった。今日はトリオイで、あしたはほらモグラモチ、十六んちはカッカらんだが。

（大晦日ハ）それもねえ、まあ、それがねえ、んー、どんなことしたてことは、まあ家庭によって違うども、まああの、シルドシ（昼年）で、取る人もあるし、そのお夕飯の年取る人もあるがんね。やっぱりね、あのう、昔っから、鮭を切ってそお、おっで、大根でナマスを細く切って、おしてこんだ、あのう、まあ、オトソじゃないが、御神酒をごっつおんなって、おっであらあ、家内でもっての、個人〳〵でやったもんだ。トシコシとゆうのはね。ほっであのお、今ねえ、除夜の鐘が鳴る、ほでまあ、二年参り、一年参りてこんだ、眠ねでて、そうてまあ、氏神様をお参りすると、これだけだの。正月の神様は、三十一んちの日、ぜんぶお飾りてものをして、注連縄とかさ、あのほれ、フクデをこしらってよ、お供えをして、ほでまあ、準備しるわけだ。それがお正月を迎える、行事らねえかと思あんだ。その前にね、煤払いをするね。煤掃きてあんで、大掃除らこてあ。

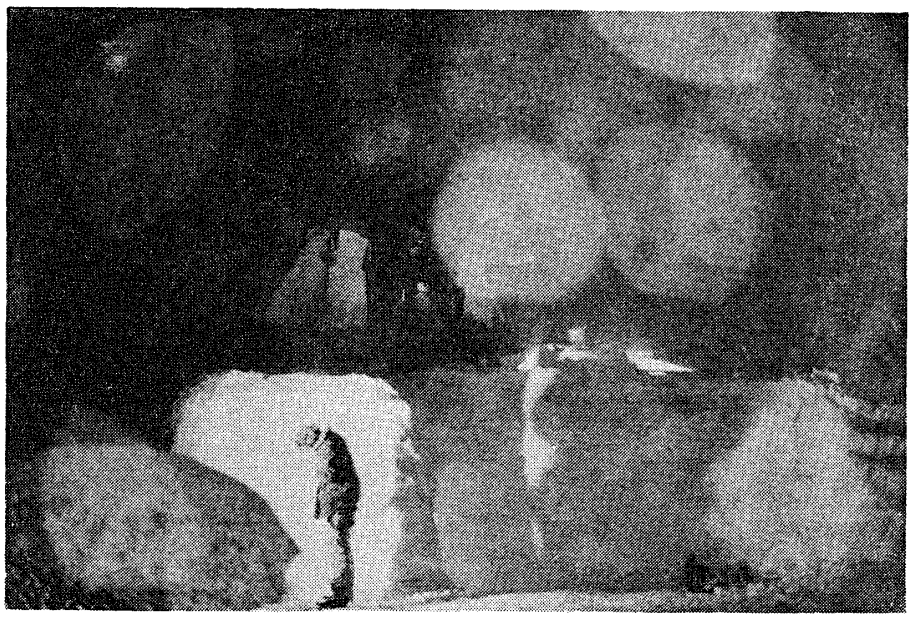
家によって、やりかたが違あんだ。あの、まあ、小野塚らとかカワイだとか……。注連飾りしねえうちもあるし、しるうちもあるしさ。おーして、昔なんてあのう、すっぱだかんなって、若水ジャクなんて、杓の柄にコブえー付けて、そいでもって水かぶったりなんかした。若水汲みてって、かぶったもんだ。自分のうちで、井戸水とか……。まあまあ、たいげえ、あれだねか、主人公がやって、まあ、せっこうの、あの若い衆がやるわけら。おして、今の新巻きをさあ、一本買って、おしてオカシラと、あのいちばんけつはあの、串にさしてさあ、おして二っつあれして、おしてあのエベスサマにあげてさあ、お供えしてさ、おしていちばん、イチノキネて、いちばん、あのそこのうちの御主人が、いちばん悪いとこ食うわけ。まあ、頭としっぽはその、さしてぐんだが、食べるとこは少ねえんだよ、イチノキネてのはねえ。そしてこんだおめさん、オツイタチの日はさあ、自分の配下がみんなそれ、本家のうちへ寄ったりなんかして、昔は……。年始らこっつあ。

おーしてこっだ、二日んなるとこっだ、お寺様や、それ、年始に行ったり……。こんだ菩提寺様があるろお、そこ、お寺へ行ったり、お寺んしょが来て、まあ、先祖の前でお経読んだり、ここあ、いろいろん行事があるあんだ。おして、クラビラキてねえ、土蔵のあるしょおは、蔵へ行ってさ、昔はみんな、お米を蔵へ貯蔵してたでしょう。籾にしてねえ、クラビラキなんかやったりなあ。クラビラキは、十一んち。そで十一んちはねえ、地主の小作しょが、年始に行ったもんだ、あの地主のどこへ。それがクラビラキ。

これはねえ、天神囃子ててさあ、おめでたいどきは、いつでもこの

唄を、みんな合唱しるんです。そのお、まあ、酒盛りのじゃしき（座敷）でさあ、おめでてえどきん、これいつもやる。いっぺえ飲んでて、これ歌うと、酔いがまあるあんだ。文句は短いあんだけどねえ。

昔あねえ、オオヅチャマてあんだ。この外へコヅチヤマってあって。地すべり地帯でねえ、ぬげえちゃって、そいから、大崩。あんまり大崩れしたんだんが、それから変えた。（イツ）それがわからねえんだ。昔のねえ、文献ぜんぜん残ってねえ。今もってねえ、大崩にゃねえ、年寄りしょもいるんども、それがわからねえが。（苗字ハ）んー、だいたいねえ、大口、それからあのう、カワイ・小野塚・渡辺だの。四っつの苗字がある。（人口ハ）二〇〇人ないでしょう。（生業ハ）まあまあ、百姓らからね、だいたい、ま、稲作り、その次養蚕。（養蚕ノ祭リハ）あれゃね、カイコゴキトウてがんね、五月の、十三んち。神主さんからお祓いをしてもろうて、その年がまあ五穀豊穣であるように、お米がたくさんといたり、蚕もたくさんとれるようにね。いや、この村じゃ、お米よりもやっぱり養蚕のほうがよけえであったんだもん。そらあねえ、昔からの、あれをしると、ものすごく行事があるんだね。



トリオイドウの上での鳥追い

能登――端竜助家のアエノコト

――「雪国の来訪神」採訪資料9――

◎採訪地　石川県鳳至郡柳田村十郎原東谷

◎日　録　昭和五十五年

二月八日（金）

06：11　鷹巣駅発（奥羽本線、特急白鳥）

15：25　金沢駅着（北陸本線、21分遅れ）

17：21　金沢駅発（七尾線、急行能登路15号）

20：23　宇出津駅着（能登線）（小雨）「佐々木旅館」泊

二月九日（土）

09：05　旅館発（角田家の車）（雪）

09：40　「やなぎだ荘」着、原田正彰氏と談

12：58　「やなぎだ荘」発（原田氏同行、タクシー）（晴のち小雪）

14：00　端家着（途中、積雪のため歩行）

16：10　端家発（タクシー）

16：30　「やなぎだ荘」着、泊。原田氏と談、映画「奥能登のあえのこと」観る

二月十日（日）

09：18　「やなぎだ荘」発（角田家の車）（晴）

09：48　宇出津駅前着

10：30　宇出津駅発（急行能登路8号、6分遅れ）

13：01　金沢駅着

14：03　金沢駅発（特急しらさぎ8号、名古屋にて新幹線ひかり一一〇号に乗換え）

19：44　東京駅着

十二月四日（木）

22：16　大宮駅発（寝台急行能登）

十二月五日（金）

06：51　金沢駅着（霙のち霰）

08：00　金沢駅発（急行能登路1号）

10：23　宇出津駅着（曇）

10：40　同、駅前発（バス）

10：58　柳田停留所着、昼食・休憩（晴）

12：43　発（タクシー）

12：58　端家着（雨、時に日差し）

18：20　端家発（タクシー）（曇）
18：30　「やなぎだ荘」着、泊

十二月六日（土）

09：37　柳田停留所発（バス）（曇）
09：56　宇出津駅前着
10：24　宇出津駅発（急行能登路8号）（晴）
13：03　金沢駅着（曇）

1　アエノコト（田の神送り）

二月九日　午後二時三十分開始

奥座敷に据えられた種籾俵の前に供え物が並べられ、主人端竜助さん（明40生）が裃を着て口上を述べる。適宜、原田正彰氏（柳田村文化財専門委員）の補足説明を聞く。

アー、田の神様、今日は、二月の九日の、お正月でございます。ささいなごちそうでございますけれども、ゆっくり召しあがって、あとで、……もいただくように、お願いいたします。どうも、長いこと、ありがとうございました。（椀ノ蓋ナドヲトッテ）なにも、ございませんけれども、どうぞ、ごゆっくり、召しあがって、くださるよう、願います。手作りの、甘酒を、お供えしましたので、ゆっくり召しあがって、くださるよう、よろしくお願い申します。（暫クシテ）それで、また、来賓を……いたしますから、ゆっくりと、まあ、召しあがって、くださいまし。名前は……にございます。どうか、もう暫く、お休みになられて、今年の、春の、田オリから、よろしく、お願いいたしたいと思います。

こうしてまあ、いっとき、まあ、お供えして、それから、まあ、一時間ほどしたら、これはさげましてそして、いただくわけやさかい、まあゆっくり休んで、あなたがたも、おしょうばんしてくださいまし。まあ、これだけのことでして。まあこれから、来月の、九日になればねえ、やっぱりそのう、田んぼまでお送りするわけなんです。今日は雪が降っとるさけえな、それが今、できんので、ええ。昔は、あのう、二月の今日がちょうど、正月の、になるわけで、そして来月へ行くと、月遅れの、二月の九日が、ちょうどスキ（鋤？）で、お送りする分になるんだ、ええ、そんなんです。だか、これだけのことなんがで。

（丸イ器ノハ）これはあのう、甘酒でございまして、糯米で、糀を入れて、そしてあのう、二日二晩ほど、なにをして、食べるもんです。（原田―ここの甘酒は、花が咲いたように、特別の、家伝の醸造法で、ちょっとよそのお宅には、ない、甘酒でございます。稲の花が咲くようにとゆう、呪願がこもっておると、思っております）。入れ物はもううちの、昔のこうゆう大きい椀は、あったもんで、これを使うて、神様のもんに使うたりしております。ふつうゴウロクワン（合鹿椀）て。（原田―このお椀がまあ、輪島塗りの素型と言われて、合

鹿椀)。

田の神様はまあ、力の神様で、労働力の規準で、ございますのでまあ、御飯も、山盛りをして、まあお供えをすっとゆうことで。小豆飯です。小豆と糯米で、こうして、作ったもんでございます。

箸は大きい箸で、食べてもろうとります。栗の木です。(ナゼ栗ナノカ)さあ、どうゆう意味かねえ。知らんけれども、まあ、栗で作るんです。(原田—来ルとゆうことだと言っております。幸せが来るちゅうなね)。おらがたはまあこれ、田の神様の箸は、栗の木にって決まっとります。新しいのを、一年にね、暮れの時に、十二月五日のアエノコトの時にいっぺん、作るわけや。鉈で削って。ちょっと、自分自分で山へ行って切って来て作る。

お吸い物は、あの、いつもならあのう、コケ(茸。コノミタケ)か、なんかあるんですけえど、今年はまだ、コケも今ないもんでねえ、エー(家)で作ったもんで。(葱ト)えー、あの、焼き麩が入っとります。これはまあ、その時のあり合わせでね。十二月の五日には、コケを、山の、そのコケを採っておいてね、コケ汁しるげやけどね。

オヒラはねえ、今年の、今日の場合はまあ、あのう、コイモっと、サトイモね、それからニンジンと、これはあのゴボウと、かあの、ヤマノイモと、ナツイモと、フキと、ゼンマイと、まあ豆腐と、こんだけ見合わして。シイタケはまあ、これぜんぶうちで作ったもんで。

魚はまあ、いつもこの、ハチメ、付くなえんだ、今年、赤いがのうてのんで、これが……。ハチメてて、あの、目えのでけえ……。(原田—メバル)。クロバチメ。赤いがもあるげやでもねえ。その赤いがあの、なかなかね、その季節んよって、獲れん時あるさけえ。(原田—あの、春は、黒で、暮れは赤とゆう、おうちもあります)。いや、まあ、それはねえ、あのう、なんですわ、魚屋のつごうでね、なんだけまあ、揃うたもんでねえと、ぐあい悪いんさかいに……。二、三日のうちにね。その、これはきのう、持って来た魚です。(原田—だいたいあそこのうちはアエノコトをなさる、だからこうゆう魚がいるとゆうことを、出入りの魚屋、知っとります)。

これはあの、ナマスとゆうて、大根と、魚の切り身入れて、ほして酢と、ね、和わして。

十二月の五日には、この他には二股大根、と、一股の一本の大根を据えるんですけど、今これ、二月は、それ、しねえわけ、はい。十二月の五日は、二股のと一本のと、採りたてのやつを持ってきて。これ、昔も、どうゆう意味も知らんけえど、昔からそうしてね、男の神様には一本、女の神さんには二股大根。それがなかなかのうてね、頃あいのええのが、ねえがで、やっと、合わしては、ま、大根畑へ行って、まず田の神様の大根採らんならんてゆうて、きれいなのを持ってきて、そして、いちばん先に、まあ集めて……。

え、これはまあ燭台で、昔から、木造りの、これは燭台で、お明りつけるとゆうので。(原田—これはあの、蝶足の御膳。貴賓を遇するためのもので)。これはあのう、昔から、こして、こっちに、うちに、

あるもんで、昔から使うとるわけで。（原田―田の神用にしとられるわけ）。でおのう、この他に、ニマイアシののも、まあるし、それから、ソウワてがも、まあるけえど、田の神様だけにはまあ、これを使うとるわけ。輪島塗りです。これは男と女の、しるしで。こっち（黒色）は男で、こっち朱は、女の。あのう、今はやっとらんけどねえ、このう、うちらのお嫁さんなあ、ぜんぶこのう、ニメエアシで、もうウチアガノニメエアシを使うとった。（原田―この焼き物も、これ古伊万里で、ちょとあそこにもあった、ここにもあったとゆうもんじゃないです、この皿は。このお花は、イチイ。最高のものだ、とゆう意味のお花）。

（原田―この依り代の俵は、これは最高の作りで、菊編みの、サンダワラ）。えー、ここへ、あのう、種籾をねえ、あのう、少しずつ、ほんの小せえ袋に入れて、入れてあるわけなんです。で、これから今、苗代つける時には、これぜんぶ出して、そして、こんな小せえあれじゃ足りんからねえ、やっぱりまだ普通のがと混ぜて、おしてまあ、田につけるわけで。（種籾ハ暮レノ時ニ入レタノカ）ええ〳〵。あのう、十二月の、五日にねえ、作って、それからあの、ずっとこして置いて、そしてまあ、三月の九日に……。（俵ハ新調スルノカ）いや、あのう、大事にして置くんです。五年くらいたっとるでしょうね。中身はこれで、五升ほどずつ入ってます。そっでまあうちらは、百姓が大きいから、えーっと、四斗ぐらい播くね。そいで、これやまあ、糯一品と、粳二品入れてあるわけ。それからまだ、よそに穫ったがあるさけえ、それと混ぜて、そしていっしょにつけて、そしてまあ播くわけやのお。昔やねえ、あのう、五俵も六俵も作ったんですよ。今それじゃちょっと、ややっこいもんださけえ、まあ代表に。これはねえ、ほんとうは、もっと小せえんでしょうがねえ、そうしたほうがええがんねえかと思うとるんがえね。どうして、一キロほどずつ入れてね。（原田―端さんのこれが貫禄やと思うがね）。

これ、オクザシキとゆうとるがねえ。仏間とオクザシキと、それからあそこは茶の間にねえ。（原田―このお隣は仏間で、朝夕、神仏両方に、この……。で、この所には、茶の間で、神棚。ここに田の神様がおいでになる）。

（雪ガ少ナイト今日田ニ送ルノカ）いやなんも、あのう、この次の、三月の九日まで、こうしてまあ置いとく。そして三月の九日には、あのう、また軽く御膳をして、そして、モリもしまして、まあ、苗代まで持ってくるわけ。（原田―柳田でも指折りの雪の深いとこで）。（田ノ神ヲ送ル田ハ毎年決マッテイルノカ）ええ、苗代田。水の入るとこへ。それあもう、この下にあるけえさけえ。（原田―こうゆう広い田んぼでも、これぜんぶ苗代にすることはのうて、こここう、小さな溝を立てて、ここをするとすれば、そこの水口へ。この、田全体の水口じゃなくて、実際に苗代、種を播く、範囲があるね。そこの水口へ。厳密なんです）。水を入れるとこへねえ。まあ、そこから、原動力やさかい。

午後二時五十二分、居間へ移動

昔からねや、「田んぼ一寸に米一石」とゆうたもんや。一寸よけい起こせば一石よけいあがってくると、だけええたくらいのもんだ、一反歩にね。こらあんた、そやさかいに、こら世の機械やないけどね、あのトラクターは、二十二ばいいつもええとるげん。そっでおらかたいでも、トラクターの者はみんなはっとるけどねえ、だいたい十五、十七がいちばんでけえん。すっとその、ロータリーがないげん。おらあ、二十二いれとるげん。二二〇〇までいれとるげん、ああ、んね、グゥーッと起こしてねゃ、ほんとにあゃ、女房どもやながってる、女の人たちゃ、こいであるあさんにゃ。それほど、田んぼはほんと、やっぱり深植えしんぐりゃ、だめあんのでゃ。ほいであんた、軽うく小せえ耕耘機に、あの、カゴシャリンみてえんしょめで、パパーッとやっとるがじゃねゃ、やっぱり見ばはきれいですけどね、やっぱりその、肥料の、分解が、こすいがかねゃ、そんでん違うわけ。そっだけは、深植えせんばだめやねゃ。(原田—共済組合、あるいは、土地改良の……だからあの、アエノコトも熱心なかわりに、農事にも精励、さすわけ)。(田ハ)一町四反。息子と孫と。おれはなんもせん。

○メモ—端家の田の神は苗葉で目を突いたので片目。それだけ苦労して働いた。

2　アエノコト(田の神迎え)

十二月五日　午後三時二十分開始

主人、袴を着て身じたくを調える。夫人に「迎えに行って来るから、着物を着替えとれや」と言って出発。右手に白扇、左手に平鍬を持つ。

○田にて

エー、今日は、十二月の五日、今年の、アエノコトの日で、ございますので、ただ今、田の神様の、お迎えに参りました。どうぞ、よろしく、お願いいいします。

鍬で田の土を三度起こす。

さあ、どうぞ、おうちのほうへ、おいでくださいませ。

歩いて来る。玄関先で、家に着いたこと、足を洗い、家に入るようにすすめること、を述べる。

○ダイドコにて

長らくの間、まことに御苦労様でございました。今日は、田の神様の、を、お迎えいたしまして、アエノコトをいたしますので、どうかよろしく、お願いいたします。しばらくここに、お風呂の用意もしてございますので、しばらく、お休みになってくださいまし。炉に、たくさん火もくべてありますから、寒さをしのいでくださること、お願いします、どうも。

炉に薪をくべ、風呂場の湯かげんをみる。

それではこれから、お風呂を御案内いたします。どうか、仲良くお入り願いてえと思います。こちらでございます。どうぞ。

風呂場の戸を開けて案内、薪をくべる。

湯かげんもしてありますので、熱ければ、出し水もございます。ぬるければ、あたためておあげします。どうか、ごゆっくり、お洗いくださいまし。

主人、いったん炉に戻る。しばらくしてふたたび風呂場に行く。

あ、ごゆっくり、おあがり、なっていただきましたので、どうか、おあがりください。

ふたたびダイドコに案内。

しばらく、お休み願えます。ただ今、お膳の用意をいたしますから。

夫人、膳を運ぶ。若夫婦がいつもしてくれるのだが、出稼ぎ中とのこと。神様二人の席を、仲良くしてもらうようにと料理を並べ、作る。

田の神様、ただ今、お膳の用意ができました。ここでお供えしてあるものは、糯米・小豆、これらの品々は、ぜんぶこっちで穫れたものでございます。今年は、寒さにもめげず、長らく、お守りくださいまして、どうもありがとうございました。なにもございませんが、どうか、仲良く、ごゆっくり召しあがってくださいませ。

主人、椀の蓋をとり、箸をとる。

甘酒も作ってございますので、どうか、仲良く召しあがっていただきたいと思います。どうも、ごゆっくりどうぞ。

主人、炉端にさがる。暫く、供え物などの説明を聞く(後掲)。

なにも、ございませんけえども、ごゆっくりと召しあがってくださいませ。どうも、お粗末さまで、ございました。これから床の間のほうへ行って、来年の、ツチキリまで、お休みを願うことにいたします。あとで御案内申しあげます。どうぞ、ごゆっくり休んでください。

午後四時五分、直会

たいしたことあねえ、こういことねや。ほんとはね、この、アエノコトとゆう儀礼はね、なるほどその神様も大事なんやけども、一年間の、まあ、たいそして田んぼ終わったと、そっで行事が終わったからとゆうことで、まあ、ブリのナマスから、魚を買うて来て、そしてまあうちじゅう、家内、直会てまあ、これから、家内じゅうしてまあよばれるてことが一つのまあ……。今だらなに、魚でも、なにでもかにでもこしらえるけえども、昔はね、そいことはなかったんだ。そいださかいに、まあどういうちでも、この、アエノコトんなれば、とか、お祭りとかね、お正月とか、いろ〳〵行事ねや、ほんとは刺身やとかナマスとか魚ちゅてのは食べらえなんだよね。今あんたはや、消費時代で、へいじえごじえ、食べるものなくなったもんでねや。

(コノ部屋ハ)これゃダイドコロ。(祭壇ノアル一画ハ)これはあの、チャノマ。この奥にチャノマがあるてがね。だけ、ここにちょっと借りるのにね。昔やダイドコにやったんやけどォ、もったいねえさかいに、ちょっと、仮の祭壇作ってェ、まあ儀礼的にねャ、するわけや。みんな、ザシキにする人もおるけえどもね、おらうちは昔から、

ダイドコにやる。うち、家内といっしょに、イロリばたにあたって、御飯食べてやっとゆう、そゆうしきたりのうちさ。だから、それをくずすのもやだしねャ。これはただ、自分のね、勝手に、ただ祭壇だけをとこう思って、仮に作っただけやさかいに、まあ、ダイドコロの一部にしてはってもろうて。ちょうど神様の棚作んのといっしょでね。おいてここがあの、ニワエンてて、ここからむこうは土間やったわけや、昔。

（種籾俵ヲ積ンダ前ノ高膳ハ）蝶足（ちょうあし）てて。昔は、高貴な人に据えた。ちょうどそれ、あのう、桃の節供んなんかに、内裏様んなんかのとこに据えてある、この、足がこれね。なかなか、これを、ふつうのは二枚足とかね、ソウワとかてお膳のだけなもあるけど……。これ輪島塗り。（平ベッタイノハ）これはあの、二の膳て。ヤシャクジェンね。前には、御膳、下に置いたんやけど、あんまり、下に置くのかっこう悪いさかい……。（黒塗リノ椀ハ）これ、輪島のね……。

男の神様はこっちのほうで、こっちは女神（めがみ）。で、女の神様には二股大根、お供えするわけです。なんけェども、えー、御膳をあのう、飾っても、この、向かい合わせんなるようにね、大根を、二股の股をこうこっちへ向けて、一本の大根なこっちへ向けて、合わせるような。そして、魚もそういふうに、おばすそうわすな、こう、両脇へいくように。たくさんお膳並べる場合あ、やっぱり、ずっと、一人一本、まあやるけど、まあ、そういように……。

これはほんと、ハチメてね。それからまたメバルとかなんとかて。これはまあ、ふつうの赤いがのうて、黒いがに。メバルててね、目えがこうでかいて、であの、めいっぱい入ってくっと。こっちのほうはあの、ブリのナマス。ブリの身と大根ののを切ったのを、酢に和わして、混ぜてあるわけ。ブリはやっぱり、魚の王様やからね。でえてえ山海の珍味ちゅて。宇出津からやね。

（マン中ノハ）オヒラ。で、フキと、ゼンマイ・豆腐と、ジャガイモ・コイモ（サトイモ）・ゴボウ・シイタケ、それだけのもんです（ニシメ）。こっちの茶碗は、キリイモ（ナガイモ）とニンジンとニンニャクと油揚げ、コケと。

香の物と甘酒と。これはまあ、お互いに、欲しいもん取って食べてもろうすねんに、ようけに出してあるわけで、はい。（一ツズツデ）ええ、仲の良くなるようにて、そうゆう意味合いで。（甘酒ハ昔カラ）はい。これはもう、糀と、糯米にね、糀を入れてまぶして、そして四日ないし五日、置くと甘くなります。昔の籾は青いげやったが、今、白糀やさかいねえ。（ドブロクダッタコトハ）ドブロクはねえェ、昔はドブロクは使わなんだ。これはねえ、あのう、こうゆう意味のもんで、辛いとゆうことはねえ、すべてそのう、少なくなっとゆうことやねえ。甘いてことは、たくさんあるてこと。ほっでそのうォ、田の神様に甘酒を作って、そしても一つあのう、ぷァーっとしたとこはこれはその、稲の花がね、こうぱっと咲くようね、みしェるけとゆう、そういふうね、その昔の人は、甘酒や作らにゃ、あもならんてて、辛酒じゃかろうなってってて。

（赤飯ハ）え、小豆飯。糯米のね。お吸い物は、あの、豆腐とシメジゴケと。オシバオスとおひたし。シメジをね。（箸ハ）栗の木削って、作るわけや。（イチイハ神ニモ仏ニモ供エル。葬式ノ時ハ松ナドヲ供エル。御膳ノ準備ハ）朝から。

（イロリノ上ハ）これは、ヒーアマ。ヒアマてがェ。まあ火返しやてが。ばァーと火が燃えても、これにかかって、高い、あぶのねえとゆう……。（物ヲ載セルコトハ）昔は載せたんやけど。ジャガイモなんかねえ、寒い時は、しみらんでしょう。ぬくいさかいに。（籾種ハ）いやだめやわいね。あのね、籾種は、あの、煙にむすといかんのや。煙に当てると、やっぱりだめやね。あっで、生きたもんやからね。

アエノコトとゆうものは、その、だえたえその、荒れるもんだ。ほんとにね、もうあの、昔から、アエノコトは……。ああ、おう、アエノコト荒れとか、オシッチ荒れとか、ちてね。十一月の二十、ま、今は早くしたりなんだり、しとるもんあるげどね。

（アエノコトノ始マリノ伝エハ）ああ、そういことあ、聞かんねえ。ずっと昔からや、ゆうとるねえ。おらあんた、小せえ子どもん時から、そっで、おらあ、もの覚えてから、おれで四代目ぐれえ、いっしょのほうでやっとったねえ。おれの親、ね、孫爺様、ひこ爺様まで、知っとるさかい。

3　ツチキリの話

あのうなんです、あそこへ、お正月んなっとォ、いろいろそのう、なんかと儀式がね、こう、かわった時んなっと、うちに、自分で作った物だけは、仏様に御飯供えるといっしょにねえ、まああそこへ行って、供えてくるだけで、蠟燭一本つけてね、ほしてまあ、神様と、仏様と、ほして燈明つけて、ほして田の神様にも燈明つけて、そしてめってただ、みんな拝むだけやさかいね。二月の九日は、これはまあ、お膳据えるしね、十二月もそういことなわけで。

そいで三月は、その二月の九日になした時には、あの、まあ、そっで出てもろうわけやさかいね。ほいでタノカミオクリやちゅててェ、そしてまあ、行って出てもろうわけやさかい、そして、その時には、自然に、はや種籾を漬けるわけやさかいね、浸湯するわけやさかいに。いよよ、ツチキリは来たさかい、漬けるさかいて、種籾持って出るわけやて、ま、それで終わりってことやて。昔はなんかまっとややこしいことでも、まあやったもんじゃろけどねえ、今はやほとんど、うちらのほうは、そいことせなんだねえ。最後はごちそうしェんね。まあとにかく、お正月ごちそうしてェ、ほして出てもろう時にぁ、まあ出てもろうとゆうだけの話やさかいねえ。その時ねあ、ただつかまえて、手ねかけってわけにいかんからねや、「今年もどうかえ米が穫れるように、よろしくお願いします。ただ今から、種籾漬けますさかい」ちゅて、ほいで、おやじがそいて持って出れや、ほしてだいじ

ゃみんなしてさんでって、誰も彼もしェん、一人してできる仕事やさかいねや。それは野良着でね。野良着でまあ、はや、今年ャ、また種籾おろすさかいちゅてて、まあ、気持の問題やさかいに、まあ、そいふうなあいですわ。

ほっで今はあのう、少しは穫れたやつで、あとの品種、ま三品ぐらいね。ほんとは昔は、ああゆう俵はあんた、十俵ばかりも作ったもんだ。一品に一つ割りでね。今あんた、そういことせんねんげえ。ほんとの、種の中の種だけやわね。（田ノ神ノ俵ニ入ッタノト）それが、と、また飾ってのうても、それと混ぜて、ま、漬けるわけやさ。種、あの、イケ作って、イケん中へ、漬けるだけや。

（イケト苗代トハ違ウノカ）ええ、そうそう。漬けてぐがやさかい。昔はね、タナイケてて、別にイケあったもんじゃわい。タナイケってね、ちゃあんと、きれいな水の入ってくるようなね。今あんた、はやそいイケねえんしもうてね。おらんどこも、そこな、今その、道路んなってもうとるげど、あそこにタナイケて、別にあったわいね、あの山から水が出るがあ。今、川へ漬けるわい。流れ水の中へ。この、四、五年前から、道路工事したり、この、パイロットの工事したりした、泥水入ってきてね、そして、じェんじェんはや、川へも漬けられんもんなった。そうすると、どっかそのへんね、入れ物にね、こうずっと、品種〳〵別に入れて、そして水張って、置いとるわけや。だいぶ、昔とは変わりましたね。（漬ケル時ニコトバハ）いや、そういことは、あんまりね。行って、持って出てあるくねや。神棚の所から、床の間に置いて、おろしてくるだけやさかいねや。（タナイケニ神ヲ祀ルコトハ）いいや、そういことは、なもねえですね。そいでなんもはや……一年やったら、そのへんな、どろ〳〵んなってもて、アカたまってどにもならんほど、ねや。それを掃除して。入れるわけやさかい。へいぜいは水張っとらんさかい。（漬ケル日数ハ）えー、そやね、あいで七日ぐらいね。昔ャイケなんか、あげなんかしてて、イケへ置いては上へのせて、置いてまた……、ほしてハッコウ（発芽？）さしたもんや。今、一週間ほどね。三日も四日も漬けると、今度温室へ入れてね、ほして発芽さしたりして。ほとんど今では、うちで苗作るの、ほんの少ないもんね。ほとんど、ライスセンター、へ行って。うちらでも、予備に少し作るだけでね。そんなたくさん作らん。昔はじェんぶやったもん。（水温ハ）え、冷たい。ああ、だいじょうぶです。あれはなんですよ、温度が十度、……？以上は休んどるわけやさかいね。そういようにできとるわけやさかい。そのために、こう、毛が生えてねええ、なかなか水をよびつけんようなしかけに、あの、なっとるもんなへんで。

ツチキリてがは、山の神様、田の神様の、その、シャニチ（社日）といってね、そうゆう、気候を知らすひとつの、なんかね、暦なんかにも社日てよう出とるがいね、そうゆうヨウを見とるわけやね。それがこんど、でえてえ、旧暦の三月の九日やからね、今の暦とはまた、でえてえ温度が違うてくるわけや。（ソレヲ新暦三月九日ヲツチキリニシテ）そや〳〵。こっで、これ、土とゆうことは、土ね、その、と

こへ、まあこれから入っとゆうひとつの、今まで休んでいたとゆう、きりを付けて、これから作業にかかるとゆう、そんな意味でねえかえねえ。ツチキリらちゅてゆうさかいね。まあこれから土に親しむとゆう、まあ休んどったァきりァ付くねェさかい。とにかく、まあ、これから農作業にかかるとゆうね。で、今までの休んどったもんが、きりを付けてェ、これから仕事にかかるとゆう、そのう、まあでえてえ、そうゆうきりやね。（イケニ種籾ヲオロスノガツチキリカ）ええ、そや〳〵。（コノ日ニ苗代ヤ田ハ）え、なんもしましェん。わたしのとこはしましェん。するうちも、こうあるらしいけどね、昔はね。でも今どうかね。タオコシは、それ過ぎてからやね。まあ、種籾漬けるが、いちばん先やさかいね。

（コノ日ニ山ノ神様ハ）いや、山へ行ってェ、**ワカキムカエ**てゆうてェ、あの、してくるだけの話でねや。行って、三月の九日には、種ももうおろさんばよ、いよ〳〵これから、まあそれもやっぱりね、山仕事に、かかるとゆう、雪の消えてからの話やさかいね、で、ワカキムカエやちゅてね。そうえーて、まと、やっぱりその、種籾をおろす、時期とがいっしょんてしたらば、その行事をいっしょにやるものよ。それが今、この頃ね、それ、気候が、あの、旧暦と新暦と変っとるからね、行事と気候が、マッチせんてことや。（何時頃ニヤルカ）いや、朝食べてお昼頃ね。今日はツチキリやさかい、いって山へ行ってワカキムケエして来にャ、ちゅてって、まあ行って来るだけなもんだ。そん時にはあの、この、お正月にね、あのミカガミを、とってあるわけや。お供えしたやつをね。そいつを持ってって、そしてあのう、据えて。山へ。ほしてまあ木伐りしなにィ、山に据えてからして、あんまあ、木伐るわけやて。自分のうちの山へ行くわけ。たいてえ近いさかいねや、自分のこの、うち近の山へ行って、なんの木でもかまわねえ。あのうォ、「いよ〳〵今年も、山へ入る時期が来ましたさかい、若木をお迎えに来ました」ちゅてて、ずぼうっとした伐りやすい木を、伐って、あの、ホイててね、マキ、こう焚くやつをね、そいつをくるっと縛って、小せえホダほどにして、ほして縛って、ほして餅据えて、ほして伐ってから、それと餅と持って来て、餅ャうちへ来て焼いて、夏食べるげえんしねや。若い木をまあ、二、三本ぶち伐ってや、ほしてこいでワカキムカエて、ほいからどんどん山へ入って、山仕事をしてもええとゆう、まあそうゆう、正月からそいにかける、その行事なやったえね。昔はそれまでは、ほんとは休んどったものやわいね。今みてえーね、こんだあんただしい暮らしや。年から年中あんた働いて、そっでもまだ、家計が苦しうてどもならんてがけえねや。昔はそんなことまでしェんでも、ほんとはえかったん。

（若木ハ）んや、うちへ持って来て、そのまま、供えるてこた、ねえねや。それでいよいよ木伐ってもええてが、それから、一年中の焚き物を作るわけやさかいね。今はマキてんが作らんけどねえ、昔は年中、焚くマキを作ったもんだ、春作ったもんだ。あれ、葉の出えん間に作らんとねえ、葉が出てくると、木の質が柔かくなって、もえよもえよ、すさかいに。（持チ帰ッタ若木モ焚キ木ニスルカ）ええ、そ

うです。あれ、ミズナラか、ナラとかね、雑木やさかい、シテとかヌルデ、なんでも、みっせえ、へや、あの、雑木やからね。（若木ヲ苗代ニ立テルコトハ）んん、それは別にせなんだね。

（餅ハ）こう、焼えて吊っとくと、黴は生えんしね。どっか、乾燥する、火の、部屋っだねえどこへね。今のことは、へえ、それほとんとねあんだども、自分ら子どもんどきは、そいでした。（餅ノ名ハミカガミト）まあ、いっしょやねや。（夏食ウ理由ハ）まあ、夏敗けしェんとかちてねや。とにかくね、その寒の餅をね、大事んして食べるとゆうことや。（食ウ日ハ）んん、そいことは決まっとらんねや。まあ、てえてえねえ、六月の、七月の十五日はあれあの、オンノキバシてゆうてね、まあ娑婆の鬼を追いましてやるために、固いもんかじりつける。そうゆうことをゆう時には、まとめて食べとったもんじゃねえ。そんかわり、なっでも、っでね、その固いもん、食べねやならん。餅でもあんた、干してかんかんねなっとるからねや。んな固い、食ワえんてみらんねえ。そうゆう、まあ歯をたっしゃにィ、試してみるんで、そんにャもんやねあ。

4　年中行事の話

大晦日前

（餅搗キハ）ええ、まあだいてえ、まあ二十五日過ぎれヤ、いい日にね、かつくわけや。二十九は搗かんねャ、クノモチてて。それから、三十日や三十一日は忙しくなって、だいてえまあ二十八日ぐれえが、餅搗きやね。ミカガミと白い丸餅。**ハナモチ**はね、こう、欅の木のね、かあの、イツキの木の、ふし木に、餅をね、紅白の餅付けてこう、クスダマみな作ってね、そしてそのう、松とユズリハとの、とこにあいそに立てたもんや。（作ル日ハ）まああの、餅搗きに。作って置いて、そして立てるがあは三十一日の日に立てるわけや。（ドコニ）いやあ、その、お花に、ぜんぶ立てるがら。神棚へもお厨子も、ぜんぶお供えすとこねは。（大キサハ）ええ、小さいもの。マユダマてばほんな、うちらのほうでは作らん。

門松はあの、松とね、それから竹と、そんでユズリハをね、立てたもん。えー、この、近くの山たくさんやさかい、近くの山へ行って伐って来て。まあ、それも三十一んち前にね。（飾ル日ハ）まだいてえ、三十日かそこらにね。三十日か、三十一日前にま飾るわけや。今みんな豪勢な作るがえねえ、町な習うてきて。

ああ、ホーライはあの、買うて来たもんやね。これ、神様だけ貼ったもんや。（ドコカラ買ウカ）宇出津の、あのう……。お寺から、お歳暮でもろううちもあるし。えーっと、あの、暮れがたの買いもんやからね、十二月の、とにかく、オオドシてて、大晦日までに、やるわけやから。大晦日に、ぜんぶ、新調するがやさかいに。神様の、神棚のとこへ貼るわけやさかいに。

（ミカガミノ重ネハ）二つ。（供エル所ハ）いやあ、それやっぱり、あの、床の間には、田の神様と床の神様と、まあ据えるわねえ。仏様には、三っつ据えるわねえ。お念仏様とワケンギュウ様とね、で、神

様には二つと。それから農耕の、この、ねややっぱり、あの、代表的にねヤ、あの耕耘機とかトラクターとかて、まあ据えてくるわねえ。（耕耘機ニナル前ハ）臼。カチウスてェてねや、米をかつ、でっけえ臼に据えたもん。それはあの、サクニワにね。作業場んどこへ、どんと置いてあったもんや。それは、厩屋に臼があるわけやからね、それ代表的にね、まあ作業場全体的に、まあ代表的に据えてるわけや。（臼ノ神ハ）さあ、なんも、別に、なんの神様とは言わんかった。カマドは、据えなんだね。昔の、あの真言宗のうちには、据えたうちあったね。お便所なんか据えねえ。あのう、よそのうちねいげァ、この、流しにもね、水神様（みずがみさま）ちてえて、据えるうちもあったけどね、まあうちらはそいことしゃねえ。

（餅ノ他ニハ）えーとあの、蜜柑と、それから串柿から、栗あるやね、まあそれぐれえやね。お神酒はそれ、いつも据えます。そやども、これは神様だけやね。あの仏様には、お神酒据えとらん。ぜんぶあの、神棚の掃除から、御内仏のお厨子の掃除からやね。そしてお供えして、そしてまあ、一月元日の朝を、おもやるわけや。

（大晦日ノ特別料理ハ）ええ、それはあのう、オオトシのごちそうちゅてね、でえてえまあ、まず魚とかねえ、お神酒はもちろん、買ってきて、据えて飲んだりね、神様にも据えるし、みんな直会でいただくわけやね。晩です。（揃ッテ）ええ、そう〳〵。これはまとにかく、出稼ぎに行っとっても、みんな戻って来るさかいね。（決マッタ魚ハ）別に、そういものはねえね。でえてえ、はやりのもの、買うてくるわけやさかいね。

（寝ルナトカ起キテイルナトカハ）いや、まあ、とにかく、寝んがいね。まあ、寝んとゆうことは、朝早う起きるとゆうことやわねえ。前はあんた、ここからあんた、夜中起きして、イワクラさんまで参りに行ったもんだ。うちらはまあ、おおぜいいるさかいね、お宮さんへ行くもんと、お寺へ行くもんとね、分かれて。若えもんな、羽咋の気多大社へ行ったりね、してくるけど。

正月

〈一日〉お正月は、あのう、まず一日にはね、あの、お宮さんをお参りするねえ。ほっでねえ、そのう、昔そのう、この在所の神様はそのう、ボタモチてェてね、あのオハギ、を作って、食べて生きて、まあその後、どっか出雲になんか、それ作らなんださかいに、こっち来たんやてゆういわれでね、でそれはかならず、朝オハギを作ったわけや。そで今、せんねんねや。なあ、じゃまくさいさかいな。それで食べたがらんさかいな。それでそのう、軟かいそのう、餅とお湯と、混ぜて、つき付けておして、オハギを作ってね、そしてお宮参りね行ったもんや。（白山様へ）ええ。**ワカモチ**、を供えたもんや。朝作るねんやさかいに。それがあんた、十二時が、夜のまあ零時やわねえ、零時になるかならんに、そいをこしらえてェ、おしてまあ持ってくと。（各家デ）ええ、そう〳〵、みんな作って。二っつまでねえ。食べるのはいくらでも、たくさん食べるけども、ま、お宮据えるのは、二つだけ、二個だけ持ってって据える。（入レ物ハ）えーお重にねえ。供

えて、そしてそのまんま持って来るわけや。誰も、置いても、どもならんさかいねァ。（家デハ）ええ、みんなで食べてねえ。ほいでまず、お宮さんにこういやつ、二個作る、それから神様に二個、仏様にま二個、田の神様にも二個と、作って、その他にもまだ作るけえどもね、そしてまず、そんだけは据えてね、ワカモチてェてね。ミカガミ据えたあとにね。今それやらんなけ、じゃまくさがってねャ、オカザリへえこしェて置いて、昔のミカガミの、小せえミカガミ作って置いて、持って行っとる。

（正月ノ神ハ）んん、それァあのう、床の神様を、正月神様ちゅうてまあゆうとるわけや。まあ床においでるもんだと思うて、まあやるわけやさかい（特別ナ迎エカタハナイ）そう〳〵。床の神様やて、まそのうちを代表した、うちを総カナイにした神様と、お厨子は、お内仏は仏法やしね、シンミは神様やさかいねャ。ただお参りするだけや。（田ノ神様ノ供ェ物ハ餅ダケカ）ええ、お正月はねえ。一日は出ん日やちて、寺参りに行くだけで、出なんだわけや。別に、特にワカミズクミとゆうこと、やらんだねャ。

〈二日〉お雑煮はあのう、二日の朝。（ドンナ雑煮カ）ふつうの、昔の、餅搗きで搗いて作って置いたわけ。

ネントウ（年頭）は昔あったね。これはあのう、ミカガミ持ってェ、とお酒を持ってェ、親類のうちへ行ってよばれてくるわけや。それはあの、七日前にやったもん。一日は出られん。二日の日から。二日から三日、でえてえ三日からね。

（子ドモノ遊ビハ）さあこれ雪深いさかいねえ。だいてえパッチ打つがやちゅてて、そんなもんあんまりえェがはねえや。縄飛びしたりね、まあそれぐれえのもんじゃわい。それから、年寄りどもは、バクチこくまねして、あれはようやったもんじゃわい。

〈四日〉仕事のシゾメは、あのう、四日。なんでも、ちょっこり、今日はシゴトハジメやちてェて。まあシゾメちゅて簡単にゆうてるがやけど。（田仕事ハ）いや、あんまりせなんだね。んなもん、そいこたァ、雪や深えさかいに。（フクマメハ）そいもん、作らんねえ。

えーとそのう、お供えをぜんぶおろすわけや、四日の日、サンナバ済むと。（ソノ呼ビカタハ）いや、別にそう、呼び名てことはねえけど。

〈七日〉七日の日はねえ、七草で、やるわけや。四日の日ィ、ぜんぶおろうてもうわけや、ここらはねえ。そいでそれを、こんだあのう、七日の朝に、ね。でまあ分けて食べるんやがねえ、七草と。

〈十一日〉十一日には**タウチ**てってね、これや田の神様の、ね据えてあったもんな、十一日には、タウチの行事てね。あのう、いちばんねや、まあ、今こう、やらんけど、前ねこのう、なんじゃ、成りもんの木のとこへ行ってね、こう柿の木とか梨の木とかゆうてね、そこへ行って、こうヨキにうちたててねャ、伐って、伐るまねしてねャ、ほして、子どもはそれ連れだってってねャ、あー、「その木伐ってあがか」てェて、まあゆうわけや。「おー、こんなもんな、今、成らんさかいね、伐ってやっ」てて、まあおやじはゆうてや、ほしてまあ、ヨ

キ持ってって、打ち込むわけや。おーしるとねャ、ほうせんせや子どもがおって、ゆえてもやさかいねャ、「はー、今年はうんと成っさかい、こっで伐らんでもえっしェんしェ、おいしェんしェ」て、「おう、そうか〳〵」ゆうて、「ほんななら、成るなら、伐らんねェ」、ほいでその、十一日の朝のお粥をねェ、お雑煮を、餅と小豆と、入れたやつを、それ持ってって、それにも付けてくるわけや。そいことやったんねや。（田ヲ打ツコトハナイノカ）そや〳〵。それをね、餅になぞらえてねャ、食べるわけや。何枚打ったとちてね、たくさん、元気のいんは、うんと食べれちてェて、そいってやった、食べたもんだ。

〈十五日〉で十五日は、あの、**タウエ**。それも、田の神様ねェ、あやかって、ただお餅をねえ、供えってだけやさかいに。これはあのう、昔はあのう、野で藁してね、苗をゆわえる藁をね、こう、こでもって切って、そして、軟かいに打ってね、ほして持ってって、こう苗取っては、こうからげたもんや。あれをノデワラてがん。祝いの藁はねえ。それをタウエの朝ま、たたいたもんにャ。打ってこれ作ったもんにャ。ただうちでやるわけや。前の、リョウバヤゆうてて、藁打つとこあったがねェ、そこへ行ってたたいてきてャ、そして、さあ、ノデワラすんななあ、もちわりめえかしてて、ホドに、ためたわけやね。（作業スル所ハ）まあ、マヤてゆうとる。

（門松ヤハナモチヲ飾ッテオクノハ）これはあの、十五日まで。（アトハ）んーとあの、焼いてくるが。あのう、川の縁（ふち）へ行って。各うちで。（ドンナフウニ）いやあ、なんも。焼いて。あの、もってえねえさかい焼いてくっとゆうようなわけで。そいでその時にこのう、お花もぜんぶ立て替えてね。松とユズリハと、立ててあるが、それはぜんぶ持てって。

〈十七日〉**ニワマツリ**はあの、十七夜っててねえ。十七日の晩なニワマツリだったい。これは、やっぱり、その、こんどァ、甘酒作って、そしてあのう、小豆のイトゴズリてって、あのう、昔は大根の寒ざらしを作ったもんだ。それと小豆とね、煮たり、カブラと小豆と煮たりした、イトゴズリてァこしェてね。お汁の汁てかくがらね。そいもんの、よばれたりね。そのう、村で集まって、やったもねやけど、今は、なんもやらんね。昔おらがたでやったは、十七夜祭りってって。で今、お宮さん行って参るだけやね。十七夜祭りて、そいでニワで祭りしたわけや。それも各、トウを決めては、当番決めて、ニワにやったんやけど、今やらんね。ただお宮へ行って、十七夜の祭りに宮参りしてくっだけやね。（神棚ミタイノヲ飾ルノカ）いや飾っとこもあってげけどね、おらかたせなんだねえ。あの、重年（しげとし）やね、今でもその、伝統的にやっとるらしい。

ムコイリ正月は、昔はあれはいつかやったなあ。十五、六日頃、二十日前にやるがえねえ。お神酒とオカザリ持ってって、よばえてくるがん、ま、ネントウと変わらんもんやね。ただ婿さんが、嫁もろうたうちへね、婿さんが挨拶ね行ってくってだけのことで。嫁さんも来てや。おいでそい時になればね、昔はあの、新しく来た婿さんが初めて、来た時には、みんなを呼んだわい。部落の人を。今日、おらムコ

イリやさかいに、来てくだっし、てェて。そして酒よばれてね。それもそんな、お膳てが、たいへんせんねえ。ちょっとその、簡単なおつまみぐらいで、こばってね。そして、祝うたもんや。（客ハ）いや、なんも持ってがん。

〈二十日〉（小正月ハ）二十日。それはなんもその、昔みんな、集まってそして、まあ、ありあいのもんで、のばえたわけやねャ。部落の人がね。どごへでもその、お互いに、自分の、友達どうしして。おらあヤッコ正月てゆうとるがえね。小正月はねャ。もうこいで正月は終わったと、とゆうことでねえ。（若衆講ハ）ああ、そいことはせなんだねえ。

二月

〈九日〉アエノコト（九〇ページ参照）

三月

〈一日〉その次にはカサネノツイタチとゆうて、それ、三月の一日はね。これャ、二月の一日は元日やさかいね（旧正月？）、三月なると、もう一つ一日がきたとゆうことで、カサネノツイタチとゆうが。それもやっぱりそいもんで、ただ、行って、どっか飲みに行ってくるかね、集ばって餅でも食うか、酒でも一升、仲間で買うてきて、なもこやってるだけのもんでねえ、別にそうゆう、たいした行事ちゅうことはなかったねえ。

〈九日〉ツチキリ・ワカキムカエ（九六ページ参照）

（山祭リハ）ねえね。（彼岸ハ）いやなんも、ただ、お寺へ参りに行くだけやね。

四月

〈三日〉ショクは四月三日。これはあの、むこうの谷の弓曳き祭りや。それが四月のショクマツリや。弓曳き祭りや。ショクてがね、やっぱ、サンショクの、祝いててゆうさかいね、結局、春と、盆と、暮れやからねャ、こう、季節に分けとるわけやねえ。春の節供は四月の三日やるわ。それから盆の十五日とねえ。それから、あのう、カリアゲやさかい、十月の二十、いっかぐれえだかねえ。まあそいふうなことを、昔からサンショクてが。それから二十八日を、でえてえカリアゲてゆうたもんや。十月のね。そやけん、このへんね、餅搗いたりなんだりして、やることてんなあ、やっぱり、ショクと、四月の三日と、それから八月の十五日は盆の節供や、それから十月の二十八日。これはまあ、カリアゲて決めたもんや。カリアゲモチてェてね。これも、町かたの、親類のほうへ、行ったもんやわい。

（高山祭リハ）ない。（エンタイ日ハ）エンタイ日とは、どうゆう意味やろ。

〈八日〉（甘茶ノ日ハ）それは、あの、禅宗の衆がやるわけや。あれ、四月の八日かねえ。これ、宗派によって違うねえ。ここはねえ、曹洞宗はあっしね、真言宗はあっしね、それから浄土真宗とね、今、創価学会てがもあるしね。

五月

〈五日〉春祭り（一一〇ページ参照）

六月

〈一日〉このへんなら、わたしのうちの**オオダウエ**をやったもんです。まあでえてえ、決まった小作人とゆうのは、五、六人おったわいな。あっで、ほんとうの小作てがは六人、あったわけや。そんにこんだは、ちょっとしたなには、なんやねえ、十人おるは。その他にこんど、その隣の親類のね、ユイててゆうてね、オオダウエで行ったり来たりするがは、六軒もばかりもあるかね。そうすると、十五、六人とゆうものは、集まって来るわけや。それやまあ初め、ぜんぶ、今日はオオダウエすさかいちゅててェ……。仕事は、あのう、朝からやるんです。朝あんた早いですよ。朝四時頃ね、起きて。そして女の人は苗取りや。うちのおかみさん取ってくるわい。まあ、してくれあ、苗を取っ時ねや、まず、ひだいて（左手？）ね三把取ってェ、ひだいてね植え（置い？）て、そしてその取りあげた苗は、このう、田の神にしいてねャ、田植えの田の神様にしてェて、これを神様のほうに持ってきて、そしてあの、エブリデちゅうてこう、地ならしするやつにねや、それにお供えしてね、そして、**ホーバメシ**を据えて、それはやったもん。（苗ハ）取って、それ置いとるわけや。いちばん初めに三把取った苗を。（ソノ苗ノ名ハ）いや。稲、刈りあげすっ時にや、カリアゲタバとゆうけどねや、別に初めの苗やそんなことゆうとらん。（ナゼ三把カ）三てことは、なんかね、いろいろ、なんでもみんな三じゃてことんなっさかいね、そうゆうふうなことゆうがやねえけえね。サンドウスとかね。男の人はサキテてねや、それ入れるままの地ならしを。それ一日なったんやそう。

（苗ヲ供エルノハ）それはお昼。ちょうど十二時。お昼の十二時に、さあ昼やと、昼飯食べなけや、まあ田の神様に据えてかかってってて、ほして、ちゃんと苗持ってきてね。場所はこの、うちのニワエンててね、こういとこにね。ここは、ニワエンてがなるわけ。ここは昔は土間やったがん。まあそのへんにね。え、柱んとこへね、エブリ立てかけて。あのう、エブリてェてて、おしたたくが、あれはあの、田んぼの農作業、仕上げる仕事なんや。使うとるやつを、そのまま持ってくるわけや。この、おすとこは下になるわけ。柄が上んなるわけや。そいでその前に、あのう、洗うた苗を、こして、これただ三把据えて、そしてそれからそこへあのう、黄粉かけたねえ、あのなにやな、ホーバちゅうてね、朴の木の大きい葉やね、ホーバメシこんどあのう、供えるわけやね。そしてまあ、いちおう、さあヒルノママになったちゅことをまあ、田の神様に報告し時、めでてえようなわけやえてね。まあこんでや、田んぼの、すべて作業そのものに、神様とゆうもの、付いてまわっとることなんやからねえ。（田ノ神ハ）いや、あの、ここ（ニワエン）には（フダン）祀っとらんわけ。田んぼへ、植ー時にや。それャ田んぼの道具を持ってきて、やるわけや。

それから奥に二間、あの、お膳をま、みんなして、ぜんぶ仕事した人がよばれるわけやさかい。子どもまでも来てね。ほんのオクザシキは、昔のオクザシキは、仏間とほんのオクザシキは、これはあの、シンシキョウかなんか、神主様か、まあ早い話が、うちのシジュウサマ

が来た時、かなんか、うちねでけえ行事がねえ時に、あげなんだもの、床のうわェへね。その次に、このナカノマてがんここに十帖間あるがと、チャノマてがここに十二帖半の間あるが、そこまで開け広げてそして、ずうーっと。ほっでね、そのうちの子どももね、ぜんぶいっしょに来てね、そして、その飯をよばれるが、それうれしいげえね、やっぱり。（ソノ宴ハ）**サナブリ**ちゅてゆうとるねや。サナブリてことばは、まあ、納めた、てことゆうがかいね。まあ、サナブリ〳〵ちゅてゆうがい。そしてそれがこんど、最後に終わってしもうとまた、こんどあのう、いよいよ、今日はいついつかのサナブリじゃちゅうて、えーたもんじゃわい。それでその、昔は、やっぱりそのう、でえてえ、あの一日で終わったもんだ、田植えはねや。そいでそのう、サオトメでもあんた、十五、六人ねえ。それでそれを、男の人も十人ばかりいっしょに。それあ盛大に、オオダウエてやったもんだ、昔は。

（サオトメノ服装ハ）んん、昔はね。ま、絣にね、このう、一幅襷やってえて、ふきんねャ、その若えもんな、帯みてえんしたもんな襷にかけて、赤えがまたかけたりしてねェ。それからそれが中年になっとこう、合わしてね、そうするとええができるもんや。して、いつもやるわけや。けどまあ、ほんとうは、その、ええ、赤え、その、新しく新調するてがを、オオダウエからおろすわけやさかいに。（田植エ唄ハ）んん、めえにャうとうたね。これあのう、タウエウタちゅてね。そで、今、うとうものおらんねえ。おらあ若え時にャ、ちょっこり覚えでやっとったけどね、今でははや。（文句ヲ覚エテイルカ）あー、あんまりねャ。（太鼓ハ）いや、たたかねえ。唄うとうて、まあ、えーてや、ちょっこしソートメに元気つけるってだけなんや。（ウタウノハ男カ）そう〳〵。女もうとうけど、ええ声の人は。

（ホーバメシハ）うんそや、これはねあのう、朴の木の葉に、黄粉をつけ（タ飯ヲ入レ）て（包ンダモノ）。あれも、今のもん、あんなもん食べるもんおらんね。このう、まあ、タバコてえてね、中間にね、お昼とォ、あの、朝めしとお昼のあいねェ、おなかすっからァ、ホーバメシやちゅて。それからそれめえねあのう、**タキリモチ**やとか、アユモチてがん、それも、中ほどにやるねやね。タバコてええて。中間にやるわけや。朝めしとお昼のあいにね。餅やあんた、畦塗りにゃアゼヌリモチやし、田ァ切っ時にヤ、このナカギリねャ、これゃタキリモチてええたもんだ。この、ナカギリすうことや。いっぺん起こいたやつを、また砕くわけや。タキリや、タカギリだちてェて。今ね耕耘機やもんの場合やもんだばァ、それ……。昼からはコビィてってえ、また夕めしまでのあいにまあ、重労働やからねえ。

昔は（田植エハ）六月だったけどね、今、五月の中旬頃へいくと、たいてんなるわね。今では機械やしねェ、そういことはあんまり伝統的に、やかましゆわんようんなったね。は、センターから苗やきたさかい、ええんか、てゆうなもんや。それから、こっちから注文してねェ、いつごろ、つごうええさかい来てくれとか、そしたらその日ええてるとかええとらんとか、ま、とにかく、まあ、機械に、気候におさえらるのうで、機械におさえられてくわけて。

〈四日〉（五月ニショウブノショクハ）んん、これャあのう、五月でねえ六月。六月の四日。これはあのう、ショウブを刈ってきて、ヨモギと、風呂ん中入れて。ごちそうは食べんと、餅を食べるげんねや。ササマキダンゴちててエ、糯米のをねえ、こうこんどきりっと笹に巻いてねえ。保存なきくさかいね。まあ、ほとんと、なんじゃねえ、農耕儀礼てものは餅や付いとるげやねえ。

（ノヤスミハ）ああ、ノヤスミもやっぱりそいことや。これはあのう、部落でみんな、田植えみんな終わったら、ノヤスミしめめで、バンドまあいて。こうずっと、触れ廻わいて、そして、いっかからいっかまでノヤスミしてくれちゅてゆうて。みんなこうたえげえ見ておって、終わったもん、からねェ、見とってから、そしてまあ部落中、自分の好きかっての、旅行に行ぐなり、どごへ行ったりねャ、まあそうゆう、へえまあ三日ほど、二日、ね。昔ャ三日も四日もあったけど、今ア二日やね。（田植ェ終了ノ祝イハ）それャ、ノヤスミの祝いまで、なもしェんねえ。てえげ、終わってもうた時にはやっぱり、うち中してまあサナブリやちてねャ、ぜんぶ終わったとゆう、ことはしたけどねャ。そやただ、それもごちそうててなんでもありやせんで、今はそなものァめったに、作らんないね。サナブリとゆう名前のがえ。ほっで、サナブリちゅてええたことは、一日で終わってもや、その人そのうちのサナブリやからね。そっでまあ、昔は、なるだけオオダウエに済ますようにね。人間の集まらん場合は、先にこうてやっておいてね、コマワリダちゅてええてや、先に廻わっておいてね。

七月

〈一日〉オニノキバは、これはあのう、六月、ま今でゆえァ、七月の一日やね。ツイタチ、オンノキバて、これは昔あのう、米をね、米を炒ったり、固い餅をね、とにかく食べるわけやね。米を炒って、イリガシ作って、食べたりね。

虫送りも、七月の終わり頃ね、ちょうどあの、ニカメイチュウの頃、季節やわねャ。えー、そや、あのう、ニバンドリやないでさかい、七月の、なんじゃね、あっで、昔はやっぱり、七月の十日頃かねえ。苗やこれくれェ伸びた時やさかいね。それャやったわ、昔やった。これはタイマツつけてねえ、ほーして太鼓たたいてャ。カヤにね、カラをこしてからげてャ、ほしてズイへ火つけて、ほして長持ちするようにして、持ってくわけや。太鼓、ダンカ〈〈〈〈たたいて。そして神主様に来てもうて、祝詞あげて、幣こしれェてもろてね、そしてざあっと村のカシラから、スソまで送ったもんや。そしてその火持ってって、自分の、田んぼ〈に立てたもんや。神様の札だゆうてね。（ソレヲ立テルト虫ガ）来んてえてね。今は虫送りてしェんね。今、農薬万願一色。

〈十五日〉ほいで十五日はギオンててゆうたがやしね。ギオンはこれ、お寺参りしてね、そしてあの、なにしたわけ。所によって、よう踊りね行ったりなどしたけどね。

〈十六日〉秋祭り（一一〇ページ参照）

（ミトノ下ヲマタガレヌ日ハ）さあ、わしら聞かんね。

〈三十一日〉ミナヅキは八月の三十日。七月の三十一日が、ミナヅキの日。自分の秋祭りを、ミナヅキマツリてて え、それを八月の三十一日にやる場合もあるし、七月の三十日にやる場合もあるしね。これはただ、あの、お寺ぐれえ参りに行くだけやね。ただふつうの祭りらね。秋祭りをかわりにだえてえそのミナヅキマツリてゆうたもんや。そやけェ、うちやとこは、部落でやってことねえわけやねえ。そうゆう日やて、休むだけやね。そいからあのう、南志見のほうへ行けや、祭りするんや。

八月

〈七日〉七日は、まあお墓の掃除してねえ、そして、うちの掃除をしたりする。だいてえはやるわけや。

（草刈リ日ハ）別にそんな、草刈り日てことあ、ないけどね、ちょうどそれァ、盆の前にねえ、お盆の前に、毎朝草刈ったもんや。ところがその盆三ケ日休む、ために、刈ってためて置くわけや。（牛馬ノタメニ）ええそう〳〵、馬か牛やねえャ。今なんもおらんもん。

（盆ノ買イ物ハ）それちょっと前にね、お盆にいく前に。まあ、でえてえ、十日か十二、三日頃までにね。でえで、今あんた、毎日、自動車あっさかいに、さあっとはや、すぐ行ってくる。前には、歩いてね、よんこらさと、かづいて来たもんだ。

〈十三日〜十六日〉ほしてそれ十三日からは、あの、晩からはお墓参りして。盆礼は、あの、盆のうちに、ま、行ってくるわけや。盆踊りはやっぱりお盆にね、まあ十五日。チョンガレ節やとか、タカサマやとかちてまあ、今、なんか……。それで十六日はショーライオクリやちてえて、はや仏様を流すわけやさかいに。三日間の。（コノ前ノ）川へ流いた。で今ァ流されんようなった。（盆ギリコハ）いや、これも、あるとこもあるけども、このへんではやらねえ、この部落なんか、まあやらねえ。

〈二十二日〉二十日盆はねャ、おらかた、あの、二十日盆てえてゆうたらあんだね、二十二日がボンオサメちゅてゆうから……。それもただ、休むだけやねえ。寺参りに、まあよう行った。お盆てがァ、結局、仏事がおもやさかいねャ。

九月

〈一日〉**八朔**てがは、あのう、九月の一日やねえ。これはねえ、あのう、今はやらんけどねえ、昔はあのう、新米をトリゴメしたもんや。この青い稲を刈って、で、した稔った刈ったやつを、そらあのう、自分でお米ねしてねえ、まだ青いやつを、それを神様に供えたもんや。うちの神様に。床の間にまあ据えれば、田の神様にもなるわけやし、つねと神仏にね。八朔のツイタチてゆうて。（ソノ稲ノ名ハ）いいやあの、マイコメちゅうたね。うまいことや、うまい米やと。それはねャあのう、またそのナマシネや、てゆうの、まだしっかり稔らんやつを、こんた、炒りってねえ、こがして、そしてこう皮むいて、ほして、玄米、あの粉糠もってた食べるさかいねえ、甘味あったわけやて。でうまいやさかい、**ウマイコメ**ちてゆうたもん。（神ニ）供えて、いくらか作って食べたわけやさかい。（初メニ神ニ食ベテモラウノカ）

そうや〳〵。

（十五日ハ）なんもねえねャ。

秋の彼岸。お寺参りだけやねえ。

（馬祭リハ）このへんな、ねえねャ。

十月

〈十七日〉新嘗祭（一一〇ページ参照）

いや、まあ新嘗祭ちてえ、神主様来てェ、そして神主様にお祓いしてもうて、するだけやねャ。お宮へ行って。（秋祭リトハ）違う〳〵。秋祭りは、でえてえ、あのう九月やしねえ、今、七月でしたりしとるわけやさかい。新嘗とゆうがは、十月、か十一月の間に、やるわけやさかい。

ゲンゾマイリてがはあのう、お嫁さんでもお婿さんでも、初めて氏神様へ参った時がゲンゾマイリてが。それァ、祭りのある時に、自分のつごうに合わして。春祭りでも夏祭りでも、秋祭りでも新嘗の祭りでもだい、とにかく、みんな部落の人がじェんぶ集まったとこへ、披露に行くわけやさかいに。新しい人だけやね。初めて来た人やから。お嫁さんならお嫁さんのゲンゾ、お婿さんならお婿さんが、来た時に初めて、参りに行くわけやさかい。ただ、紋付きや羽織袴で、お神酒を持って行くわけや、お酒をね。ほして部落の人に飲んでもろうわけや。お神酒と、まあおかずをねえ。今みんなあんた、菓子あっさかいねえ、菓子の包みぐれェ配れば、そんでええわけや。

〈二十八日〉**カリアゲ**。（稲刈リガ）ええ、終わってくうてェた。カリアゲモチてて、餅作ってェ、食べってことやがてェ。もちろん、あの、作ったものはぜんぶ、神仏（かみほとけ）に供えるだけやけどねえ。神様と仏様と床の間と、これはまあ、三っつ……。（荒神様ヤカマドハ）供えねえ、こちらはね。ただ、餅搗いて、配ったわけや。親類のとこへ。特に、そのう、この町方のね、百姓しとらんとこへ配ってやった。小豆餅。お砂糖入れてね。ボタモチにする場合も、あっしや、搗いてする、それヤてんでんの……。

十一月

（ホシバマツリハ）それはあのう、稲のハザをね、じェんぶ干してしもうた、時に**ホシバマツリ**て。やっぱり餅搗いて、食べるわけや。オー、今日はホシバ終わったぞ、ちて。昔ならあんた、天気次第やさかいねャ、それはうちによって違うわい、うちうちでね。自分の稲が干しあがった時をホシバマツリとゆうがい。（ホシバニハナニカスルノカ）ああ、なかったねえ。

（コケンチョモチハ）これァあのう、じェんぶ、穫り入れがじェんぶ、米んなって終わった時がコケンチョてながい、稲こいてもうた時が。稲こきを終わったことが、コケンしもうたてゆうことや。ほいでそれも餅食べて、まあ前後みんな、百姓の仕事はみんな餅やったいねえ。

十二月

〈五日〉アエノコト（九三ページ参照）

〈二十三日〉これはあの、太子（だいす）講団子ちゅてねえ、雪や降っさかい

ね、蕎麦のね、モウシャダンゴこしェて。昔ャそれで、なんんか、大工さん、太子様に、泊まり来て、おらなんもねえてえたら、そんなこと言わんと、隣のうちにあるがやて、おうてくれてたら、おう、そんならよしャ、おうらりさかいて、おめえ、おりてもわからんよに、跡隠いてくれてェてェ、跡隠したちゅてね。これはあのう、十一月の二十三日か。とにかく十二月の、二十三日がそんなやさかいねえ、この終わりらさかいね、そんな時ねは、必ず雪は降るわいね。このごろは、跡隠しもはや、季節はずいたりね。今それやらんねェね。

（コレガ一年間ノ）んん、そう、行事ですねえ。そやけど、ほとんとは、お餅を搗いて、食べるとゆうだけのもんやねえ。（祭リガ多イ）そいがやけどねえ、今は、ほとんと、まあやるものは、いんでねやねえ、少ねえね。

（初雪ガ降ッタ時ニ）別に祝いせんねえ。（雪ヲ降ラセル神ハ）そんなことだ、なんも、うちらは聞かねえね。（白イ鳥ハ）ああ、昔おったてんやけど、今見当らんねえ。（神ガ訪ネテ来ル話ハ）そいことは、あんまりねャ、聞かんね。このへんはねえらしいね。

5　村と家の話

十郎原のこと

しっかりねえ、わからん、けれどもォ、なんかこのう、平家の落人がねえ、ここへまあ、逃げ込んでへった、とゆうその一つのいわれあるわね。そでそのう、十人がね、十人の人が来てそして住み着いたとゆう、まあ。そいでそのう、この、何郎とゆう名前がねえ、ある者、うちが十軒あるわけや。（西谷ニハ）藤三郎・藤十郎・助三郎・又三郎・彦十郎、（東谷ニハ）彦八郎・勘十郎・作十郎・孫十郎・与十郎。藤十郎てがいちばん古しいがん。これは親方やゆうとるがえ。ほっであのう、このむこうのほうの弓曳き祭りなんか、やっぱり、の、親方するわけやさかいねえ。んん、あの、藤太郎。（苗字ハ）オオガタ。（西谷ノ神社ハ）日桂（ひかつら）神社てが。あれほんとは神明宮とゆうがを、この新しい名前を変えるがんに、日桂神社て名前、付けたんやがに、ほんとのとこは、神明宮てがやわねえ。

（十郎原ノ戸数ハ）現在は三十四戸か五戸あるけどねえ。（東谷ハ十八軒デ、人口ハ）七十人ぐれえか。（イチバン古イ家ハ）作十郎。中家（なかいえ）てが。ここと一枚屋敷や、隣として。よう似たもんやねえ。（アノ川ハ）こっちは、東谷川。むこうのほうは西谷川て、こういに二股に。

こっちのほうのお宮は白山宮てがやは、これはあの、鶴来のねえ、白山様の、なんや、祀るものは、系統でね。（鎮座由来ハ）えーと、これはねえ、なにかこのう、出雲の、このずうっと、カシラに、お宮さんの横に、コヤシってうちあるわいね、あれは彦与右衛門てがいわえねえ。その人のなんか、田んぼを、この一部分、なんべん耕作しても、この稲がでけなんだて。そしたらこんどあ、そのう、おかしいと、そいでそれをそのう、泥だらけんとこなんか、こうすくうてみたら、この観音様がねえ、いっておらしたげやとォ、ああ。菊理媛命ち

てね。あのう、蛇を持った女の神様がね、正体、でまあ見てもろうたら、そいがになったらしいげや。いや、そしてその、ほんとの正体はこの、アンヨウシ（安養寺？）てとこへ、行っとるらしいわいね。あの時、神仏混淆でね、あのう、お宮を、寺が管理したわけや。その時代にそのう、もったいねえからあちてゆうてえ、アンヨシサマへまあ持ってったとゆう、ま、ゆわれらわけ。それでまあ、今でもまあ御神体造って、菊理媛命造ってあるけどね、そうゆう、意味あいやさかいね、まあ何年ほど前かね。（ソノ家ハ）ほんとの、そのうちは、今、ねえがや。ずうっと絶えてしもうてね。で、カショウもはや、ねえなってもうた。おらあ子どもん時分には、うちや、ミヤデンてェてね、ゆうおったけど、今はや耕地整理したらねや、なんもはや跡かたもねえなって。昔はね、部落中して、それを耕作して、そしてその穫れた米を、煮て、一年のお宮のねえ、お供えねしたり、ごっそうにしたりしたもんや。お餅は作らない。

（祭リハ）えーと、あれァねえ、えーっと、昔からあのう、九月の十六日が、縁日（えんび）のがで、なにわいね、あの、柳田の白山様が、九月の十六日や。あそこの白山神社はねえ、あれァ豪勢でね。そうだらその、いっしょにやってがァ、祭りや困るからねえ、月をずらしてねえ、ほしてやっとるわけ。今ァ、七月の十六日や。えーあの、秋祭りや。秋の大祭や。今ァ、秋祭り、ほんとは秋祭りを夏祭りとゆうたもんで、秋、忙しいさかいねえ。えまああの、キリコてがァね、ああゆうやつを担いでねえ、そして、おみこしさんと、やるわけやね。そでこの部落でもねェ、四本も出たことある、十七、八軒してねえ。今、一本しか出ねえ。春祭りは五月の五日ね。これはあの祈年祭ちゅて春祭り。（旧暦デハ）え、それはあの、四月やった。それ、シンガツノマツリててゆうげやけど、それ今の暦になおいて五月にしとるわけや。四月の五日てがは、このへんなは五月んなったわねゃ。ひと月遅れんしたもんやさかい。神主さん来て、お祝詞あげてね、そして昔は、あのうまあ、ぜんぶこのう、トウヤちててえ、このオヤが、してその、ごちそうして食べたもんや。あの、四軒か五軒ね、組作ってね。そして、その、コウオヤとコウグミてがおって、そして、この谷には、あー、四軒、トウオヤてがあるがァ。あのう、マユミてえてね、マユミの木ちゅててね、あの、青い、できたての、芽を、和（あ）えて食べたもんや。**マユミノホロアエ**てェてね、ああ。おいしいかもしれん、だえてェひとつの薬やねャ。そんであれがその、春の新芽やからねャ。それが、まあその時の、なにやならんごちそうなわけ。（ナゼマユミナノカ）さあ、それはなんか……。あれはあっちで、いちばん早う、芽はたつわいね、あのマンサクゆうとがね、勢いのいいがんにね。（ソレヲトウヤガ作ルノカ）そう〳〵、山はたくさんやからねえ。今それやめてねえ、お宮参りだけやわいね。（ソレデ豊作ヲ祈ルノカ）んん、そや〳〵。別にそうゆう行事はねえで、まあ神様に、まあ祈っだけのもんやで。そしてその、結局、総代が唱和してね、お神酒と、そいからァ、ま、ごっそう少し持ってってね、ほして神主様に、ま、お祭りの、するだけやね。それに新嘗祭、がね、これは、十月の十七日ぐれ

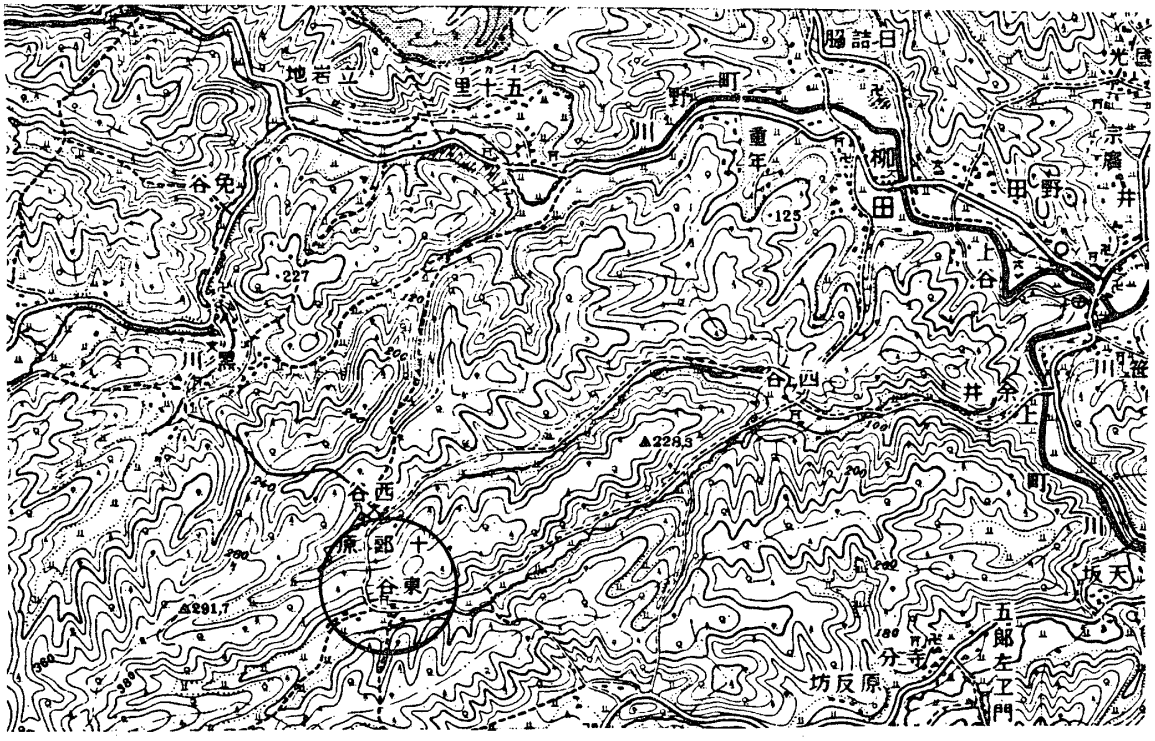
えから。五月一回と、七月一回と、十月一回と。

（白山様ノ御利益ハ）いやあ、そいことはあんまり、特に聞かんねえ。（拝殿ニ「五人抜」ナドトイウ板ガアッタガ）あれはあの、御相撲の幣や。関取さんが、このいなか相撲で、まあ、この、たいへんこのう、こうゆういなかは、草相撲あったわけや。そいでその草相撲に力士がねャ、こっちにま、たまたま、二、三人、化粧まわしもした人、ほんでねや、ほしてその人が、取って来てお宮さんへあげたわけや。（木ト竹トノガアッタガ）竹はねえ、あれはあの、木のやつは、竹のやつと、品種が違うわけやて。ほっで、あのう、奥ユミ・中ユミ・前ユミ、てが、あるわけや。ユミ相撲てえてね。それからこんだ、大関・関脇・小結とゆう、ね。それにこんだ、前頭の打ち止めちゅて、ワリドメして、前頭て、ねや。そうゆう、この四本の幣は竹で作ってあるわけや。いちばんそのでけえやつは、あの大関ててェ、金のねえ、こんなんでけェ、まあこれが大関。その次はこんた、関脇・小結てが、これは竹の、串やったんが。青竹をねや、ぱあーんと、伐ってそしてこう、くるっと巻えて、キンのショウシュク（標識？）ねするてて、りっぱなもんやったわいね。最近まであるんですよ。あるんけど、今、ここ二、三年ね、不景気んなったら、まあほとんどねえわいね。（ヤル場所ハ）ん、いつもでえてえその部落で、モトでね。

端家のこと

おらうちは助治ててね、それはね、どうゆう意味のがかてたら、ほんとは、生まれはね、越中のもんやとい。富山のね、薬売りやったえと。で、薬売りがここへ来たら、その、作十郎てがん、その、まあ目がめえんわけや。字がめえんもんで、ほいでそのう、この隣の脇、五郎兵衛とゆう人の、ところの、行って頼んできてそのこの、村の長は頼んできて、書いてもらったりしたわけや。ほしてたまたま、この隣へ来て泊めてくれ、て。ほしたらあ、今日おれ今忙しいて、五郎兵衛へ、あの、書いたもんして行ってもらんならんから。ほしたら、おー、その書いたもんはどんな書いたもんや。また薬売りやさかいねや、知恵が働くさかいに。こんでこいことやねや。いや、そんなあたいそな、あっこまで行かん、ててェ、おれが書いておまっさかいに、むこう様へ届けさっし、ええたら、ああそうかて、書いてもいて、そいでまあ、モロワッシ（諸橋？）のね、トンね、持ってったわけや。もうこいでええんげと、それちゃんとかのうとるからやね。そうしたら、えーやお前やはつめなもんじゃな、ナカセの五郎兵衛へ行って頼んできて、書えたもんを、書類を作ってむこうへ納めたんやけども、今度はなんも、えかったと。お前やどや、この家へいのってくれたらどやえ。でまあ、それやのうォ、食うだけ、分けっさかい、おったらどやえ、ゆうてねえ。そしたら、おー、うんなら、とゆうてまあ、そんなら助けておますっと、とゆうふうにしてね、作十郎を助けたとゆうんで助治ちてて、名前を付けてね、そしてここね、いっしょにおったもん。一枚屋敷でね、これャもこうのカシラヤと、屋敷一枚なんや。それはあの、だいぶん昔の話やわいね。（何代目カ）はあー、ちょっとわからんねえ。まあとにかく、四百年ぐれえ前には、まだその、

昔の、お寺の過去帳見るとあんねや。（苗字ハ）これはね、苗字帯刀とゆうてね、まあいよいよ我々庶民も苗字作ってもええわあてて、この隣が中家でしょう、うちの、在所のまん中のうちやから、中の家と。それ、こっちのはなにおっさかいにハナ、端と。



地図 6　「能登―端竜助家のアエノコト」関係図

能登――門前町皆月のアマメハギ

――「雪国の来訪神」採訪資料10――

◎採訪地　石川県鳳至郡門前町皆月
◎日　録　昭和五十六年
一月五日（月）
22：16　大宮駅発（寝台急行能登）
一月六日（火）
07：26　金沢駅着（35分遅れ）（曇）
08：03　金沢駅発（急行能登路1号、3分遅れ）
09：43　穴水駅着（3分遅れ）
09：57　同、駅前発（バス、2分遅れ）（晴）
10：35　門前着。教育委員会・商工観光課行
13：20　門前発（バス）
14：10　皆月着（風・小雪、積雪なし、時に日差し）。川島旅館泊、アマメハギ巡行（夜、風強く、小雪ちらつく）
一月七日（水）
07：30　皆月発（バス）（曇・風）
08：12　門前着
09：00　同、発（特急バス）（小雪）
11：43　金沢駅前着（曇、時に小雪）

1　アマメハギ巡行

18：30　宮司家を出て廻わり始める。

A家　「オラーッ〳〵」「ウワーッ」「ゆうこと聞かねえもんはおるかッ」「ホラッ」の声。子どもの泣き声。「餅入れんばなあ、ほれ、入れてけ〳〵、いっしょにほら、ほら、それ入れてけま」の声。神棚をお祓いして帰る。

B家　「ホラッ」「ヤーッ〳〵（子どもの声）」「んだ、これから、ゆうこと聞くがって、まいってこおんかな、よいしゃッ」の声。お祓い、拍手。

C家　お神酒をいただいたあと、「コラーッ」「悪い子はいねえか、コラーッ」の声。

D家　拍手、お祓い。

E家　「サア、ゆうこと聞かん子はおるか」「こらッ〳〵」「ゆうこと聞くか、こらッ〳〵」の声。

F家　「こらッ」「ゆうこと聞くか」、女の子の泣き声で「ごめんなさ

い、ゆうこと聞くッ」、家人の声で「お餅持ってこ、あそこにあるお餅、持ってかんと連れてくぞ」、拍手。

外は風と浪音。

G家　「こらーッ」のくりかえし、「こらこらッ、ゆうこと聞かんか」の声、餅を入れる、拍手、お祓い。

H家　「こらッ〈〈」、拍手、お祓い。

I家　「こらッ〈〈」、二、三人の子どもの声で「ゆうこと聞きますから〈〈」「これやる、ハイ」「ゆうこと聞きますから、許してください」と泣き声、主人の声で「ああ、こわかったねえー、だいじょうぶ〈〈」、拍手、お祓い。

巡る順は、天狗がたえず先頭、その次、ガチャが二人、最後が猿で、袋を担ぐ。この姿は大穴牟遅の神の様を思わせる。

海鳴りの音がすさまじい。

アマメハギの巡行はさらに20：35まで続くが、追うことをやめて、宮司の話を聞き、ホービキをしている家を訪ねる。

2　村人の話

（明日が正月ナノカ）ええ、だから、あの、このへんは、一日・二日・三日まででしょう、まあいちおう、どこでもいっしょなの。これから六日・七日と、それから十日・十一日、ってゆうな、ことんなっとるんすね。六日は……アマメンサマござったゆうてね、餅三つつ出いててやって。（今夜ハトシトリカ）いや、それ違うんです。トシトリはだからいっしょなんです、どこもですね。だから七日正月ってね、ゆうのは、アマメハギ、があるから七日正月ってゆうことで。だからアマメハギの次の日ってゆうような、別にそんな、深い意味ないです。（特別ナ食物ハ）いえ、それはないです。あのう、十日・十一日はね、十日のコイワイとか、それから十一日は、このへん漁師町でしょう、だからキシュウって、舟を起こすね、あれの行事があるもんで。

天狗サンは、あのう、お祓いする時に、神主さんがお祓いする時に、天狗の面だけは、神主さんが着けたでしょう。あれは神主さんの代理で、家内安全・五穀豊穣を祝って、だから神主さんの代理で歩いてるわけです。（猿ハ）猿。サルメン。あれは、猿田彦の、神ですね。（餅ヲモラウノハ）あれは猿、サルメン。あれは猿田彦、ここの神社のね。ガチャあ一人です。あれもだから、面そのものは二つありますけどねえ、だいたいの、起こりは一つなんです。ガッチャの意味は、わたしもあんまりわかってないんですけどねえ。（手ニ持ツ）あのノミは、あのー、アマメ、あのう、ヒダコ、あれをはぐん。（黒イ棒ハ）あれはスリコギ。坐わっておるやつを、起こすんです。（道具ハ）それと、あの餅入れる、袋と。

（扮スルノハ）前は、厄年の人が歩いたんです。あのう、二十四ですか。だ、今そうい人がいないもんでねえ、出稼ぎに行って。だから若い衆に頼んで、歩いてもらってるわけなんです。（ナゼ厄年ノ人ナノカ）結局、あのう、厄祓いですね。だから、天狗は五穀豊穣祈って、あとは厄祓いですね。だから、ぜんぶ歩いたんです。軒並みに。（モ

ト厄年ノ人ハドコカデ特ニナニカヲシタカ）いや別に、特別なことは、したことないんだけどね。最初はね、お宮さんで、あのう、手洗いして、それを今、あそこで、略して、おるわけですけどね。昔はあの、お宮さん、まで行ったわけですね。（今扮スルノハ）高校と中学生です。結局、人がいないもんでねえ。だから、結局、希望者募るわけですねえ。（イツカラソウナッタカ）もうここ、五、六年ぐらい前からですねえ。結局やっぱり、このへんも、過疎でね。昔はそうゆう、さっきゆうたように、厄年の人がやったけども、もうこの頃は、そうゆう、人がいないでしょう。だから結局、高校生と中学生に頼まなけりゃ、できないようになったわけで。まあそれでも、現状維持、できるってゆうのは、まだいいほうですがねえ。

（餅ハ）ほんとの昔はね、これ集まった餅を、またそのう餅ホーピキって、ホービキしたんですよね。ホービキっちゅのはね、綱が人間に応じてあるでしょう。そこへあのう、天保銭つないでね、それ一つしかないわけ、それを当てるのにね。（場所ハ）これはやっぱり、神主さんのうちで、昔はやったんですね、その餅を持ってきた、それってゆうのは、昔はそんな、餅なんて、ふつうの家庭にはなかったわけですね、この世が貧乏で。だから、その餅を、そのホービキでよって、争って取ったわけですね。

（皆月ノ由来ハ）ん、それ、なんかいっぺん聞いたけど、忘れましたわたし。半漁、ですけどねえ、まあ昔はだいたい、漁とこやったんです。今はもう、漁があんまりきかないようになってね、やりませんけど、昔はだいたい、漁師が多かったんです。

（神仏ノ漂着ノ話ハ）んん、ここには、神様が流れ着いたってゆう、伝説はあります。この部落とゆうかね、このいちばん端へね、いちばん端の家に、あのう、家の横に大きな石があります。カミサマイシってね。だから結局あの、西風に、だいたいまあ南風に、流れ着いた、神様ですねえ。キヘエってゆううち、そこで一服したってゆうから、そこにまあ、カミサマイシってゆうもあるんです。日吉神社に祀られてる神様です。（ソノ風ノ名ハ）んん、クダリ。あんまりいい風でない、悪い風ですねえ。えーと、南西ですね。だから南西だから、すぐ入ってくるわけ。シケんなるわけ。だから、その祭りんなると、北西の風でも、必ず南西に変わるって、言い伝えがある。あるとおりにやっぱり、なります。だいたい、でも、南西の風とゆうのは、このへん、しょっちゅうなんです。（ヨイ風ハ）北風ですねえ。（土地ノコトバデハ）アイ。結局、漁師しとったからねえ、港へ、波が入らなかったから。

3　番場政晴宮司の話

皆月のこと

（名ノ由来ハ）これ、むずかしいですねえ。これが皆月とゆう、由来だとゆうの、まあ正直な話、なかなか解明しにくいですよ。（戸数ハ）一八〇戸ぐらい、この皆月だけではねえ。（生業ハ）あのね、ここに農家なんて、ないんですよ。いっぱん、自分のセンザイ作るよう

な、小さい農家だけしかないんですよねえ。山林でも、少しは持っていますけど、山林持ってるとゆうほどの山林もないです、見たとおりの、こんな山ですからねえ。ほて、漁業とゆうても、あこにね、小さい船を少し置いてる、あの、年のいった人たちの漁業ぐらいしかできない、そうゆうとこなんですよねえ。外へ出ますねえ。ほとんど地元で仕事してるのは、役場とか、農協とか、郵便局とか、そうゆう仕事しか、ないですもんねえ。（昔ハ）やっぱり船乗りでしょうねえ。この皆月とゆう町は、船乗りですね。あのう北前船みたいな、船乗り、の衆ね。それから近年になりますと、今の、大きな、タンカー船とか、そういのが多いですわ。最近は少なくなりましたけどもね。一時はやっぱり、二〇〇人近くの人が、実際、仕事に携わっていました。

日吉神社のこと

あの、ここの宮の、場合は、あのここ七浦（しつら）全体の、七浦の総社として、山王の、あこで創設して。これあの、七浦港ぜんぶ、この地区全体の、皆月ではなくって、七浦全体の、総社とゆう形で、祀られて。近江の日吉の、あれですねえ。ほんで、あの、いろ〳〵、言われかたあるへんども、結局あの、今、日吉から来た、ここの、そうとう古いちゅう、ことも町史でも書いておるらしいども……。あの、はっきりした記録ちゅうのは、ここにあらへんども、あの、いろ〳〵あっちこっちで調べた、そうゆう当時からあるちゅう、のはまあ、ちょっとした簡単なのは、町史で……『門前町史』で。やっぱり、あの近江の国との取り引きとゆうのが、あの、船の面でね、あの能登と近江の国とねえ、行き来が、案外あの、あったらしいと、まあ言われますけどね。このへんはあの、ずっと、山王さんの系統の、神社とゆうのは、加賀から能登半島にかけての、たくさん、ありますよねえ。（鎮座地ハ）もとからあこだと思います。あの、元の社地とゆうのは、別にないですから。（社殿ハ）あ、あの海のほう、沖のほう向いてますよ。西に当たりますね。（西向キノ由来ハ）いわれとゆうのは、特別ないですけどもねえ。（祭日ハ八月ノ）ええ、十日、十一ンちです。昔は、六日・七日なんです。旧暦はあの、七月七日なんですよ。そして新暦に変わりまして、ちょうどそうゆう時期で、八月七日とゆう形んなったと。（宮ノ奥ニ番場山ハ）ええ、番場山は、はい、ありますね。北のほうになりますけど。（ソノ山ト宮司家トハ）んー、あの山の、ある程度の地主とゆうかっこうですね、うちの山とゆうことは、あの山はまあそうゆう形で、番場山とゆう、名前は出たんだと思います。今はもうないですけどねえ、そうゆうつながり。（日吉ノ信仰ハ）特別のその言い伝えってのは、どうかと思いますけども、やっぱりあの、ぜんぶあの、外へこのう、このへん、船で、あの行き来のある、町ですもんですから、やはりあのう、船出する時には、やはり日吉神社で祈願して出かけるとゆう、形はやっぱり、あったと思います。それから、だからあのう、自分の船のあのう、絵馬の、奉納等はやっぱり、当時そうとう、強かったと、思います。今はまあほとんどねえ、いたんで、形はすたれましたけれども。海のかたです、ええ。そうゆう信仰が強かったですねえ。

（山ノ信仰ハ）このへんの、山っちゅうのはねえ、そのう、信仰する山てゆうのはちょっとねえ、ないですねえ。ただ、うしろに、今の、大峯、ですか、これなんかは関係するんじゃないかと、まあ言われてますけれども。ずっとまあ、もっと奥のほうにあります。そんな大きな山じゃないですけども。大峯〳〵とまあ、ゆうとります。いや、お参りちゅうことはないですねえ。だから、その大峯、が、結局、日吉神社の、あれなんじゃないかとゆう、ことも言われるわけです。それは話とゆう、形ですがねえ。

漂着神のこと

はい、ありますね。あのね、あのう、海から寄って来て、まあ、御神体がね、海から寄って来て、ほしてあのう、それが今の、むこうのほうへ行って、カミサマイシってのがあるんですけどね、キヘイドンちゅってね、そこの人が神様を拾いましてね。（ソノ家ハ）まあ、今でもありますね。これはまあ皆月でも、ここの部落のやっぱり、最初にこの部落ができた一軒ですわね。そうゆうふうに言われてますけどね。まあ結局、その神様は、あとこの神社へ奉納したことんなるんですけども、最初からはそこにあったとゆうんじゃなく……。大国主命は、それは、日吉神社があった時から、それはあります。それはそれとして、御神体としてあるんけども、そうゆう話と、それからその神様を、きれいに洗ったとゆうのは、こっちのほうで、マスモトっちゅううちにあるんですけどもね、ショウザ〳〵とゆう、そこの井戸水で、神様をきれいに洗いまして、そしてあげたとゆう……。さあ、それがどうゆう神様ちゅうことは、ちょっとわかりませんねえ。ほんでその神様、を洗ったその井戸は、今でもいつでも、祭りんなると、きれいに澄むとかちゅうね、話があったり……。もう一つは、あの拾って来て、あのう、今の百成（どうみぞ）、そこのスケダイとゆう人が、その浜から拾って来て、百成へ持ち帰ったけども、これは皆月の神様で、皆月へ行きたいと、そいで皆月へ、返してあれしたと。だから今の祭りに百成の人が出て来にゃ祭りが始まらんとゆう、一つのそうゆう話もありますし。（三ッツノ話ハ）それが別の神様のような気もするんじゃし……。それぞれ、話がいろ〳〵、違う形なんですよね。だから言い伝えによっては、いろ〳〵ダブっている面もあるし……。

（蓑笠持ノ神トイウノハ）んーと、井守（いもり）の宮がね、あのう、あけはなしの宮でして、あの、井守の宮、戸を閉めると雨が降ると、とゆう一つの言い伝えがあってね、ほして井守の宮はいつも、拝殿の戸を閉めてはいかん、あけておけ、とゆう、そこが蓑笠の、結び付くお宮でして。（白鳥神ノ話ハ）知りませんね。（餅ト神ノ話ハ）はあてねえ……ないですねえ。

ショーライサンのこと

（盆ハ）八月です。七月じゃなくって。お寺さんが、多いです。ショーライサン、やりますわ。それはあのう、浜でね、あのう、いろいろ、御飯炊いたり、そうゆうおかずこさえたり、そして海からショーライサンお招きするとゆう、そうゆう行事は、この浜辺でやります。それは八月の十三日です。新の八月十三日。夕方です。浜へ出て、ま

あ、みんなちゅうわけにはいきませんけども、浜へ行って、今でも子どもとか、お年寄りとかが出て、それは今でもやっとります。（カマドハ）石でこうして作って。火を焚きますね。燃やすもんは、ここにあるもん、ただ薪です。（青年―昔はジャガイモを煮てね、ほとんどジャガイモ、皆月のジャガイモとゆうと、うまいと言いますね。僕ら子どもん時から、そのイモ煮をやったわけ。この頃はうちで作ったカレー持ってって……）。んん、ここはイモが、たくさんありますからね。最近はあの、うちで煮たものを持って来て食べたり、しますけどね。（招キカタハ）んん、別にそうゆう形とゆうのはないけども、やっぱり海に向かって拝むだけで、じゃないでしょうか。なんかあの、煮たもんも海のほうへ、いっぺん、最初のやつは、海へ流してあげる、口へ入れる前にね、お供えする、そのまま海へ流して、あとみんないただくとゆうかっこうでしょうねえ。浜ももっと、ずうっとあの、今みたいにテトラポットじゃなくってね、浜でしたからね。きれいな浜でしたよ。浜もうなくなりましたもんですからねえ。（食後ハ）ええ、帰ります。（家デハ）んん、仏壇にお参りすることは、みなさん、あのう、やっとりますわね。わたしんとこはまあ仏壇はないもんですから、わたしらはまあ位牌のほうで、あの、やりますけれども。ほしてあの、こんだあの、盆のね、ミタママツリとゆうことで、あのキリコを持って、あの、町中、廻わります。これはね、いちおう、そうゆう一つの形だと思います。（盆ノ終ワリハ）十六日ですよね。（ソノ日ニ流ストカ送ルトカハ）そうい形は今、ないですよ。なにかあってもいいと思うんですけどね、その形はちょっとないですけどねえ、今。ほんとうはその、盆済んだあとに、そういもんが、なんかあっても、いいと思うんですが。ただ、このね、踊りするとかね、キリコを担いで廻わるとかちゅう、そうい形、なんですよ。これは、ここの独特の、ね、このへんでは、ここだけだと思いますけど、ショーライサマ。ショーレー〳〵て。

アマメハギのこと

（元旦ニ初日ヲ拝ムコトハ）最近は、ないんじゃないですかねえ。やっぱり、年のいった人は、やっぱり日の出を拝む、場合が多いんじゃないですか。正月の神様迎えるちゅうのは、別にしませんねえ。伊勢のお札さんは、わたしまあ、ぜんぶ新しく替えて、そして、お祓いぜんぶしますけども、そうゆう形以外は、ないんじゃないですか。昔はね、なんか獅子が出たちゅうことも、そうゆうとこも、あったんじゃないかと思いますけども。そうゆうものも、そうい話、ちらっと聞いてるだけで、実際は、それを知ってる人もないらしいし。お祓いの獅子だと思いますけどもねえ。

（アマメハギノ由来ハ）それ、年代的にはちょっとなかなかはっきりしないんですけれども、やはりあのう、この土地とゆうのは、どっちかとゆうと、こうして稼ぎに出ないとね、漁業とかそうゆう稼ぎに出ないと、ひじょうに、貧しい、どっちかとゆうとね、ここで自給自足をしにくい村でしょう。だから、そうゆう、交流の中から、いろんな、ねえ、こうゆう、あのう、あたっていて仕事ができんだろう、食

えないんだとゆう、ひとつの、教えだと思います。だから、あの、子どもん時から、必ず仕事をしろ、とゆうことを聞いて、がんばって仕事をする。なまくらんなったら、アマメとゆうの出ますわね。ヒダコができますね。それはぐとゆう一つの形で、それを、正月に、六日トシコシ、七日正月の、この、そうゆう行事をすることにおいて、あのう、子どもの時から、そうゆう戒めの行事だと思いますけどもねえ。

（モト厄年ノ人ガ扮シタトイウガ）ええ、二十四、数え五ですねえ。二十五の厄年ですねえ、もとはねえ。二十五の厄年とか、あるいは四十二の厄年とかとゆう……。（四十二ノ人モ）やっぱり、したことも、あるんですよね、その時〳〵で、別に。そいで、自分の厄を祓うとゆう意味も、兼ねましてね。そういことはね、そうい気持でみなさん、なっていただいてるんです。（厄年ノ人ガ禊ギヤ籠リヲスルコトハ）まあねえ、以前は、そうゆう形があってもいいと思うたんですけど、ねえ、ちょっと、そうゆう形とゆうのは、ちょっと、わたしも聞いとりませんですねえ。（生徒ガヤルヨウニナツタノハ）もうはやあ、何年たちますかねえ、ここちょうど出稼ぎに出る前、三十年ぐらいですかねえ、それまではあの、終戦後三十年頃までは、たくさんあの若い人が、いたんですよね。だから別に、そのう、アマメハギをする、ことにおいては、厄の人はじゅうぶんあったわけです、青年会の人もたくさんいた、若い人はね。ほいだら、だんだん〳〵、生活の関係で、外へ出て行きましたでしょう。ほうしたらこんだあのう、この行事そのものが継続がひじょうにむずかしくなりましてねえ、もうできないんじゃないかとゆう、お手上げの状態の時期がまいりましてねえ。やっぱり三十、年過ぎ頃から、だん〳〵きびしくなりましたよねえ。三十四、五年ぐらいまでが、いちばんひどかったんじゃないですかねえ。そしたら今のこと、皆月青年会とゆう、この、もともとのこの部落の、会がありましてね。だかあ、ここの祭りの全面を、奉仕ですわねえ、そうゆう会がありましたもんですから、アマメハギは別に、それに関係なかったんですけども、その時点でひとつ、年齢ぬきでね、青年会とゆう三十八歳までのこの青年の人たちに、ひとつお願いできないかとゆうことで、協力いただいてね、これを継続するためには、みなさん、たいへん御努力していただいてるんです。

（神社トノ関係ハ）つながりが、あったと思いますけどもね。それはいろいろな考えかたもあっだろうけども、やはりあの神社とつながって、初めてこれがずっとこう、続いてきているわけじゃないかと思います。これもし神社と離れていたら、なくなってると思います。だから、どっかの時点でいっしょになって、きたんじゃないかと思いますけどね。最初からいっしょとゆうことは、ちょっと言いづらいですけども、ええ、どこかの時点でいっしょになってきた、ほうが強いように思われますね。（オ祓イハ）昔は、神社へあがって、やったんですよね。先に神社で……。だけど、やっぱり、神社の設備が悪いし、社務所がここへあるかっこうで、ぜんぶはえ、社務所でやるとゆうことで。神社へ行ってお参りするちゅうのは、形としてはね、当然な形なんですけども。ちょうど時節がこうゆう時節だもんですからねえ、

あこへあがるとゆうのは、たいへんあのう、雨風があったりね、とても人手不足と、そうゆうもんと重なりましてねえ。（ソレデ今ハココデオ祓イヲシテ出発スル）ええ、そうゆうことですね。まあ禊ぎのかわりに、お祓いをすることにしてるんですけども。

（先頭ガ）はい、天狗サンと言います。（理由ハ）んん、別にやっぱりあのう、天狗サンが家庭のお祓いにいちばん……、お祓いをするとゆうことで、天狗を立ててるんですよね。だからあの、天狗を先頭に、歩きながら。猿とゆうのは、日吉神社の使いとゆうことで、サルメンとゆうようにしてるわけで。ほんで、ほんとうは天狗サンと、いまのグッチャとゆうのと、それと、オニのと、ありまして、ほして、猿が日吉神社の使いゆうて、それ御案内申しあげるとゆう形で、猿が先頭になったり、いろいろ……のがひとつのパターンなんですよ。実際は天狗んなったもんが、どしても先頭に歩くことになりますが、順序は別にきびしく言っておりません、ここは。（猿ガイツモ袋ヲ）ええ、ぜんぶ担ぐんです。（人数ハ四人ズツ二手ニ分カレテ）四人ずつです。昔から四人とゆうことになっとります。一時的には三人になったこともありましたけれども、いちおう四人とゆうのが、形なんですよ。（二組ニナッタノハ）四十五、六年頃か。初め一組で歩いてたんですよねえ。古い面、そこにありますけどもね。今、新しい面二つやってるんです。（青年――僕ら子どもん時に、西手からずうっと落ちて来るでしょう。ほうしたら、九時か十時頃んなるしねえ）。（扮装ハ昔ノママカ）ええ。（蓑ヲ着ルコトハ）ああゆう形は、ここの場合に、なかったと思いますねえ。ここら蓑はたくさんあるんですけどねえ。（廻ワル順ハ）いや、別に、順番てのは、決まってません。こっから出たらへえ、いちいちこっちからって、なあんも言いませんし。子どもがたくさんおるとかてうちが、だいたいこうめぼしいとこ、わかりますんでね。歩く人はやっぱり、そういとこのほうがおもしろいし、そういとこ先に寄って、こう歩いて、ついでにそのあたりを歩くとゆうかっこうが、強かったんですよね。今みたいに子どもが少ない状態では、なんにもできないですけども。

（オ祓イヲスルノハ）んん、まあ、一般的には、家内安全と、それから新しいあれで、やっぱり穢れたそういうもの、なくして、新しい気持でね、あの、家内安全を願うとゆう、そうゆうことじゃないですか。（宮司が別ニオ祓イニ廻ワルコトハ）いや、わたしはやりますけども、別にやってます。とゆうのはあのう、アマメハギと、まあ結局、信仰に結びついた行事とゆう形で、あれをどうしても、取りはずし、できない行事としてね。（家デハ歓迎スルトイウ感ジガアッタガ）ええ、あるんですねえ。やっぱりあのう、とばされると、そのうち、やっぱり気持が悪くなりますしね。とばしてやると、やっぱり来てほしいちゅう、やっぱり申し入れ、あります。これまちがいなくきます。（モラウノハ）丸餅です。ぜんぶこんな餅ですねえ。特別に、呼び名ってないですね。カガミモチです。やっぱり、アマメハギサマが来た時に、さしあげるために、取って置いたものです。本来、餅です。やはり、この正月は、餅が、神様にあげる最高の品物だからでしょうね

え。なによりもこれ、いちばん神聖なもんだと思います。お米のもとですもんねえ。けえども最近はお菓子もきたり、お酒もきたり、いろいろですけれども。（数ハ）三っつですね。（青年―本来はアマメハギが三人とゆうことで、三っつとゆう人もおるし、三つ重ねがめでたいので、三っつとゆう人もおる）やっぱりめでたいのでこれが三っつとゆうのが、一般的な考えかたでいいんじゃないですかねえ。

（大晦日・元旦ニ比ベテ盛大カ）遊びとしてはね。ああ、部落の憩い、ちゅうんですか、あのう、遊びとゆうのは、やっぱり、このほうが、一日・二日よりも……。ほんとの正月は、やっぱりひとつの儀式的な面とか、そうゆう、人んとこへ行って遊ぶとゆうよりも、自分のうちで、ま、祭りだし、そいから、今のやつは、どこへでも、こう遊んで、ね、隣近所の遊びを、交流ちゅうのは、この日のほうがずっと……。カルタとか、いろいろありますね、室内の……。集まりやすいとこで、みんなが、子どもでも、集まって……。昔は、この六日の晩とゆうのは、徹夜で遊んだもんですよ。（ホービキハ）お婆ちゃんだけっとゆうことも、ないんですよねえ。昔はもっとあの、若い人から、各グループもありましてねえ。やっぱりそれぞれの所で集まって、いろいろな形でやってたと思います。そうゆうホービキとか、あるいはハナ。戦争中のあの、取り締まりのきびしうなってきた、それをバクチだとゆう時代で、みんな消えてってしまいましたけどね。ホービキみたいなの、バクチって言えばそうだし、遊びって言えばそうですよねえ。あいでもやっぱり、警察の中で、やっぱり取り締まりの対象になった時代があったんですよ。

4　ホービキ見聞

この一文銭の付いている綱を引くと、一円がもらえる。（一文銭ガ光ッテイル）よっぽど、あれ、たたかれるもんやさけェ。なんの罪もとがもねえがん、これたたかれとるがあ。（綱ノ数ハ）十人おれば十本。（アトデ二ツニ分ケルノハ）これは、こっちのヤメエいった、こっちのヤメエ、あの、ドンベエが付いた……。そして交換の間に、このお金を出すの。こらあ、場ァへねえ、出してあるげ。初めにしがけに十文（円）ずつとって、そこへ入れてあるがでね。それ先に一文ずつ出してかかって、ほしてします。取ってきたとこから一文ずつ出す。（一文銭ノ付イタ綱ヲ引クトヨイ）ええ、そう〳〵〳〵。（綱ノ結ビカタハ）カナカケ、ササガケゆうてね。これ一円。これ、ドンベエ。ドウモリとゆうねえ。きのうは、お餅と蜜柑と当たるがで、こんな一円を出さずに。これで財産作るとゆうたら、たいへんなものだ。遊びやさかい一円付けるんやけどねえ。たくさん付ければおもしれえんやけど。バクチならいっぺえ付けるんやけど。正月の楽しみや。遅くて十一時や。これ、みーんな八十（歳）や。この年じゃ、ラジオ体操もなあんもしらんさけェね、これで運動して、体を健康にします。

白山麓の見聞録

――「雪国の来訪神」採訪資料11――

◎採訪地　石川県石川郡鶴来町・白峰村

◎日　録

昭和五十五年

十二月六日（土）

14：00　金沢駅前発（バス）

14：46　鶴来駅前着（晴）

白山神社・アクド淵・菊姫酒造等採訪

18：10　「さわだ旅館」泊

十二月七日（日）

09：58　金剣宮行（～10：05）（雨・曇・晴）

10：31　鶴来駅発（北陸鉄道）

10：55　野町駅着

10：58　同、駅前発（バス）

11：23　金沢駅前着（雨）

12：01　金沢駅発（特急しらさぎ6号）（晴）

（名古屋にて新幹線ひかり一七八号に乗換え）

17：32　東京駅着

昭和五十六年

一月七日（水）

14：00　金沢駅前発（バス）（途中、下木滑（なめし）で給油、エンジン故障二回）

16：10　白峰（北口）着（雪。積雪量三八〇cm）

村役場・林西寺等採訪

17：30　「春風旅館」泊

一月八日（木）

09：24　旅館発、役場に借覧資料返、なだれに埋まった民家があってあわただし、積雪現在量三九四cm（曇のち晴）

10：08　白峰（北口）発（バス）（途中、白山下を過ぎる頃から曇、福岡から雪、鶴来は晴）

12：11　金沢駅前着（薄曇）

14：13　金沢駅発（特急しらさぎ8号、12分遅れ）（霙、雨のち曇）

（武生を過ぎて雲切れる、敦賀を出ると快晴）（名古屋着26分遅れ、新幹線ひかり一六四号に乗換え、6分遅れにて発車）

19：58　東京駅着

1　アクド淵にて（落葉掃きの老人に）

ああ、ここは、アクドの森。この、岩の下のとこに、これから用水がまん中通ってる、フツカ用水、枝権兵衛が掘ったちゅう。そしてそこらへんに、そうゆう穴いくつもあるらしいわ。アクドっちゅは、これ、なんちゅうがかねえ、名前んねがか。とにかく、その、この下が岩がっぺで、穴あって、その下が、どぼうゃーっとした、昔の、禁漁区だった、どぼうーっとした、ものすごく深いねえ、そこで溺れたら、必ずそこで死ぬとゆう、何人もここで死んどるねえ。この下へきて渦巻んなって、そしてこの流れてくってるわけ、むこうから突き当たってきて、ここで渦巻んなってこう流れてる、ここでんな死んがや。そしてこの淵ちゅうのはものすごい深いちゅうけど、今どんげになっとるか知らんけど、まとにかく、昔ャ、青どろーなって、その、底はぜんぜんめえんわねえ。渦んなってる。そんで恐らく、人がここで死ぬし、ここでそのカワナガレでも、この十八河原て、カワナガレは必ずここであがるわ。そのむかいが十八河原ちゅう。ここがアクドの淵でそこが十八河原、こうゆうとるわけや。

アクドの淵にこの昔、ここになんとかゆう姫が流れて来たとかなんとかちゅうな、話はあるあんども、わしらははっきりしたこと、わからんげで。なんやら姫がおったとか、水茶屋の美しい姫てがかねえ。ほんで、すぐそこに行くと清水があるわい。年中枯れることがない、水が出とるわけや。姫清水、てゆうかなあ。今あの、簡易水道にその水汲みあげて使うとる。町のその、水道ができたから、その清水は使うとらんわけや、現在は。

（ソコノ宮ハ）これはあのう、ここは白山比咩神社跡ちゅうてゆうてな。明治前は、ここねあったちゅうて。お宮さんがここねあったんや。まだ電車も通らん時分やから、ここはぜんぶずうっとその、杜んなっとったらしい。それはあのう、むこうへ行って、ここはこんでお宮さんの地面で、そやけど、地面買うたんかしらんけど、用水の事務所あるわけや、そこに。用水が、この、水が通れんちゅあっで、そこにお宮地を変えたんや。

2　菊姫酒造にて（柳辰雄さん―A、若主人―B）

A（鶴来デ多イ商売ハ）ここはねえ、あの、やっぱり薪炭屋やなあ。ここはもともと山と、あの、平地との間の、ちょうど要んとこですからねえ、そやから、両方から、山の人は、食料がないとこなんです。食料がぜんぜんないんです。ヒエ・アワ食っとったとこなんです。今こそ、米は自由にありますけども、戦争前とゆうのは、ヒエ・アワ食ってったとこなんです。ヒエ・アワ食って、死ぬまでに一ぺんや二へんは米食いたいなあとゆうたとこなんです。炭焼きがおもでして。であの、冬んなれば、ぜんぶ出稼ぎ。ロべらし。で、白峰へ行くと、これャもう大きい庄屋がおりまして、今もまだありますけど、そうゆうふうなもんの家に、使われとるわけです。山へ行って仕事をして、そ

のかわりあの、家の、生活は保障して、ゆうふうな、生活、だったわけです。で、その、それ以外のもんは、弟なんかは、ぜんぶ外へ出な、食っていけんわけですわ。で、この通りは、昔はやっぱり商家なんです。でその裏町はぜんぶこれャ、そこの家へ出入りしとるもんばっかりの、働き人のとこやった。そやから戦前はほとんど、んな、瓦の家なんてなかったです。みな藁屋根。

B（コッチガ下白山デ）上白山ちゅうのは、中宮・佐羅・別宮とか。だから歴史的には、そっちのほうがずっと、古くて、こっちは、あとの時代ですからね、こっちが中心となったのは。だから昔は、平安・鎌倉か、その時代で、その勢力を持っとったのはその上白山のほうですわね。だから、こっちへ出て平野へ出るんでなくて、小松のほうへ出てますわね。こっちは通りにくいから、逆に、むこうから、中海（なかうみ）とか軽海（かるみ）とかゆうとこへ、小松のほうへぬけるんです。で、そっちのほうに国府がありますしね。だから涌泉寺（遊泉寺）で、馬を洗うたりなんかしたんで、おこってちゅうなことも、その連絡がすぐ中宮へ走るちゅうのも、ぜんぜんここ通過してないですねえ。小松から直接、鳥越、へ入って、中宮まで行っとると。

B（アクド淵ノ所ハ）あれは白山本宮跡です。駅がございましたですねえ、あそこに、白山の本宮があったんです。ほんで、うしろに山が、船岡山ちゅう山が、あるんですけど、その山のほうが、本殿のほうに向いてあったとかなんとかゆう、聞いたことありますけどねえ。今で言えば、駅から、その山を背にしてとゆうか。ほんであのう、用水と鶴来と、離れてますわねえ、駅の間。用水のぎり〳〵のほう、今工事してるかなんかの、昔はあそこ、オカゴエやったんです。あの、峠みたいな形で。ほんで、あそこはクジュントウちゅうんです。父なんかに言わせると、九重の塔があったんやろ、ちゅうんです。んで、グジュント〳〵とゆうふうな言いかた、僕らはするんですけど。（今ハ）なにも残ってない。んで、下にただ、あのう、不動さんかなんか、祀ってあるだけで。そであの上には、お城があったんです、船岡城。

A（アクド淵ハ）ここはどうせ扇状地ですから、扇状地の要ですから、水が出るたびに、あっちへ行ったりこっちへ行ったり、してたわけです。（十八河原ハ）なんかお講の関係ですよ、十八講（文献ニハ白山ノ修験僧ガ十八講会ヲシタノデイウトアル）。

A（酒造ハ代々カ）そうです。小柳屋（おやなぎ）ちゅう名前です。屋号です。小柳屋五郎兵衛。（何代目カ）わからんのですよ、それが。あの金子鶴村（？）ちゅう、人が、ここの学者がおるんですよ。あの、やっぱり徳川時代に。その日記にも、小柳屋五郎衛門のうちへ行ったて書いてあるんです。で御飯はこういもん食わしたとかね、二階でそのう、歌の会をしたとかね、書いてあんのやから、あることはあるんです。

B　一つはあの、菊姫伝説ちゅうのがあるんです。それはあのう、加賀の菊酒とゆうものを作ったのが、そのう白山（しらやま）さんの女神さんで、ククリヒメとゆう、神さんが、菊理媛とゆうのが、白山さんのあのう、御神体ですから、あの、白山とか大権現とかなんとかゆう、のがそうですから、その人が、女の菊姫とゆう人に化けて、出て来て、なん

か、艶物かなんかあったんないすかねえ。僕はよう、知りませんけど。そんでなんか、菊のしたたり落ちる水で、かんで、まあ酒を造ったとゆう、一つの伝説みたいなもんがあるんで、それともう一つ、菊理媛とゆう白山さんの御神体のお名前から、まあ菊姫とゆうふうに名付けられたとゆうふうには聞いとるんですけどね。

A　これャやっぱり、鶴来の水がいいんじゃないですかね。うちばっかねェ、ここ十何軒あるんですよ。

B　小さな酒屋ばっかり。

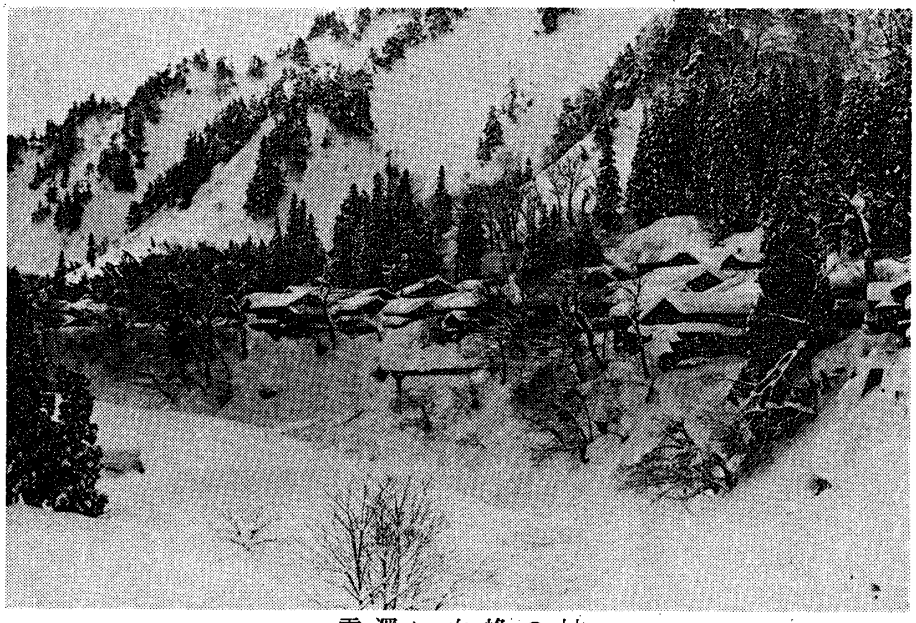
A　小さい、あの、酒屋で。今これ、井戸水です。

B　背中の、二、三メーターうしろの井戸です。わざ〳〵、ここ、バイタ小屋の時代でも、ここの水を使うたちゅうんですから。だから、この井戸、やっぱよかったんでしょうね、よその井戸よりは。

A　バイタ小屋とゆうのはね、酒を造る時ね、あの、マキを……。マキのこと、バイタちゅうんです。んであの、夏冬にかかって、マキを買うたやつ、割って、今重油でばあーっとやってますけど、その、蒸しとる時に、その、木を放り込むわけですな。その、量をある程度まで確保しておかんだら、できんわけです。（米ハ）お米はこの周囲ですよ。昔は年貢米です。杜氏はね、うちはあの、能登から来てましたがね、今も能登ですけど。能登の、あれは内浦ですけどね。

3　白峰にて

村役場企画開発課の木戸口義尚氏に『白峰村史』ほかの資料を見せていただき、村の概況をお話しいただいた。また、林西寺に御案内いただき、加藤文豪師の御厚意で、御本地仏銅造十一面観世音菩薩座像・銅造十一面観世音菩薩立像（国指定重要文化財）等を拝観させていただいた。



雪深い白峰の村

信州――新野の雪祭り

――「雪国の来訪神」採訪資料12――

◎採訪地　長野県下伊那郡阿南町新野

◎日　録　昭和五十六年

一月十四日（水）

12：40　東京駅発（新幹線こだま二四七号）

14：59　豊橋駅着

15：09　同、発（飯田線、急行伊那5号）

17：25　温田（ぬくだ）駅着（晴）

17：33　同、駅前発（タクシー）

18：18　新野・伊豆神社前着（積雪量約20㎝）

一月十五日（木）

08：00　伊豆神社を辞去（快晴）

09：42　新野発（バス、3分遅れ。近藤信義氏同行）

10：35　温田駅前着

10：41　温田駅発

11：15　天竜峡駅着、「天竜峡ホテル」にて浴泉、休憩。昼食後、近くを散策

14：22　天竜峡駅発（急行こまがね4号）

19：36　八王子駅着

1　次第

一月十四日

18：40　境内に到着。昭和三十五年以来、今回が再度の採訪になる。街並みはもちろん、境内のようすも変わっている感じで、記憶はなかなか戻らない。

〈神楽殿の儀〉

○**論舞**（ろんまい）の最中。

○（少年ニ。役ノ名ハ）あのう、シットデ。（頭ニ着ケテイルノハ）これはヒルデンガク。これがヨルデンガク。（着ケテイナイノハ）初めて入ったから。

○イチコ（市子）・ゴダツ（後立）の**万歳楽**。

19：30　**宣命、順の舞**（笛・太鼓・鈴）と続く。

○（コノ敷キ物ハ）これは、アラゴモだね。去年穫れた米の、アラゴモなんだな。

20：05　順の舞終了。以上で神楽殿での儀は終了。

○（少年ニ。何年生）六年生。四年も、三年もおる。（初メテノ子ハ）ゴダツ。（少女ニ。イチョハ四人）はい。（何年生）四年生と六年生。

○（本殿右脇ノ神ハ）えーと、ここはねえ、オクワダイジンとゆう、オクワですねえ、ヤク病の神様。（ガランサマハ）ガランサマはねえ、この方向の、この上にあるんですね。（ソコニ行クノハ本殿ノ儀ノ後カ）いや、あの、終わるってねえ、ここの御殿の祭り、みんなもう入ってね、始まる寸前んなっとるけども、あの、アラガミサマ祀らないと……。（本殿左脇ノ神ハ）あれが大神宮様ですね。（神楽殿ハ）もう六十近いんだが、一回、ここが焼けたことがあるんだ。いつだったかしらんが。やっぱりこうゆう雪祭りやって、火がどっかに残って付いておったんだな。あくる日焼けたことがあるっつうことだな。

21：15　拝殿で舞の練習始まる。

21：50　消防団員が集合して、庭に**大松明**を立て始める。「ヨーイショ〳〵」の掛け声。

22：23　大松明、漸く立て終わる。

○（点火ノ方法ハ）二本の、こうゆうただ、ロープで。おいで、片っぽ、すべっちゃうわけ。おうすっと、こうふにくだってくるわけなの。（アノ舟の名ハ）宝船。（乗ッテイルノハ）恵比須・大黒。（稲穂ハココデ穫レタモノ）ええ、ここです。（神田デカ）神田、別にないんです。

○（コノ雪ハ）これはね、年の暮れに降ったのかなりあってね、いっぺん掻いて、そのあとまた、十二ンちの日にまた掻いて、それからあとまた、今朝あたり、ここへ来る時にね、五センチぐらい、あったです。

〈本殿の儀〉

23：00　太鼓鳴る。

23：05　「ただ今から、大祭を執り行ないます」との案内。修祓・祓詞。

途中、モドキほか役舞の四名が**ガランサマ**に行き献饌、祠前で宣命、順の舞の後、神酒を飲み合って本殿に戻る（この間、本殿では開扉・奉幣があったと思われる）。

本殿では奏楽（笛・太鼓）に合わせて献饌。祝詞奏上・玉串奉奠。

23：58　祭典終了。

一月十五日

00：00　**中啓の舞**(1)（神職。笛・太鼓）

※（案内放送。以下同じ）中啓の舞であります。昔、……にお寺のあった時に、そのお寺の住職、別当が舞った舞だと言われております。

中啓の舞(2)（老人）

○（舞人ノカブリモノニ遠江守・伊豆守ト書イテアルノハ）あれはねえ、西上手（にしわで）がねえ、関遠江守ね、それで東上手ってのが、下条伊豆守ね。四人でやるんです。まあ、それは、いちおうねえ、あのう、このお祭りを、執りしきるわけなんです。それで舞っとるわけです。三・五・七ってふうに、舞うわけです。で今、二人ではおけんてことは、三人舞えとゆうことです。そいで、四人舞ったら、五人は舞わないか

ないんです。

中啓の舞(3)

00：17　イチコの**万歳楽**（四名）、ゴダツの万歳楽（三名）。西上手の老人にうしろから抱えられて、「万歳楽〳〵、御万歳楽」という声に合わせて、順次、神前の拝礼。

ゴサンゴー（御参宮）

※庭でゴサンゴーであります。厄落としのゴサンゴー。

子どもたちの声で「ゴサンゴー」、鈴を振りながら境内の摂社を廻わる。

00：25　拍手の後、太鼓・鈴に合わせて**宣命**。終わりに近くなって調子早くなる。

途中、庭で消防団員、のちに一般参観者も加わって**ランジョウ**。庁屋の壁を、初め杉丸太を抱えて打ちつけ、後には各自がマキで乱打。この時「ランジョウ〳〵」の声を繰り返す。

00：38　一同揃って拍手、宣命終わる。

順の舞（笛・太鼓に合わせてまず神職から）

サイホウ、神火をいただいて庁屋に至り、**面開き**。

〈庭の儀〉

01：05　神職、神火を持って庭に出、大松明に点火。

※いよいよ松明の火がつけられます。

鈴を振る音しきりにする。

サイホウ(1)

笛・太鼓に合わせて舞う。舞いに合わせて見物人が「ヨウ〳〵」「ヨーシ」と声を掛ける。

※庭開きが行なわれまして、サイホウであります。サイホウは、庁屋から九回、出てまいります。七回目から、ビンザサラを連れて出てまいります。

サイホウ(2)

「うまいぞー」などと声が掛かる。

サイホウ(3)

途中からホッチョウに廻わる。

サイホウ(4)

「サイホウさん、だいぶ調子にのってきたぞ、そう〳〵〳〵」などの声が掛かる。途中から「氏子繁盛〳〵」と言って、ホッチョウに廻わる。

サイホウ(5)

「いいよ、いいようっ」「しっかりやれよっ」などと声が掛かる。また、「えらいぞうっ」「しっかりきめてっ」「はいこんどこっちを向いて」などという声、「よーよっ」などと調子をとる声、「いい腰つきだ」などという声が掛かる。

※途中でございますけれども直会をいたしますので、おはがきで案内を申しあげたかた、社務所のほうへおいでください。

サイホウ(6)

01：55

サイホウ(7)

楽の調子ゆるやかになる。笛・太鼓。ビンザサラ加わる。決まりごとに「ソーリャ〳〵」の掛け声。「おやじがんばれ」と声が掛かる。「さあ、おとっつァま〳〵」の声が掛かる。

サイホウ(8)

楽の調子急になる。一度、楽がやみ、すぐまた続く。またやんで、また始まる。こんどはササラなし。

サイホウ(9)

楽の調子ゆっくりと。ササラあり。途中から「このサイホウが、ひっきゃり、オヒアブリの、火をまぶってさしあげます」と言ってモチアブリに行く。決まりごとに「ホーリャ〳〵」の声が掛かる。サイホウが戻ると、「おとうさんお帰りなさい」の声が掛かる。

※交通安全・厄よけ祈願をお願いしたかたは、本殿へお集まりください。

「あんまり柳腰で、ほれぼれするよっ」「もっと柔らかーく、もうちょっとだな」などの声が掛かる。

02：25　雪ちらつき始める。

「おとっつァまも、やりにくいかもしれねえが、頼むよ、ハハハハア」「ヨーシ〳〵」「なかなか腰がええでや」などの声が掛かる。

モドキ(1)

笛・太鼓に合わせて舞う。「足腰見てくれや、手の延び、ええよっ」「腰つきがええぞっ」「ヨイショッ〳〵」「これからが問題、そう〳〵っ」「はい、もどってね」などと声が掛かる。

モドキ(2)〜(7)

笛・太鼓。笛・太鼓・ビンザサラ、ゆっくりと。決まりごとに「ソーリャ〳〵」の声が掛かる。「モドキの、きんりき、オヒャブリの火を、もって進ぜます」と言う。決まりごとに「ソーリャ」の声が掛かる。「もちょっと、腰に力入れてやれ」の声が掛かる。笛・太鼓、調子が早くなる。

03：40

競馬（きょうま）

笛・太鼓

※オキョウマンサマが始まりました。

笛・太鼓

※ただ今、一の馬が出ました。二の馬が続いて出まして、馬競べをいたします。

途中、楽の調子が緩から急へと変わることを繰り返す。「ヨイショー〳〵」「イェーッ〳〵」「ヨーッ〳〵」「ソーレッ」などと、動きに合わせて声が掛かる。

※一の馬の庁屋入りであります。

※二の馬の庁屋入りであります。

※オキョウマンサマが終わりまして、伊豆神社の宮司さんが舞うオウシであります。オウシは御殿に向かって、ウワザシの矢を射るのが特徴であります。一回だけ出て入りますので御注意ください。

牛

笛・太鼓。後に調子ゆるやかになる。「ソレッ、バンザーイ」の声が掛かる。楽、もとの急な調子になり、ふたたびゆるやかになる。「ウォーッ、バンザーイ」の声が掛かる。楽、また急になる。

※オウシが終わりました。次はオキナでございます。オキナは拝殿で行ないます。

翁

※お祭りに出たかた、ヨナガレをいただきにおいでください。

04：40　翁終了。

笛・太鼓。

松影

04：55　松影終了。

笛・太鼓。

ショウジッキリ

05：10　ショウジッキリ終了。

笛・太鼓。

05：12

海道下り

笛・太鼓・鈴。動きに連れて「かんきわまったよ、さあ、おとうさま、連れて来いよ」「おとうさま、お供を連れて来て」「ちらっと見てくれや」などの声が掛かる。楽がやんで「ここらがいいの、もうちょっと明るいほうがいいの、よい〳〵、まだだめ、よい〳〵〳〵、まだだめだなあ、はいこっち向いて、よい〳〵〳〵、坐わったぞ、おみごとさま、ああ、うまいなあ、そんなもの五貫五百も都の財をおとっつァま、買ったのけェ、今じゃァ、三貫五百だって買えらあ、よいしょと、お爺、手荒に扱うな、そんなに手荒に扱うな、そりゃ無理っつゥもんだ、僚友をいたわれ」などと声が掛かる。「お爺、いくらかピクッ〳〵と開いたぞォ、おまじないが逃げたァ、アハハ」の声が掛かる。鈴を振りながら呪文を唱える。「お爺さん、ほめてるのか、どうじゃ」の声が掛かる。笛・太鼓。

神婆

笛・太鼓。

※ただ今出てまいりましたのが、カンバでございます。

笛・太鼓。途中で数度、調子が変わる。動きに連れて「そう〳〵、いいぞっ、いいねえ、腰巻はあるか、はばけたっていいぜ、やれ〳〵、いい〳〵、けっこう〳〵、若い衆はいいなあ」「そうだい〳〵、おい、娘ほめてやってくれや、いい子だ〳〵、腰の振りかた〳〵、手の振りかた、どうだい、みんなうっとりしたような顔して、おい見れまア、ちょっと、ちらっとこうめくったようなことしたねえ、なんだねえ、へへ……」「ウォーッ、やった〳〵」などと声が掛かる。

※えー、カンバが終わりました。次は鬼でございます。

鬼（天狗）

笛・太鼓。決まりごとに「ソーリャ」の声が掛かる。「なんとか言いやれ、さあ鬼様がこっでダクダイとれば、また今年も豊作だぞ」の

声が掛かる。斧・槌を打ち合わせる音。「鬼はこっちだ、おれのゆうとおりにしろ、もっと前へ出ろ」などの声が掛かる。楽、やむ。

鬼「オーッ」、神職「ナニガナンダ」、鬼「オラ……」、神職「シジュウハッテン、ナニモノダー」、鬼「ハチマンハッセン、ヨヲヘタル……」の問答。

「かかれ〳〵、もっとかかれッ」「とびつけ〳〵」「ほう〳〵」「やれ〳〵、もっととびあがれ〳〵」などの声が掛かる。「今年も鬼様敗けたの」の声が掛かる。楽、始まる。「鬼様敗けたんだもの、えれェ気んなって帰らんように」「ええ、敗けたんだてなあ」の声が掛かる。楽、やむ。

※えー、オニサマが終わりました。次はハチマンでございます。

八幡

笛・太鼓。鈴。笛。「まず一本」の声が掛かる。女の人の笑い声。笛・太鼓。鈴。笛。女の人の笑い声。笛・太鼓・鈴。

06：15　空が白みがかってくる。

楽、やむ。「だいが、だいを、正直にやれ」の声が掛かる。笑声。楽、また始まる。鈴。「わあ、たまげた、めしとるものほかはなし、そらあそうだ」などの声が掛かる。

鈴を振りながらの唱言「マナコノアタリヲ見テヤレバ、金銀ノ鈴張ッタルガゴトシ、耳ノアタリヲ見テヤレバ、牡丹ヲククッタルガゴトシ」。

「牡丹をくくったようだ、こりゃ、牡丹をくくったようだって、おとっさま、どんなもんだやら」の声が掛かる。

鈴を振りながらの唱言「……ヒャクテンガレンヲシカケタルゴトク、シソクノアタリヲ見テヤレバ、ブッキヲフセタルガゴトシ」。

「おう、ええぜ」「こらまあ、おとっさま、五升三合で独占で買ったようなもんだ、おい、ハハハァ」「ほら、牡丹を重ねたような、おめえ、あれが坐わっとるがさ」「まあだまだ、そうまでいかんのよ、まだあ」「手、腰へやったとこがええじゃないか、あの手つき、手つきがなんともゆえん」「こわいような手を置いて」「静かにまあって」「また五升三合だ」「なかなかおとっさま、テンミがえらいじゃないか、またそっちのほうで、うん」「なかなかやわい手つきで、うん〳〵」「こんだ、三升三合」「こんだけテンミをすりヤ、へえ、ぽつぽつ、うん、そんな気んなってきたのォ、おとっさま、ウァハハハアー」「うん、うん、なってきた」などの声が掛かる。鈴を振る。「ほう〳〵、こーらまあ、えれェことするがあ、ほう」「お馬ん乗るのか」「おーォ、おいしょッ」「なかなか」「方角が悪いわ」「そんなおとっさま、だめ、アキのかたは知らんの。だいたいで、あんなお供えぐれェでごまかしやァがって、アキのかたも知らんでけつかる」「よーいしょッ〳〵」「おとっさま、もうそろそろ口がかわいてきはせんか、うーん、そんなに恐ろしい、つまづいとりャ」「足元がわりィ」「うん、よいしょッ」「なかなか腰つき早くなってきたよッ」などと声が掛かる。ついに「ヨーオッ、アー」と歓声があがり、拍手。笛・太鼓・鈴。「こんな、おとっさまに、付き合ったら、馬鹿みてェんもん

だ、ハハハア」の声が掛かる。
※えー、八幡が終わりました。次はシズメでございます。

シズメ

笛・太鼓・鈴。「足元を確かめてかア、あっちゃだめだ」の声が掛かる。

シズメ「五升三合ノ餅」

「でっかいお供えだなあ、五升三合じゃあ、食えねえわやァ」「こんと三升三合」の声が掛かる。

シズメ「三升三合ノ餅」

「三升三合は、五升三合と、おんなじぐれェじゃねえかい」の声が掛かる。

シズメ「五升三合ノ餅」

「こんどまたァ五升三合、なーるほど」「どうかおれは、目が狂ったか、でかさが同じようで、どう?」「なんだか、あーんなおまじないを始めた」「またッ、似たようなことやるなあ、あれなあ」「さあー て、お尻を、よーいしょッ〳〵、もいひとつ、こんだのれよッ、よいしょッ、だめだ」「よーいしょ、も一回、よいしょッ、まんだだめだ、もういっぺん、こんだッ、だめだッ」「はたの衆がだまっとるでのれんだわ」「よいしょ、ほれ、よいしょッ、まんだだめだ、こんだやれッ」の声が掛かる。「えーらいことしちまった、ウーッ」と歓声があがる。笛・太鼓・鈴。

06：45

鍛冶

笛・太鼓。

親方「バンゴヨー」

バンゴ「オヤカヂヨー」

まずオクワサマに行く。以下、会話を、親方は(オ)、バンゴは(バ)、見物人は(見)で示す。

(オ)バンゴはなあ、商売道具置いてけりや……。

(見)こらッ、バンゴは商売道具置いて、どこへ行ったッ。

(オ)旦那衆に商売道具持たせるようなことじゃ、お前、仕事する気はねえな。

(見)足袋もなんも買ってやれんぞ、はェ。

(オ)バンゴヨー。

(バ)オヤカヂヨー。

この間、見物人は各自言い合う。また、両方の言い分に、それぞれ、見物人は同調、あるいは訓す。両方に分かれての会話で、しかも混線しているので必ずしも筋は通っていない。

(オ)五升三合をこれだけに固めるとゆうのは、そうとうの怪力だから。

(見)バンゴもおらんに、商売するだか。

(オ)……御神酒がなけりゃなあ。

(バ)バンゴ、日頃の……。

(見)そうそう、御神酒を持って、うちの……、今、御神酒を持って来

るで、頼むわあ。
(オ)両方、あやまってなあ、ちゃんと……。
(見)そう、ま、今、持って来るで、頼むわなあ、そういことで。
(オ)……おら、へェ、帰る。
(バ)そりゃ、おやじが……。
(見)旦那衆がそうゆうだで、ちょっと待てよ。
(オ)バンゴヨォー。
(見)さあやれ。
(オ)なあ、こんたら野郎はだめ。
(バ)そりゃな、オヤジが悪いもんで、バンゴがな、まいっちまう。オヤジのちぎりが悪いもんで……。
(オ)とにかくな、こんなバンゴなんとはなあ、はやりのものがぜんぶほしい。女衆がスカートゆったら、スカート、買ってやってよォ。
(見)(笑)
(バ)旦那衆〳〵、あのなあ、オヤジは、一銭もゼニをくれんの。
(見)オヤジ〳〵、バンゴのゆうことも、ちっとは聞いてやらんにゃ……、そりゃ無理とゆうもんでねェか。
(バ)こんなふうに、これだけバンゴがしんけんなってやっても、こんな、殺生なオヤジじゃ……。
(オ)……くやしかったら、ここへ来て、正々堂々と、文句並べてみろ。(バンゴ逃げ出す)。
(オ)ゆいぶんゆいやあ、バンゴは逃げちゃんじゃねえか。それを逃がす旦那衆も情ねえ。
(見)それは、オヤジが悪い〳〵。
(オ)せっかく酒をもらって、お宮ん酒をもらって、飲ましてやろうとゆうのに、バンゴのやつ、おれの……とはなにごとだ、この……。
(見)そりゃァ、オヤジのしつけが悪い。バンゴのしつけがきびし過ぎるんだ。
(オ)バンゴ、ここへ来い。……。
(見)よし〳〵、引き受けようじゃないか、あんまりおこらんようになあ。今の子はおこると弱いでなあ。金属バットでたたくようなるから(一同、大笑)。
(バ)オヤジが、ゼニをくれんから、よそへ行って、働いて来ました。こんなオヤジは、一銭もゼニをくれもせんで……。
(オ)今の世の中で、働きもしないでゼニをやる者はないで、こんど、十四日は、伊豆社のお祭りだで、若い者連れて、きれいにして行きたいと思って……。
(見)なにを買ってやったんだ。
(オ)足袋を、と思ったら、皮靴買ってほしい、て。(一同、大笑)。皮靴買ってやったら、すぐ質に置いて来て……。
(バ)このオヤジは、うそばっか、こきゃがってなあ(話、混線)。
(見)わかった。よーくわかった。おめえの皮靴を質へ入れたこともわかった。そのフイゴのゼニも、使っちまったこたあわかった(話、混線。バンゴ、フイゴを動かす動作、掛け声)。

(見)やる気んなってきた、ちょっと(話、混線)。
(見)旦那衆、そいことだ、頼むぞ。
(見)まともに仕事をすりゃあ、足袋の一つぐれェ、また買ってやるぜえ(一同、フイゴを動かすのに合わせて、ツーツ、ポープーの掛け声。
(見)フイゴの音が悪いじゃねえか(フイゴをたたく音)。
(オ)フイゴをなあ、たたいてござってしもうとはなにごとだ(話、混線)。
(バ)こんなオヤジ……。旦那衆は、目がわりィ。
(見)……オヤジが悪い。話を聞いてみると、明治時代だ、おめえも。気持をやわらかーく、持ってもらわんと……(話、混線。二人いなくなる)。
(見)さ、バンゴもオヤジも、ここへ連れて来い。
(見)おれァ、バンゴを言いふくめて、ここへ連れて来るから……。
(バ)仕事ができました。そんなしみったれな旦那にャ、こんなものァ、お付き合いしません(バンゴ、逃げ出す。一同、大笑)。
(見)大事な商売を、ほったらかして……(バンゴ、連れもどされる)。
(見)オヤジはおらんなあ。ここア、いっしょけんめい働けば、オヤジもそれを認めるってェ。
(バ)あんのねェ、しみったれオヤジに……。
(見)しみったれでも、オヤはオヤだで。がまんしょう〳〵。
(見)そらァね、あんなしみったれオヤジに、バンゴもね、長年付いてることは、オヤジのどっかいいとこがあって、付いてるんだな。
(バ)仕事はバンゴにいっしょけんめいやらせといて、……じゃ、後家……ばっかりしといて(一同、大笑)。

笛・太鼓・鈴――**田遊び**。境内の一隅、庁屋入口前付近に太鼓を据え、三方に稲穂をのせて供える。そのまわりで歌を唱える。それとは別に鍛冶はなお継続。

(見)旦那衆、なんとか言って、ありゃあつかまえて、ここへ移して来いよ。とにかく、ここで商売をせんことにはねえ。
(見)そうだ。
(オ)バンゴヨォー。
(見)オヤジヨォー。バンゴヨォー(オヤジ、もどる)。
(見)こりゃ、オヤジかァ。
(オ)オヤジよォ。
(見)オヤジなんてなあ、徹底的な浮気でなあ。
(オ)さわるなて(一同、大笑)。
(見)オヤジは浮気が多過ぎる、そりゃ。そいでなあ、オヤジもちょっと、スネコウバやったがよォ、また心を入れ変えて、またやる気んなったよ。
(オ)バンゴヨォー。
(見)バンゴはどこへ行った。
(オ)すべてはな、相手がなけりゃだめだ。

(見)そりゃそうだ。
(見)バンゴを連れて来い。
(オ)氏子総代はどこへ行った(一同、大笑)。御神酒をあげねえで。
(見)ほんとは、でかいやつあげさした、あるじねゃえか、おめえ(一同、大笑)。
(オ)氏子総代が来るかバンゴが来るか、どっちか来い。
(見)烏帽子をかぶった人が来た。
(オ)こんなものは、一年にいっぺんで終わるじゃねえか(一同、大笑)。
(神職)さあさ、ちょっとまて。まあいっぺえ飲まんか。
(見)心を、静ーかに持って。
(見)バンゴに見つかるとおこられますよ、おとっつァま。
(見)フイゴの上に腰かけて、酒飲んどる(一同、大笑)。
(バ)オヤジョォー(バンゴ、もどる。話、混線)。
(見)……一回、あるかねえか、勘定してみれ。おう、スカートが一万円。
(オ)……の皮靴じゃァねえんだ(一同、大笑)。
(見)あの皮靴だって、エゲレスから買ったんだぞ、おめェ(一同、大笑)。
(見)こりゃ、少ねェがよォ(話、混線。フイゴを動かす動作、掛け声)。
(オ)おッ、旦那衆、勘定せんのに、そんなに、商売させんなよ(話、混線。勘定する様)。
(見)勘定はええから、そういそのう、感情的んなっちゃいかん。
(見)バンゴのゆうことも聞いてやらにゃあ。
(見)そりゃあしょうがない。オヤジの仕込みが悪いんだから、しょうがない。許してちょうだい。
(鈴を振る音)
(オ)こらァ、バンゴ、これだけあんだ、オヤジでも認める。オヤジが作っても、これだけの布てもん……(話、混線)。
(見)でも、最終的にゃ、きれいな娘んとこサ、嫁さんにもらってやったら、落ち着くんじゃないだか。
(見)そりゃ最高だ(話、混線)。
(オ)……鈴を誉めとるて……(話、混線)。
(見)どんなもんだか、勘定やってみろ。足りなあ、旦那衆に頼まにゃ、しょうねえ。
(見)そうだ。
(オ)いや、バンゴが持って、行っちゃったじゃねえか。勘定持って……。
(見)オヤジ、オヤジはな、目を白黒してるが、旦那衆が見てるんだ。
(オ)……一つあった。
(見)ほーれみろ。一億円て金があるじゃねえか。
(オ)いや、申しわけない(話、混線)。
(見)オヤジがあれだけ最後に、隠したやつを出すとなあ、バンゴだっ

て……。
(見)おめえ、逃げてっちゃあだめだぞ。
(バ)バンダ、マンダとゆうぎりや……。
(見)バンゴはやる気はねえのか、おェ。
(見)バンゴ、ここへ来て、ちゃんと、話しれよ。勘定合わせてみればわかるじゃねえか(話、混線)。
(見)さあ、やるか。
(オ)……一日以前はなあ、もうへェ、しょうないで。おらァへェ諦めてなあ。……にへェぜんぶやっちゃった。
(見)なかなかわかるじゃねえ、そう〳〵。
(オ)「一力」の借金、「松本屋」の借金、「大吉」「丸八」、数えりゃきりァねえ。それ、ぜーんぶおれが払ってやった(話、混線)。なにもかんも、それ十万ほどかけてるんだ。その間に、働いた日数がいくんちだと思う。たったの三日(話、混線)。
(見)オヤジはオヤジのゆいぶんがある。バンゴはバンゴのゆいぶんがある(話、混線)。
(オ)正々堂々と、旦那衆の前で、勘定してみろ。
(見)さあ(ツーツ、ポーポ、の声に合わせて数える様)。
(オ)そら、旦那衆、バンゴのやつ、おかしいじゃねえか。
(見)バンゴ〳〵。
(バ)旦那衆、それじゃ行って働いてきます。
(見)また逃げちゃった。
(見)行って働くって、どこへ行って働く。
(見)連れてこい〳〵。
(見)バンゴヨォー。
(見)オヤカヂヨォー。
(見)オヤジも、いいかげんに勘定合わして仕事始めにゃあ、しょうねえぞォ、おい。いっつまでも、そのォ、お祭りやっとるわけにいかんじゃねえか(オヤジ、みんなに酒をふるまっている。見物人、かなり帰る)。
(オ)バンゴ、連れてこにゃあかん。
(見)バンゴは連れて来るがヤ、オヤジもそいでも、バンゴもいい年んなったぜ、おい。嫁さんぐれェ世話してやらんと、しょうないぞ、おい。
(オ)世話してやろうとしても、腕がなけりゃ、しょもない。
(見)バンゴはどこへ行った。バンゴを連れてこにゃ、なんにもならんじゃないか。
(バ)オヤカヂヨォー(バンゴ、もどる)。
(見)……ちゃんと勘定に合うように、精根かってやってみろ。
(見)さあやれ。
(バ)はい。
(オ)これ、枡はなあ、これはあのう、おれがちょっと神経痛が悪くてなあ……(笑)。こいつァ旦那衆のもんだ(笑)。
(見)さあやれ。

(バ)くじって九貫、はじって八貫。
(オ)はじって八貫、くじって九貫て、どっからそんなくじって九貫てものが出るんだ。
(バ)さっきは旦那衆、バンゴが敗けましたから、一貫行ってくじいて来ました(話、混線)。
(オ)くじって九貫が、どっから最初っから出る。
(見)もいっぺんやれ、もいっぺん。
(見)それやってみよう。
(バ)ツーッ……。
(見)ツッ、ボボは、これは商売。
(見)勘定してみろ。
(見)金勘定や。オヤジ先ちょっとはじいてみれ。
(オ)オヤジがはじくとなあ、きょう、へーてかかってもう……(一同、笑)。
(見)へー、て、そりゃたいへん。
(オ)これ、一年かかってもわからん。それでは旦那衆に迷惑かかって、オヤジははじかん。
(見)よし。じゃ、バンゴ。
(バ)そいじゃあ、旦那衆のゆうとおりに、バンゴは、はじきます。
(見)よし。
(バ)くじって九貫……(なにかを打ちながら)。
(オ)その、くじって九貫が、どっから出たんだ。
(バ)……オヤジに借りました。町へ行って、稼いで来て、今払ったわけでございます。
(オ)そいじゃ、その証明をやれ、証明を。
(見)くじって九貫てものが、どっから出たかをやりゃあ、わたしたち、わかるんだ。
(バ)バンゴは、オヤジから、バンゴは一貫借りまして、今稼ぎへ行って来たの、わかりますか。
(見)ああ。そや〳〵。
(バ)雪ん中を、今、これ、勘定して払ったわけなんです(金具のものを放り出す音)。
(オ)それじゃあ、直納で、くれたわけか。このダルマは……。
(見)バンゴが九貫なんて、どっから出たのよォ(話、混線)。
(見)勘定が合わねえじゃ、ねえか。
(見)そんな、バンゴ、だめらわ。
(見)そいでもなあ、若い人は、あれだぞォ……。
(バ)オヤジは……。
(見)だてに先に生まれてきてはおらん。
(見)年ャ年。
(見)先輩は先輩。
(見)旦那衆の気持にもなってみないかんて。
(オ)おおきに、酒もとぼしくなったで……。
(見)またやるか。

(見)たらんとこは仕事してやれ(話、混線。随自、「あ、ツーツ、ポーポ……」の声)。
(オ)おれ、フイゴを持って、帰るわ。な、ゆっくりやって……。
(見)まかねえは、旦那衆にまかせて。
(見)よーしよし。
(一同)そーりゃ〳〵……、よいしょ……。
(見)いいオヤジ持ったな、オヤジが折れたぞ(鈴を振る音)。
(見)おら〳〵、あれ、嫁さんじゃねえかや。
(見)バンゴの嫁さんだ、こりゃ(随自、唄、「いいオヤジを持った」などの声)。
(見)ほーれみろ、きれいなもの見ると、オヤジはすぐとんでっちゃう。
(見)どうだバンゴ。
(バ)なんで旦那衆、逃がすだ(話、混線)。
(バ)そいじゃ、バンゴ、担ぎます。
(見)担いで行げ。
(見)ちょっと待て。バンゴ、こいふうに担げ、はずれるといかんでよォ、そう〳〵。早く行け。
(見)もっと、ねじって担げ。
(見)あ、あッ、逃げっちゃった。
(見)しょうがねえ。
(見)あんなバンゴもオヤジも、とてもおりゃ……(一同、しかたなく、残った道具を運んで行く)。

07：38　鍛冶終了。
07：47　いつの間にか田遊でも終わっていて、すべて終了。
07：55　村人が神社その他の片付けをする以外、全員引きあげる。
○(今日十五日ハ家デハナニカシナイノカ)そう。(昔風ノ正月飾リハ)あるだら、まんだねえ。餅をならしたりさ、うちん中で。木を伐ってきてねえ、こう、立ってさあ、そいで、マイダンゴ、成り木、マイダンゴを作ったりねえ。そいて、稲穂を、竹を伐ってきて稲穂を……。だいたい、(ドコノ家デモ)やってあるわけなんだ。そりゃあこんだ、二十日正月に、そいつを、納めるんだがねえ。(歳神ノ棚ハ)うん、歳神様って、ここら、エベスサマ・ダイコクサマ、ねえ、そいった、ものを中心にして、やってるんだが……。(正月様・歳神様トイウ言イカタハ)そういことは、言わんなあ。トシガミサマは、そういのはあっだわ、ゴカンニチのうちは、祀ったり、まず、松は祀ってあるわなあ。庭先からうちん中まで。うちん中にも、この、松をなあ、祀ってある。
08：00　神社を辞去。

2　詞章

〈神楽殿での宣命〉

○
○　(録音不調につき、二章不明)

（ゆっくりした調子。カッコ内は別人の唱）

○……矢トユウ声ニ……ヨーオスァ　……オドロキテ　矢トユウコーエハ　ヤーア　鬼ノーカラ声。

○若ミーヤーノ　ヨリテハイクツー　ヨォースァ　（ヒダリーヤーツ）ヒダリヤツー右ハ九ツヤー　中ハー十六。

○マスーミーノ　カザオノ松ーハ　ヨォースゥー　（ネワトヲオーツ）ネハシゲクー　ウラカキワーケテヤーァ　ゴザトーマイラス。

○オマーエーニ　ショージノシメニハヨーオカー　（イクエーヒク）イクエヒクー　七重モヤーエモヤーア　重ネー八重引ク。

○メーシンートー　ショージーラレタノ　ヨーオスー　（ウレシーサーヨ）　ウレシサヨー　神モロトーモニ　ヤーア　ゴザトーマイラス。

○ミシマーニーハ　ヤツアルウグイガヨーオサー　（ヤツナーガーラ）ヤツナガラー　ハナヲーソロエテヤーア　ゴザトーマイラス。

○コノカーミーハ　男ハナイイガヨーオサー　（ネショウーミーコ）ネショウミコー　男ハアーレドヤーア　神ノー誓イニ。

○春日ヤーマ　オロスー嵐ガヨーォサー　（シゲケーレーバ）　シゲケレバー　カザオノマーツハヤーア　露ニハ濡ラサジ。

○浅間トート　ショージーラレタノ　ヨーォサー　（ウレシーサーヨ）ウレシサヨー　神モロトーモニヤーア　ゴザトーマイラス。

○伊勢ノークーニ　マイレバトーオキ　ヨーォサー　（キヌニーナレバ）　キヌギヌナレバー　折リテーエタタミテ　ヤーア　ゴザトーマイラス。

○「伊予ノークーニ」（言わず）　アマノー岩戸ヲ　ヨーオスー　（オシヒーラーキ）　オシヒラキー　神アラワーレテ　ヤーア　ゴザトーマイラス。

○勢田ー子ート　ショージーラレタノ　ヨーオスア　（ウレシーサーヨ）　ウレシサヨー　神モロトーモニ　ヤーア　ゴザトーマイラス。

○伊豆社ージーノ　カケヤウハタウルー　ヨーォサー　（ユタスーキーヲ）　ユタスキヲー　カケマガモーリノ　ヤーア　千代ヲーコソスレ。

○?……トート　ショージーラレタノ　ヨーオサー　（ウレシーサーヨ）ウレシサヨー　神モロトーモニ　ヤーア　ゴザトーマイラス。

（調子早くなる。不明個所多し）

○……ガーワーノ　コシメス時ノサヨーサー　（?ノルフーネーハ）?ミルフネハー　フモトモ見ーエテ　ヤーア　……トドマル。

○……ヨーサー　（……）　?ツツミキテー　……ヤーア……。

○……コトノー　ヨーオサーョ　（ムカシーヨーリ）　ムカシヨリー変ワラヌ御ー代ハ　ヤーア　カムガーキノ内。

○……。

○……神ハーサカユル。

〈ガランサマでの宣命〉

○正ガーツーハ　キョーゾー吉ニチョー　アヤヲーハーリ　アヤヲハ

リー　錦ヲシーキテ　ヤーア　ゴザトーマイラス。
○ガランーコート　ショージーラレタノ　ヨーサ　……手ニハー取レ（唱言に混乱あるか）
ドモ　ヤーア　袖ハー濡ラサジ。
○諏訪ノーウーミ　ミズソコ照ラース　ヨーサ　……手ニハー取レドモ　ヤーア　袖ハー濡ラサジ。

〈拝殿での宣命〉

（初め聞き取り不能個所多し）
○サン、……ヤー……オシヒーラーキ　錦ノ……巻キアーゲーテ　君ニー……マシマーサーバ　我等モミマエニサムローオーテ　オマエニマイリテ打ツツーヅーミ……竹ノー林ガ高キートーテ　天竺天マデトドクーカーヨ　ツルギノヤエバガ早キートーテ……竹ヲ削ルーカーヨ　春来テ夏ユクツバクーローカ　竹ノーヨドロニ巣ヲカーケーテ　アレヲバナニトイワォーターリ　長者ノスズメノイウトーターリ。
（調子変わる。カッコ前までは神職一人が唱え、カッコ内は別人一人が唱え、以後はその他複数で唱え、サテ以下は一人が唱える）
○サー、イツョーリーモ　五葉ノ松ニハ　ヨーサー　（トビターカーク）　トビ高クー　光ーサスマニ　ヤーア　トビゾー入リマス、サテオモシロサンヤーー。
○春来ーレーバ　五葉ノ松ニハ　ヨーサー　（ユヅリー葉ーヲ）　ユヅリ葉ヲー　シダ取リソーエテ　ヤーア　ゴザトーマイラス、サテオモシロサンヤーー。
○春来ーレーバ　年ノオ初メニ　ヨーサー　（播クヨーネーハ）　播クヨネハー　コトシハヨーキト　ヤーア　祈リーコソスレ……。
（テープ交換のため前後三句不明）
○……ヨーサー　（水汲メーバ）　水汲メバー　水モロトーモニ　ヤーア　福ゾー入リマス、サテオモシロサンヤーー。
○春来ーレーバ　年ノオ初メニ　ヨーサー　（年オートーコ）　年男年籠メマーイル　ヤーア　神ノー誓イニ、サテオモシロサンヤーー。
○春来ーレーバ　峰ノー薄雪　ヨーサー　（ウチ解ーケーテ）　ウチ解ケテー　苗代（ナエシロ）ミーズニ　ヤーア　カケテースマスヨ、サテオモシロサンヤーー。
○春来ーレーバ　年ノーオ初メニ　ヨーサー　（播クターネーハ）　播ク種ハー　シラハーアシラハノ　ヤーア　ナガキーコノ稲、サテオモシロサンヤーー。
○春来ーレーバ　谷ノーウグイス　ヨーサー　（アルカートーヨ）　アルカトヨー　春ハー来レドモ　ヤーア　音スーゲモナヤ、サテオモシロサンヤーー。
○春来ーレーバ　イマグワスーミニ　ヨーサー　（ナリヌーレーバ）　ナリヌレバー　コヨジトハーハガ　ヤーア　ウレシーカルモノ。
○ショーガーツーハ　キョーゾーヨキヒー　ヨーサー　（綾ヲーハーリ）　綾ヲハリー　錦ヲ敷ーキテ　ヤーア　ゴザトーマイラス。
○トコローデーハ　所ノ神ーガ　ヨーサー　（オオーワスル）　オオワスルー　ワレエニカタザル　ヤーア　ヒメグーリノ神。

○諏訪ノーウーミ　ミナソコ照ース　ヨーサー　（この部分からランジョウ始まる）（コダマーイーシ）
コダマ石ー　手ニワア取レドモ　ヤーア　袖ハー濡ラサジ。
○ヤハターヤーマ　城ノー山吹　ヨーサー　（サギサーカーイ）　サ
ギサカイー　アオバーカサジト　ヤーア　花ノーヨダモノ。
○山ノーカーミ　育チハナニ国　ヨーサー　（奥ヤーマーノ）　奥山
ノー　外山ノオークノ　ヤーア　花ノー木ノモト。
○若ミーヤーノ　ヨリテハイクーツ　ヨーサー　（ヒダリーヤーツ）
左ヤツー　右ハー九ツ　ヤーア　中ハー十六。
○オマーエーニーハ　ショージノシメーハ　ヨーサー　（イクエーヒ
ーク）　イクエヒクー　七重モヤーエモ　ヤーア　カサネー八重ヒ
ク。
○ハコネーヤーマ　ノボレバクダール　ヨーサー　（ネロローコー
ニ）　ネロロコニー　袴ヲ着ーセテ　ヤーア　ゴザトーマイラス。
○コノカーミ（カミヅーマニハ）ーハ　男ハナイイガ　ヨーサー　（ネショーミーコ）
ネショウミコー　男ハアーレド　ヤーア　神ノーチカイニ（サカエ）。
○伊予ノークーニ　アマノー岩戸ヲ　ヨーサー　（オシヒーラーキ）
オシヒラキー　神現ワーレテ　ヤーア　ゴザトーマイラス。
○……ト　ショウジーラレタノ　ヨーサー　（ウレシーサーヨ）　ウ
レシサヨー　神モロトーモニ　ヤーア　ゴザトーマイラス。
○伊豆社ージーノ　カケヤウダーム（？）ール　ヨーサー　（ユダスーキーヲ）
ユダスキヲー　カケマガモーリノ　ヤーア　千代ヲーコソスレ。
○ガランーコート　ショウジーラレタノ　ヨーサー　（ウレシーサー
ヨ）　ウレシサヨー　神モロトーモニ　ヤーア　ゴザトーマイラス。
○カミ（？）ガーミーノ　コシメストーキノ　ヨーサー　（見ルカーゲーハ）
見ルカゲハー　麓モ見ーエテ　ヤーア　霞ートドマル。
（太鼓を三度強く打った後、調子早くなり、鈴も太鼓もはげしくな
る）
○チハヤーブール　神ノーヤシロニ　ヨーサー　（ソヨギーイーテ）
ソヨギイテー　ニシカニオーガム　ヤーア　スイシャークノウチ。
○チハヤーブール　神ノーミコトノ　ヨーサー　（昔ーヨーリ）　昔
ヨリー　変ワラヌミーヨハ　ヤーア　カムガーキノウチ。
○イズシャ（ミヤ？）マーワリニ　タレヲヤショウジル　ヨーサー　（信濃ーナ
ール）　信濃ナルー　ナンゴノモーリノ　ヤーア　モリノー　ワカギ
ヲ。
○宮マワリーニ　タレヲヤショウジル　ヨーサー　（尾張ーナール）
尾張ナルー　熱田ノモーリノ　ヤーア　ネギヲーショウジル。
○ツチノートーヲ　アラメニアーケテ　ヨーサー　（拝ムーレーバ）
拝ムレバー　氏子ハハアンジョ　ヤーア　神ハー栄ユル。
（最後に太鼓を一つポンと打ち、鈴を振って終わる）

〈翁〉

○（収録不能）
○……ニー　種オーローシ　ターネーオーローシ　播イタールターネ
ーハ　福マアンゴオク。

（以上、拝殿階段下で。終わって階段をあがって縁で）

○カカールー久ーシーキー　御トォー社ー　御テーイ登ーリーテ　御宝ーゼーンニ　仁王ーダーチーニ　ツイターッテ　四ー季ノー祈ー禱ーヲーヲ勤ムール。ソーノーオキーナーヲーバ　イーカナールヒートートーオー　チテチュール。ササーギーノ　サイーナーリ　豆ノーモトーナーリ　アヅーキーノ　シャクージョーウ　アーワーノ蔵ーミーツートーカーヤー　申ーォサーン　コーレーモオキーナーガ　コトーニーテソーオーロ。（はやし）ナーヤシーキーショーノーォーオ　ショウオカー。

○コーレ天ジークーニーテーモ　シャムラーガーワーノ　シャマーンーガ木ノ切レハシーヲーモーッテ　新ー座八十ーマーイ　ホーンー座八十ーマーイ　合ワーセーテ百六十ーマーイーノ　面ノーウッタ　チーターテーマーツールー　ヒーダーハタクーミーノ　ターユーガダイークーヲ　メーサーレーソーウロー。コーレ今ジョー　六ジョーウノビンノーモーッテ面ノーウオーヲモーッテ　サイシーキタテマーツールー　コーレー天ジークーニ　六十ーマーイ　オサメーオオーク　ニホーンーへ百ーマーイ　アマークーダーシ　フージーノ宝ゾウーへ　四十ーマーイ　納ーメー置ーキ　残ルー六十ーマーイーノ　面ノーヲコノーオキーナーガ　コームーッテ　ニホーン神ーガーミ　ヤーシーロヤシーロー　ツイージーガー門ーマーデーモ　納ーメー置ケートーノ　コノオキーナーガ　仰セーヲーコウムール。（はやし）ナーヤシーキー　ショーニンノーオートーカー。

○ツイーデーニ　オキーナーガ　ツカーサーヲカイヨートーテ　ミーネーニ鶴ーマーツ　沢ーニー大ーフーク　ヒーダーリーゴンダーユウリョーウーノ　オキーナーガ　ツカーサーヲカイサーセ　タマエートーテ　峰ナールーサールーハ　花ヲーオオーッテ　トオールー谷ーナール　トーラーノ尾ヲターターキーヨーローコーブ　キツーネーハ虎ーノー威ヲカルートーカーヤー申サーン。（はやし）ナーヤシーキーショウジンノーオ　トノウーカー。

○タイーコークーヨ　タイーコークーヨ　オーオターイーコークーヨコーノムーカーシー　エンメーチョージャーノ　ゴホージェーンナクワーシーク　アラーワーシ　タテーマーツール　大モーンナーナーツ　テーラーナーナーツ　ソーオージーテ　ツイジーナーノ　カーズーヲ　カチーメーヲ　ショーデ　カゾーエーレーバ　ハッピャーク四十ーミモーンーガ　ミカーイーノミモンートーテ　ソガナーカ南ーノミモンーガ　オイワイノーミモンートーテ　コレーオーキーナ　メサセターリー　ミーギーノーミ手ーニーハ　若ーマーツーノ枝ヲー持ーッテ　右ーノーオン手ーニーハ　シラーカーネーノシャクーヲー持ーッテ　ナニゴートーモ　オキーナーシンミョーウナーレ　シンミョーウナーレート　ナナタービーコーサーセーターマーヘートーテ　ソノートーキオキーナガ　タンーテーキーニーテ　ヒッカーツーギータールー　キノーメンノーヲーヲ持ーッテ　タルーキーノーカイヲータモターンートーヤー　コレモーオナージク　シャカモーリホトーケ　ヤガラートゲンジータモーウ。（はやし）ナーヤシーキーショーニンノ

ーォ　トノーウバー。

○オキーナー　久ーシーキーコートーヲ　タヅーヌールニーハ　オーオミーノミズーウーミ　七ータービクワーバーラ　ミズーウーミートナーッタールーモ　コノーオキーナーコーソ　見テーマイリテソーロー。（はやし）ナーヤシーキーショージンノーオ　トノーウカーナー。

○ナーオーモ　久ーシーキコトーヲ　タヅーヌールニーハ　セイオーガモーモーヤ　ソガーモーモーニ　三ゼーンネーンガ　ソノーウーチーニ花　一度ー咲イテー実ノーナーッターソノコトーモ　コノーオキーナー見テーマイーリーテーソーロー。（はやし）ナーヤシーキーショーニンノー　トノーバー。

○アターゴーノー　山ーノー　大ー天ー狗ー　比エーイ天ダーイーサーンニ登ーリーテ　一ー夜ーニ　一ー度ーノ　入ー道ーヲ　メーサーレートーテ　キョウークジューウノ　スーズーメーガ　六ー波ー羅ーヤ　カーヤーガチョーウニー巣ヲーカーケ　メーサーレートーテ　ナニーゴートーモ　草ーノーチーモースーチーヲ　ナスートーカーヤ　九ー千ー歳ーレー　九千ー歳ーレー（九千歳レ）ナーレード　サイズーリーターモーウ。（はやし）ナーヤシーキーショージンノーートノーウバー。

○アイカーワーヤ　水ーホークーホークート　イワォーモーノーノ　サンーハーナンーモーノ　ソーゼーニウスーイーシーニ　ハネーヲオキ　アーナータコナータナナダーイ　セーカーイ　ツヅーミート　ヒシャーシートホーヨーリーモ　トーウホーウマーデーモ　シンシューマーン　ターカラモノニカキアワセーカキアワセー　デキツーヨーハヤーシテータモーレー　オキーナードーォノー　オキーナードーノーヤ　アレーヤーナンーゾー　ソヨーヤーイーヅコーノーォ　イーサードーォーノー。

（以下、調子変わって謡うごとし）

○テーン竺ーノー　ターカラモノニートリテーハー　火ーヲ取ールーターマートー　水ー取ールーターマートー　トーオートートッコーニー（?レイ）ハーナザシーハーナー皿ー　ミーソキョーノ（?）ヘットーキョー。（はやし）カーヨーオーナタアカラモーノー　ヒートツーモモーラーサーズ　カーゾエーテマイランショーノー　オキーナードーオーノー。

○トーオドーノ　ターッカラモノニートリテーハー　シーシガンヤーヒーヅメニー　シャーッコガイーニャヘーソトヤー　コーツブノーアジャラーシ　カーヨーオーナタッカラモーノ　ヒートツーモモーラーサー（で）カーゾエーテマイランショーノーォーオキーナードーノー。

○リューゴーンノ　ターッカラモノニートリテーハー　ナーミーノウーエイモー　クークーツーツーシーツツツー　ヒトーテウッテバセンリートブトー　カイガラチョーヘツイターッテー　カーヨオーナタッカラモーノ　ヒートツーモモーラサーズ　カーゾーエーテマイランショーノーォ　オキーナードーォーノー。

○シーマグーニノ　ターツカラモノニートリテーハー　エーンメーエ

ーコーブークローニー　ウーチデーノコーヅーチー　カーックーレ蓑ニー隠レー笠ー　シーサンジョーニツイターッテー　カーヨォーナターッカラモーノ　ヒートツーモモーラーサーズ　カーゾエーテマイランショーノーオ　オキーナードーオーノー。

○ニョーボーォターチーノ　タッカラモノニートリテーハー　八ーッ尺ーノカーケ帯ー　五ーシャークノーカーモージー　カーラーノカーガーミーニー　フンケラコーノーカーラームシー

トーノサーマノターッカーラモノニートリテーハー　ウーマヨーリクーラーヨー　クーラヨーリーアーブーミー　ターチヨーリーカッターナー　ユーミーヨーリーヤーノーウチー

ニーセンージホーットケノー　ターッカラモノニートリテーハー

レーイートートッコートー　ハーナダチーニーハーナーザラー　ニーシキーノミートーチョー　ハーチマーンノヒーザーマルー　ビーラートーノーナーギーナター　ゴーンダユーガウッタールー　ミーターチーノーウーチーノリー　モーノビョーモヨーッカイナー　カーッターカイナーモーノーガター　ムーサシーノアーブーミャー　ドーホートーニークージンガイ　ヨーロイーヤハーラマキー。

○コーレヨーリミーナーミー　ツークーシーヤーハーカーター　チョーゥフーヘフーネヤルー　コーカイチョーハーカンドーリトー　ウーマーヂヨーリクールマヂー　ウーマーヂモーツーケタリー　クールマヂーモツーケ[タ]リー　フーネーニーモー積ンダーリー　ヤーマケーホケーキョーニー　ホーカーケーテーホッカケテー　クーマノーノ権現ニー　カージョートーテーマイランショー　ゴーングーガセッキノバ[ヲ]ユーラーユラーッターオーシターテー　セーンザーイヤセンザーイー[ヤー]コーォーホドニーコーホードー　ニーセンジーボットーケノー　イーヌーイーノーカードーニー　セーン年ヘーッタルクースノキー　万年ヘータルマーツノ木ー　トモヅナトーォッテナーゲアゲー　ヘーヅナトーッテーナーゲアゲー　キリリットー[リテーヤ]オツーナイデー　ヨーイ日ーノキーチニチー　カーキョートッテーマイラーンショー　ミークラーノトーアーゲー　クーチーカーラー奥ーヘー　オークーカーラクーチーヘー　シンドーリチョイトーツンダーリ　アーマルートコーロハーキンテーサーマヘマイランショー　ノーアマールトーッコロハー　トーノーサーマヘマイランショー　ノーアマールトーッコロハー　地ー主サーマヘマイランショー　ノーアマールトーッコロハー　ミンミーモローター　オンー百姓ーヘマイランショー　ノーアマールトッコロハー　オキーナーオトクーブーンニハ　コレーヲートラーセール[ス]エンオーキーナ　コノマールモドーリーフーネーニーハ　ナニーナーニーヲー積ンダーリ　ケーカーチーヤ花ーボーシ　ライビョーヤレキーレーイ　ニガーミーヅーヤニガーカーゼ　モンースガセキーヲーバユーラーユーラトオシターッテ　セーンザーイヤセンザーイ　コーオードーニーコーオホドー　ナーン海ーヤ普ー陀落　ソートガ浜ーヘ漕ギ出[シ]イテー　ヒーダリーチョーヤピリリッチョートカンマイテー　カンブリチョートケリコンデー　オキーナーコノーマール　モドールーウシーロースーガーターハ　ターレーヤニクーカトラーン。

（以下、唱える調子に変わる）

○エン、ムカーシー世ーノー猿ガークーハ　シランビョーデトドマル。中ーヨーノ猿楽ハー　（木か板を打つ音。足踏みか）　ラビョーシデトドマル。今ノ世ノ猿楽ハ　万歳楽デトドマル。万歳楽〳〵、千代御万歳楽、イザワガ国ノ祝イ申ーサン。

（「いやあやあ、どうもんな御苦労様、どうも」「おーい、ダイを頼むよーォ」「どうも〳〵、御苦労様〳〵。さあ、砂糖水飲んで帰って……」の声。笛・太鼓）

〈松影〉

（謡う調子で）

○マーツカーゲーニー　カーンザーレーテー　サーアムヤカーシケーノー　シノーブーカーナー。

○ヤーシローヲーオーガマーバーア　イマーヤーシーロー。

○ジューウニーノーハーシラーガーア　伊豆ーノーミーハーシーラー。

（以下、読む調子で）

○カカールー久ーシーキ御当ー社ー御殿ーヘノボーリーテ　鳥居ザーシーニツイターッテ　四季ー（キー）ノ祈禱ーウォヲ　ツトームールーハ　コノーマーツーカーゲーヲーバ　イーカナールヒートート　オボーシーメース　天ジークニーテ　シャームーラーガーワーノ　キーノーキリーハーシーヲモーッテ　新ー座八十ーマーイ　本ー座八十ーマーイ　合ワセーテ百六十マーイーノ　面ノーウチターテマーツールソノー時ヒーダーガタユーウガ　ダイークーヲメサーレソーォローコーレー今ジョーオ　ザュージョーヲ　ニンノーモーッテ　メンノォーヲ　サイシーキタテーマーツール　天ジークニー六十ーマーイ納メー置ーキ　ニーホンーニ百マーイ　アマークーダーシフージーノ　ホーゾーウヘ四十ーマーイ　納ーメーオーキノーコール　六十ーマーイーノ　面ノーウハ　コノーマーツーカーゲーガ　オーセーヲ　コームーッテ　ニーホーン神ー神　ヤーシーロヤシーロート　ツイジイーガー門ーマーデーモ　イチーマーイヅーツーモ　オーサーメオケートノ……（テープ交換のため相当数句収録不能）。

○……マーッ社ーノ　カーミ伊勢ーノ　クーニー　高ーマーガ原ーニカーミーアツーマーリ　アツーマーリタモーォ。

○ソ（ろ）ージーハ　六セーンーゲーン　チョーターガ八セーンゲーン　天ーノ岩ー戸ーガ　ニーッ光ゲーッ光　浅ー間ーガーダーケーノオンカーミ　フターミー住ーヨーシー大明ー神。（ハナ。謡う調子で）マーツカーゲーニー　カーンザーラーレーテ　シャーアムーヤーカージケーノーーォ　オ?ジーバーナ。

○ソォジーテ　カーミーノゴホージーンナ　詳ーシーク尋ーネーターテーマーツールーニ　出ー雲ーノ国ーオーヤーシーロ　エンーノ木七ホーンノ　ソノーモートーデ　カーミーノーミー誕生ニーテソーロカーミーノ父ーヲーバ　ジーッソークォージーンーノオンカーミ　ターローヲバアカターノミョーオー神　カーミーノ母ヲーバ　田中ーノ

ミョージーン　カーミーノシローウハ　バーバーノシラハーノ大ミョーオージーン　サーンーワー大ミョージーン　奈ー良ーガカスーガーノ大ミョーオージーン　ヤワターノオンカーミ　奈ー良ガ七社ーノ大ミョージーン　熊ー野ーノ九十ー九ー社　那ー智ーノオンヤーマーガ　ヒーヤーリ権太ーユーウ　ターキーモート蔵王ーオンカーミ　大ミーネサンジョーォ　大ミョージーン　横ーヤーマヒーチ　イイチー大明ー神　キリーメーノ　オンカーミ　熊ー野ノオンカーミ　ゴホージーンナ詳シーク　現ワーシーターテーマーツールニ　本地ーハシュンレーノオンカーミ　ヒールーハーババノーコートーリートーゲーンージ　ヨールーハ一丈九シャークーノ　クーマートーゲンージ　ソノーナーカーゴーローハ　キンーショーガラントー現ージ　オートーハキーノークーニ　ムーローノゴォーリオトナーシーガーワーヤ　キョウーフールガキョーウォーフーウニ　ガォーヲカサーレ　ソーローウトーテ　アートーヲタレーターモーォ　キョーチュウーニ　ハヨラーセータモーウハ　北ー野ーニオンカーミ　クーラーマーガダーケーニ　ヤワター八マーンガオンカーミ　イーマークーナ三十ー六カークーノ　オンカーミ。

○国ーザーカーイーニ　オンターチーターモーォハ　伊ー豆ーノオンカーミ　クーマー野ーヤシーローォ　ジツバーチーゾォーガランノオンカーミ　ミーサーカーニ　オンカーミ　牧ハーラーニ　オンカーミ市ー場ーニオンカーミ　イチベーオンカーミ　池ノー大ミョージーンワーカーミーヤサンジョーオンカーミ　オーノー　ニーサー　ルーター　猿田ーヒーコー大ミョージーン　ターキーニー蔵王ーオンカーミー。（ハナ）マーツカーゲーニー　カーンザーラーレーーテ　ザーアクーヤーカーゼケーノーーォ　カーナー　エン。

（読む調子で）

○昔世ノー猿ラクハー　シランビョーデトドマル。中ノー世ノ猿ラクハー　ラビョーシデトドマル。今世ノ猿ラクハ　万歳楽デトドマル。万歳楽〳〵、千代万歳楽、イザヨワガ国マデオ祝イ申ーサン。

（「御苦労さん」の声。笛・太鼓）

〈ショウジッキリ〉

（笛・太鼓にはやされてフリある。「よーし、いいぞー」「よーし、もひとーつ」の声が掛かる。楽がやんで「は、もどれ」「なあ、おかし、のるよりは、ちょーっと、しなやかに　やってくださいよー」「あっ、とーっろり、うわッ、うわッ、もー一回、さんたー、なあ、よいあさばんと、三度のってもだいねェーと、ほっでまーッてよォー」「なーにものだー」「なにものじゃーねーよォー、ショウジッキリだよォー……」の声が掛かる）

○……ノコハー……翁ニテソーロー　昔ノ翁ニハ　今ノ翁ト　ドコヤ劣ルベシ　姿ヲ見レバ春ノ花　形ヲユエバ秋ノ月　ホウ〳〵……ノベタルゴトシ……メデタイコトヲ申ーソーカ　オカシイコトヲ申ーソーカ　オモシロイコトヲ申ーソーカ。

○……ノアーサーハ　オ供エ供エテ　デキタリヤ〳〵。

三日ービーノーアーサーハ　餅ヲアブッテ　デキタリヤ〳〵。
ナーノーカーノーアーサーハ　七草ナヅナ　オカイヲ煮テ　デキタリヤ〳〵。
十ー一ンチーノアーサーハ　オ供エ開イテ　デキタリヤ〳〵。
十ー五ンチーノアーサーハ　オカイヲ炊イテ　デキタリヤ〳〵。
ニーガーツーハーツーバーメ　カーネーツケーテーデキタリヤ。
三ガーツハークーサノハーナ　餅　イヤゴーテニツイ　デキタリヤ〳〵。
四ーガーツーノーハーナウネ　ハーナクネギーデーサーカエルー。
五ーガーツーノーセキショーブ　帯ニ巻イテー　デキタリヤ〳〵。
（「あれ、菖蒲はきりくらかなあ」「おお、あれいくらか」「キクラ、あれは」「おらもしらんがー、昔からそーできんづらー」の問答あり）
……コムガンニナー……ツイテー　デキタリヤ〳〵。
シーチーガーツーターナバター　一年ニ一度　ヨモノスノ　ショーヲ　カリギニシテ　デキタリヤ〳〵。
（「おらあそんなことせんがー、かりのせにゃーづらかなあ」「そりゃーないべー」の問答あり）
ハーチーガーツーカーリガネー　ヤハタ山ニ登リテ　去年ノハネヲヌイヤエテ　今年ノハネヲソロエテカネツケテ　デキタリヤ〳〵。
九ーガーツーノーキークノハーナノ　ヘージーニースエテー　デキタリヤ〳〵。
十ーガーツーノーアーラーレ　シラゲノヨネニタトエテ　デキタリヤ〳〵。
十ー一月ーハー湯ーダーテー　イヤゴテニサーカウルー。
十ー二月ーノハテーノーウエニー　ケイセイセンヲーホシャゲニテ（カシヨーゲニ）デキタリヤ。
ハールーシーバーコーシーバー　カヤノウエモー（モト）　ユスルカー　カシャゲノムスメ　徳ガツイテェユースルカ　福ガツイテェユースルカ　ユースルカト。
（「へ、ゆらゆらと、ゆづらにゃ、からだじつ　ゆづらにゃだめじゃないか」とまぜっ返す）
○翁　ハーット思イ出シ　シュウトイリヲセヌ　ムカイナルオトナ衆　牛馬（うしうま）百疋バカリ　十疋バカリモ　カリヤベテ　ナニヤラ宝物ヲ中ニシテ　スドウニモドウニモ　マカリトオリ。
○アツキホリカワノアタリヲ見テヤレバ　アガラバ十ー七八　サガラバ十五六ノメショウガ　白キヒシャクニテ　白キモモヲ出シ　ナア水ヲ汲ム　ソノ時翁コーコロガヘラヘラヘラヘラト。
（「はっはっはっはあ」、一同はやす。「翁もいよいよ色気が出たな」の声が掛かる）
都ノメショウニコトナレバ（小歌ヲカケル）　アナタコナタヲ　ツツムトヤッタラバ
十二重ネノ　メショウガコトナレバ（都）　ソノ歌ヲ返シ歌ヲスル　ムカイナルオトナ衆（且那）ハ　牛馬（ぎゅうば）ノ尻ヲ　シットタタイテ　クチヲスギルカナト言ワレテ　ソノ時翁フージノ山ホド腹ガ立チ
（「ここがいいんだ、おとっさま腹へったのか元気ねーこと言っと

るじゃねーか、おい」の声が掛かる）

ナニカ百疋バカリ十疋バカリ　牛馬ノ尻ヲ　シュットトヤッタラ牛馬ガ　アッチヘドチドチ　コッチヘドチドチ

（「やったー」の声、笑い声があがる）

翁ーサシテマカリ見テヤレバー　ノノイモマーン十本バカリ

（笑い）

百本バカリモアリ　コレモシュートノカホウカ　翁ガカホウカ　オチツキノスイカンマンマン

（笑い）

コンプロリン　コンブロリントー　ヒッコヌイテー　牛馬ノ中ニニシテー　マカリトオル。

○ホリカワアタリヲ翁サシテ見テヤレバ　イクモスナマニ　兎ガ昼寝ヲシテイル　ジンドーノ弓ニ　ジンドーノ矢シンミョウノ弦ヲクイシメテー　ヒョーットトヤッタレバー　兎ノドテッパラ射カイテ　牛馬ノ中ニシテー　シドウドウト　オイトリオイテ　コレモ翁ガカホウカシュウトノカホウカ　オチツキノスイカンマンガンニモスベシ。

○ナニガサテ　森ノ所ヲ通リカカリタレバ　笛ノ音モスル　楽ノ音モ聞コエル　翁サシテ見テヤレバ　笛ノ音モナシ　楽ノ音モナシ　コレモ翁ガ威勢ニ驚イテ　ミナ隠レタトオボエル　コレモ翁ガ　晴ノ場ト錦ノスイカンヨリ　青葉ノ笛ヲ取リ出シテ　七ツノ……ヲクイシメテシッカリシッカリシッカリコノ　ハハーナハハーナト　ヤッタレバーナニカー御簾ノ陰ヨリ　アガラバ十ヒチ八　サガラバ十五六ノメショウガ　十二単衣ヲ着飾ッテ　銚子盃手ニ持チ　笛吹殿ーモ　カヨーゼコッチヘ寄レヤコノゴーゼ　一坏マイレゴーゼ　十二ガ翁タベツケタルロナレバ　ヒタタカヒッツク

（「そんなもん、初めて買うたってできる」の声に、笑い）

一日クラッテモ　イヤゴウゼ　二日ークラッテモ　イヤゴウゼ　三日ークラッテモ　イヤゴウゼ　テテカタニツイテモ　イヤモーテ　母カタニツイテモ　イヤモーテ　クイツイテーモーヤーゴーゼ　ハヤシテタモレヤ翁殿。

（「やいダイ、ダイダーイ」の声、「そんなことゴダっツらしねーにじょうずにできるかねえ」の声に、笑い。「御苦労様〳〵」の声。「いや〳〵、おとっさま、来年もその調子で頼むぜ」の声。笛・太鼓）

3　飯田市川路での見聞

○ナリキゼメ（老婆と少女とで）

成りそうろうか　伐りそうろうか

成らんとお粥を進ぜぬぞ

成ります〳〵

それならお粥を進ぜよう

○家裏の稲荷社の軒下に「かに柊」と書いた紙が二枚貼ってある。

文献一覧

ここには主として現地採訪時に収集したもので、採訪テーマにそうものを県別に列記した。

『秋田の民謡・芸能・文芸』―秋田魁新報社、昭45―5・1刊
『秋田県の昔話・伝説』第二集（部分コピー）―昭48年度
秋田県民俗学研究会編『秋田県の祭礼』第一集―昭50―3刊
ぬめひろし他『秋田農村歳時記』―秋田文化出版社（秋田市）、昭51―7・15刊
『秋田の昔話』―秋田県立博物館、昭52刊
鈴木元彦『稲の民俗誌』―秋田書房（二ツ井町）、昭53―1・10刊
ぬめひろし『秋田農民夜話』―秋田文化出版社、昭53―6・10刊
菅江真澄百五十年祭実行委員会編『菅江真澄と秋田』―加賀谷書店（秋田市）、昭53―9・14刊
三浦鉄郎『みちのく秋田の風土とくらし』―三光堂書店（秋田市）、昭53―9・20刊
佐藤久治『秋田の社家と神子』―秋田真宗研究会、昭54―1・1刊
打矢義雄『炉ばたがたり―むらの民俗誌』―秋田文化出版社、昭54―3・1刊
ぬめひろし『雪国抄』（詩集）―秋田文化出版社、昭54―4・10刊
読売新聞秋田支局編『民謡の里―オラが秋田の唄が聞こえる』―無明舎（秋田市）、昭54―9・1刊
ぬめひろし・長山幹丸『秋田のお産と結婚』―著者、昭54―9刊
石垣忠吉ほか著・山田福男ほか企画『蓑虫山人全国周遊絵日記〔秋田編〕』―Dフォト企画（秋田市）、昭54―11・30刊
「秋田魁新報」昭55―一月一日、三日号
藤田秀司『餅』―秋田文化出版社、昭58―5・1刊
市勢要覧『男鹿』―昭53―6刊
『市勢統計要覧』―昭54―3刊
『秋田県史』民俗工芸編（部分コピー）―県、昭37―3・31刊
吉田三郎『男鹿風土誌』―秋田文化出版社、昭39―7・20刊
『八郎潟の研究』（部分コピー）―秋田県教育委員会、昭40―7・22刊
『秋田の昔話と伝説』（部分コピー）―秋田県教育庁社会教育課博物館準備事務局、昭48―3・31刊
三浦浩樹『民話の国　雪の村』―主婦と生活社、昭51―2・15新装版刊
沢木隆子『男鹿物語』―秋田文化出版社、昭51―9・15刊
吉田三郎『男鹿のこぼれだね』―秋田文化出版社、昭52―1・20刊
長谷川秀樹「ヤマハゲ小考」―「秋田民俗」第五号（秋田県民俗学研究会、昭52―11・20刊）
沢木隆子『男鹿だより』―秋田文化出版社、昭53―8・8刊
田口寿明「男鹿のナマハゲ」―『東北民俗資料集』㈦（仙台・萬葉堂書店、昭53―8・10刊）
天野武「男鹿のナマハゲ」―「秋田魁新報」昭54―一月三十一日（夕刊）号
斎藤寿胤「なまはげの起源」―『秋田ふしぎ探訪』（無明舎、昭54―5・1刊）
児玉三郎「ナマハゲ考」―「秋田魁新報」昭54―十二月二十七日（夕刊）号
益子清孝・嶋田忠一「なまはげ習俗と仮面―『東北の仮面』展によせて」―

『秋田県立博物館研究報告』第6号（昭56―3・31刊）
狩野徳蔵『男鹿名勝誌』(上)（部分コピー）
『男鹿市史』（部分コピー）
「ナマハゲ行事調査表」（コピー）
「ヤマハゲ・ナゴメハギ調査表」（コピー）
「ナマハゲについての伝説」（観光ちらし）
八幡源夫『だんぶり長者物語』―だんぶり社（安代町）、昭39―12・15刊
「大日霊貴神社参拝の栞」―同社務所、昭50―12刊
太田和夫ほか「大日堂舞楽調査報告」―『秋田県立博物館研究報告』第4号（昭54―3刊）
『大日堂舞楽』―同編集委員会、昭55―3・1刊
市勢要覧「かづの」―昭52―3・31刊
「鹿角市管内図」
「ふるさと散歩」―鹿角市広報紙「かづの」（全94回分コピー）
『花輪町誌編纂資料』第一号―同調査委員会、昭47―11刊
同、第二号（部分コピー）―昭50―10・30刊
『鹿角市史資料編』第一集―同編さん委員会編、市、昭54―9・30刊
「上津野」第1号（部分コピー）―鹿角市文化財保護協会、昭51―2・1刊
同、第2号（部分コピー）―昭52―2・1刊
同、第3号―昭53・3刊
同、第4号―昭54―2・10刊
同、第5号―昭55―3・10刊
『むらのいぶき―八幡平の民俗』―八幡平地区連合青年会、昭52―1・20刊
『八幡平の民俗　年中行事』―鹿角市立八幡平公民館・八幡平地区老人クラブ、昭54―3刊
高瀬吉五郎『鹿角盆地集落（地名）の話』（部分コピー）―昭36―7・5刊
奈良寿『歴史の中の鹿角』上巻（昭51―10・15刊）、中巻（昭52―10・25刊）
安村二郎「秋田の地名」（部分メモ）―「北鹿新聞」（？）
小野忠太郎『秋田の風物』（部分コピー）―秋田県観光協会、昭27―7・20刊
佐藤徳治郎『ふるさとの民俗』（部分コピー）―昭51―1・30刊
市勢要覧「おおだて」―昭55―1・30刊
「大館市管内図」―昭53―9刊
「火内」4号―大館市史編さん委員会、昭48―3・30刊
同、5号、昭48―12・1刊
同、6号（部分コピー）、昭49―2・1刊
大館市史編さん委員会編『石造紀年物調査報告書』―同資料刊行会、昭49―5刊
岩崎良『比内風土記』―大館孔版社、昭44―7・1刊
同、『続比内風土記』―昭45―2・1刊
同、『比内風土記』第3集―昭47―1・1刊
同、第4集、昭48―7・20刊
同、第5集、昭53―12・1刊
遠藤正雄『大館地方史』（部分コピー）―郷土研究会（大館市）、昭26―12・15刊

『秋田犬と老犬神社由来記』
森吉町史資料編第五集『みんなで綴る郷土誌』―森吉町生涯教育推進本部、昭54―12・20刊
町勢要覧「たかのす」―昭52―3刊
「鷹巣町」(管内図)
「鷹巣地方史研究」第5号―同会、昭54―11刊
町勢要覧「ふたつい」資料編―昭54刊
「二ツ井町全図」―昭51―8刊
『二ツ井町史』―同編さん委員会編、町、昭52―3・31刊
市勢要覧「のしろ」―昭53―10刊
「能代市管内図」
「事業概要」―建設省東北地方建設局能代工事事務所、昭54―7刊
「米代川管内図」―同事務所刊
松橋栄信『米代川の舟運』―よねしろ書房(大館市)、昭52―11・30刊
「県社刈田嶺神社一覧」―同社務所刊
「白鳥神社御縁起」―同社刊
三崎一夫『図説陸前のオシラサマ』―萬葉堂書店(仙台市)、昭46―10・1刊
町勢要覧「ゆざ」―昭53―10刊
「鳥海山案内地図」―秋田県・山形県・鳥海国定公園観光開発協議会、昭49刊
「鳥海山」(観光のしおり)
近江雅和『出羽物語―古き神々の素姓』―国書刊行会、昭52―9・20刊
安彦好重『山形県の地名―その語源をたずねて』―高陽堂書店(山形市)、昭53―11・2刊
丹野正「春をつげる鬼―遊佐のアマハゲ」
戸川安章「日本海の信仰」―「家庭と電気」第二八一号(東北電力株式会社広報室、昭55―1・1刊)
「山形新聞」―昭55―一月一日、三日、七日号
『牧之』―鈴木牧之顕彰会、昭36―5・15刊
新潟県教育委員会編『鈴木牧之資料集』―鈴木牧之顕彰会、昭36―6・15刊
井上慶隆・高橋実『校註北越雪譜』―野島出版(三条市)、昭45―6・5刊
松岡新也『北越雪譜のある風景』―野島出版、昭55―3・15刊
太刀川喜右衛門『やせかまど』―片貝町郷土史研究会、昭50―9・10復刻刊
西脇忠一『忠一夜話』―遺族、昭51―9刊
大平與文次『三島郡浦村温古録』―越路町教育委員会、昭57―3・25復刻刊
渡辺富美雄ほか『新潟県における鳥追い歌』―野島出版、昭49―10・25刊
新潟県地誌研究会編『新潟県の雪』―野島出版、昭51―5・20刊
新潟県小学校図書館協議会編『にいがたの伝説』(部分コピー)―光文書院、昭54―9・10刊
鈴木昭英「長岡瞽女の組織と生態」―『長岡市立科学博物館研究報告』第7号(昭47―3・31刊)

新発田市文化財調査審議会編『阿賀北瞽女と瞽女唄集』―下越瞽女唄研究会、昭50―10・1刊
中俣正義「冬の越後路いまむかし」―「朝日新聞」新潟版、昭53―一月七日～二十一日（10回連載）、二月三日～二十八日（15回連載）
「冬の佐渡路いまむかし」―同、一月二十四日～二月一日（6回連載）
「春の越後路いまむかし」―同、三月一日～三月三十一日（15回連載）、四月二十五日～五月三十一日（18回連載）
「春の佐渡路いまむかし」―同、四月一日～四月二十二日（13回連載）
「夏の越後路いまむかし」―同、六月二日～八月三十日（30回連載）
「秋の越後路いまむかし」―同、九月一日～九月二十六日（14回連載）、十月十八日～十一月二十九日（22回連載）
「秋の佐渡路いまむかし」―同、九月二十七日～十月十七日（11回連載）
「初冬の越後路いまむかし」―同、十二月一日～十二月二十三日（14回連載）
「小正月行事」―「新潟日報」昭53―一月十九日号
「白銀の小正月」―「新潟日報」昭55―一月十六日号
「雪の中の小正月」―「新潟日報」昭56―一月十六日号
「小千谷市全図」
「小千谷新聞」―昭55―一月十三日、二十日号
漆原敬造編『ものがたり　おぢやの伝説』―小千谷青年会議所、昭54―5・27刊
「柳田村全図」―昭41―10刊
『柳田村史』―同編纂委員会編、村役場、昭50―3・28刊
原田正彰『柳田村の集落誌』―村役場、昭52―10・10刊
『奥能登のあえのこと』―同保存記録編さん委員会編、同保存会、昭53―3・31刊
原田正彰「農耕祭儀と信仰」―『石川県珠洲市史』第四巻（資料編）別刷、昭54―2刊
町勢要覧「門前」―昭51刊
「門前町全図」―昭53―10刊
『七浦村志』―七浦小学校同窓会、昭43―5・10復刊
中谷喜太郎『能登門前』―北国出版社（金沢市）、昭48―4・25刊
門前町アマメハギ編集委員会編『門前のアマメハギ』―同町教育委員会、昭56―3・31刊
『白山比咩神社略史』―同社、昭33―10・1刊
『図説白山比咩神社の文化財』―同社、昭55―10・1刊
金沢大学日本海文化研究室『白山比咩神社古書目録』―同社、昭55―10・1刊
『金劍宮由緒あらまし』―同社務所・奉賛会刊
村勢要覧「しらみね」―昭55版
「白峰村全図」昭54―11刊
『白峰村史』（部分コピー）―同編集委員会、上巻昭37、下巻昭34刊
林西寺「参拝のしおり」
西田谷功『牛首紬』
玉井敬泉『白山の歴史と伝説』―著者、昭33―1・1刊
加藤惣吉編『続白山紀行』―村役場、昭46―2・25刊
広瀬誠『立山と白山』―北国出版社、昭46―2・1刊

『白山麓』―石川県立郷土資料館、昭48―3・13刊
『白山山麓のくらし』―石川県立郷土資料館、昭48―6・1刊
百目鬼恭三郎「名所再見―越の白山」―「朝日新聞」昭55―一月十日号
中村浩・三隅治雄編『雪祭り』―東京堂、昭44―3・31刊
「雪まつりのしおり」―同保存会刊
市川健夫『雪国地理誌』―銀河書房（長野市）、昭50―2・10刊

おわりに

この採訪資料（続篇）ができたのは、本文中にお名前を記させていただいたかたがたの他に、次の諸氏にも文献・資料・情報等の御提供をいただいたからである。合わせて御厚情に深謝申しあげる次第である。

村田一明氏（村田町白鳥神社宮司）・坂口信雄氏（遊佐町酒田屋旅館）・高橋義輝氏（越路町神谷）・高野博子氏（小千谷市）・小野塚トキ氏（小千谷市片貝町）・小野塚光則氏（同）・角田淳子氏（宇出津町）・亀井隆甫氏（輪島市）・岡本満葉氏（門前町教育委員会社会教育主事）・門前町役場商工観光課・川島旅館御主人（門前町皆月）

各話者やこれらの人々の御協力をいただいた時以来、実に長い歳月を過ごしてしまったが、この点は心から反省している。また、この続篇の原稿枚数は先の別冊の場合とほぼ同じになり、紀要投稿規定の枚数を大きく越えてしまったが、これを許された学術委員会の御厚遇に御礼申しあげる。

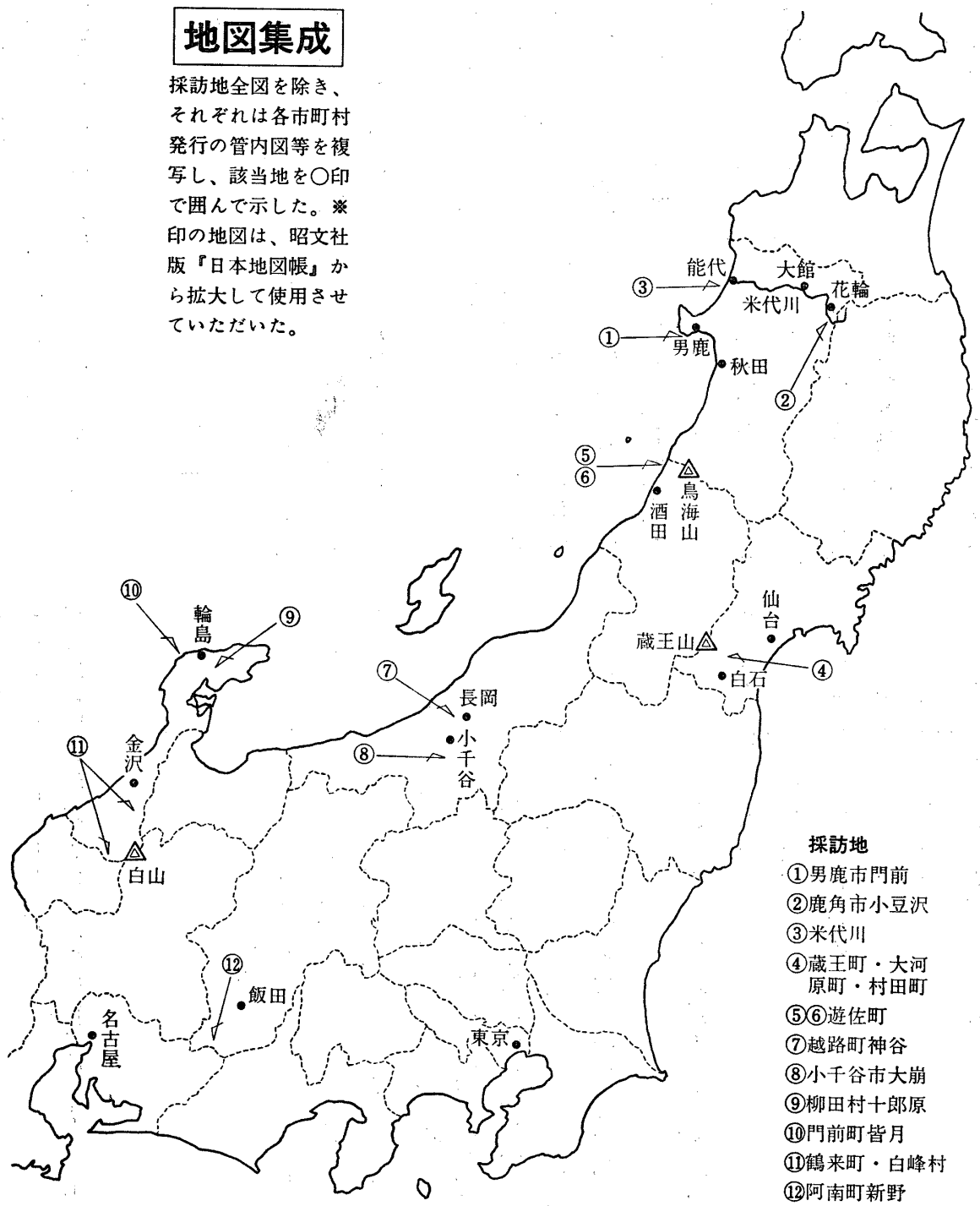
思えば足掛け三年、延べ三十五日間、「雪国の来訪神」を追う旅をしたことになる。録音テープを起こした原稿枚数は一〇三五枚、これを整理したものに採訪帖のメモを加えて清書した原稿が七三六枚になる。採訪地を地図に印してみると、北海道・青森・岩手・福島・富山・福井・岐阜の各地が欠けている。しかし、そこにも企図するところの祭事等はあるのであって、すでに予備的採訪を行なっている所も多い。滋賀県以西の場合も同様である。今はただ、第一次の区切りをここにつけておくまでである。そして、今度迎える雪の季節には、『雪国の来訪神』の本論を間に合わせたいと心がけている。

訂正　別冊第三集に次のような誤植がありましたので、謹しんで改めさせていただきます。

扉　三十一日→二十五日
二〇頁　抜い清める→祓い清める
七〇頁　もとたバ→もとだバ
八五頁　音森市→青森市
九六頁　参ッて終ワル→参ッテ終ワル

地図集成

採訪地全図を除き、それぞれは各市町村発行の管内図等を複写し、該当地を○印で囲んで示した。※印の地図は、昭文社版『日本地図帳』から拡大して使用させていただいた。

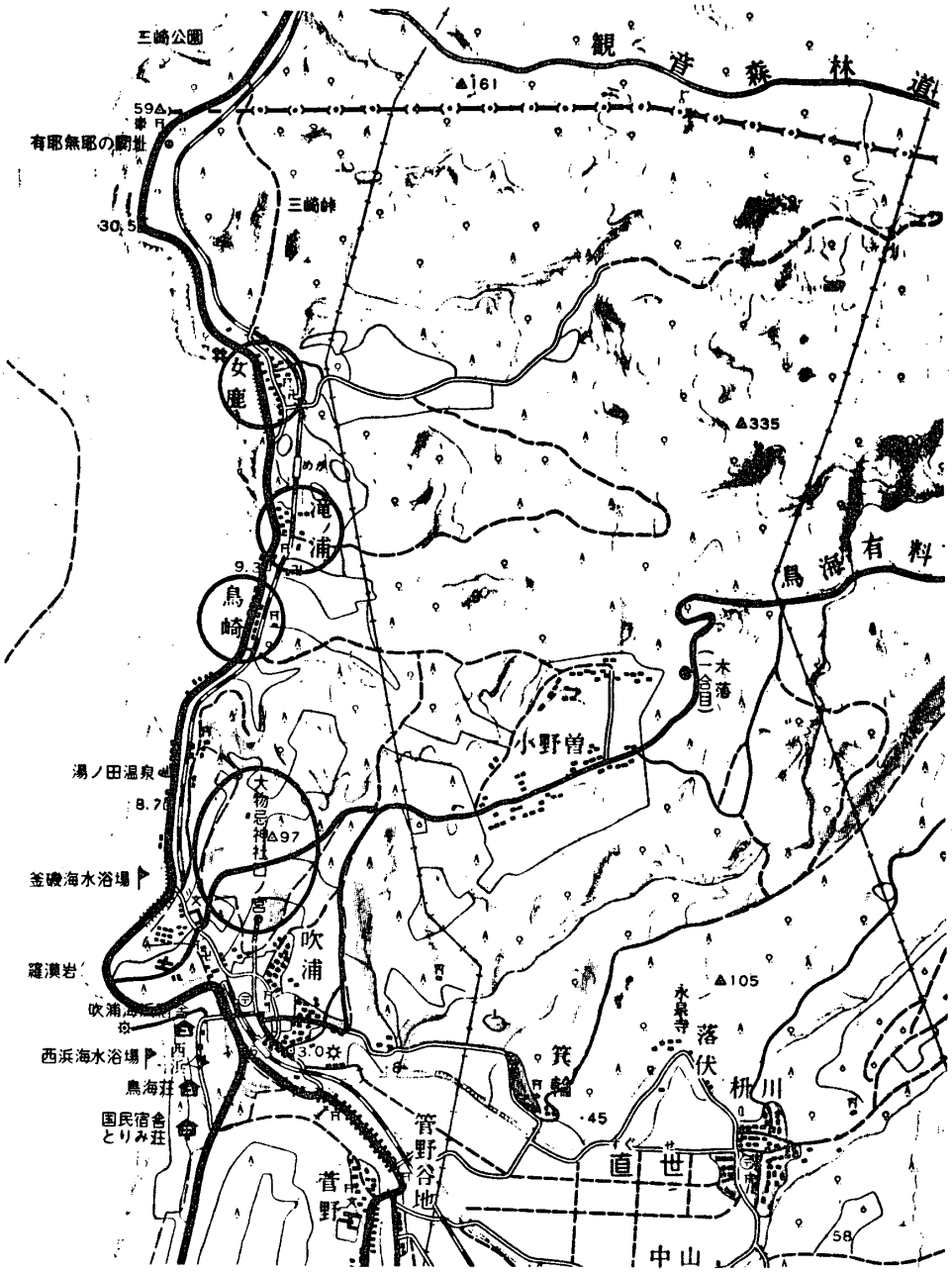


採訪地

①男鹿市門前
②鹿角市小豆沢
③米代川
④蔵王町・大河原町・村田町
⑤⑥遊佐町
⑦越路町神谷
⑧小千谷市大崩
⑨柳田村十郎原
⑩門前町皆月
⑪鶴来町・白峰村
⑫阿南町新野

地図1　採訪地全図

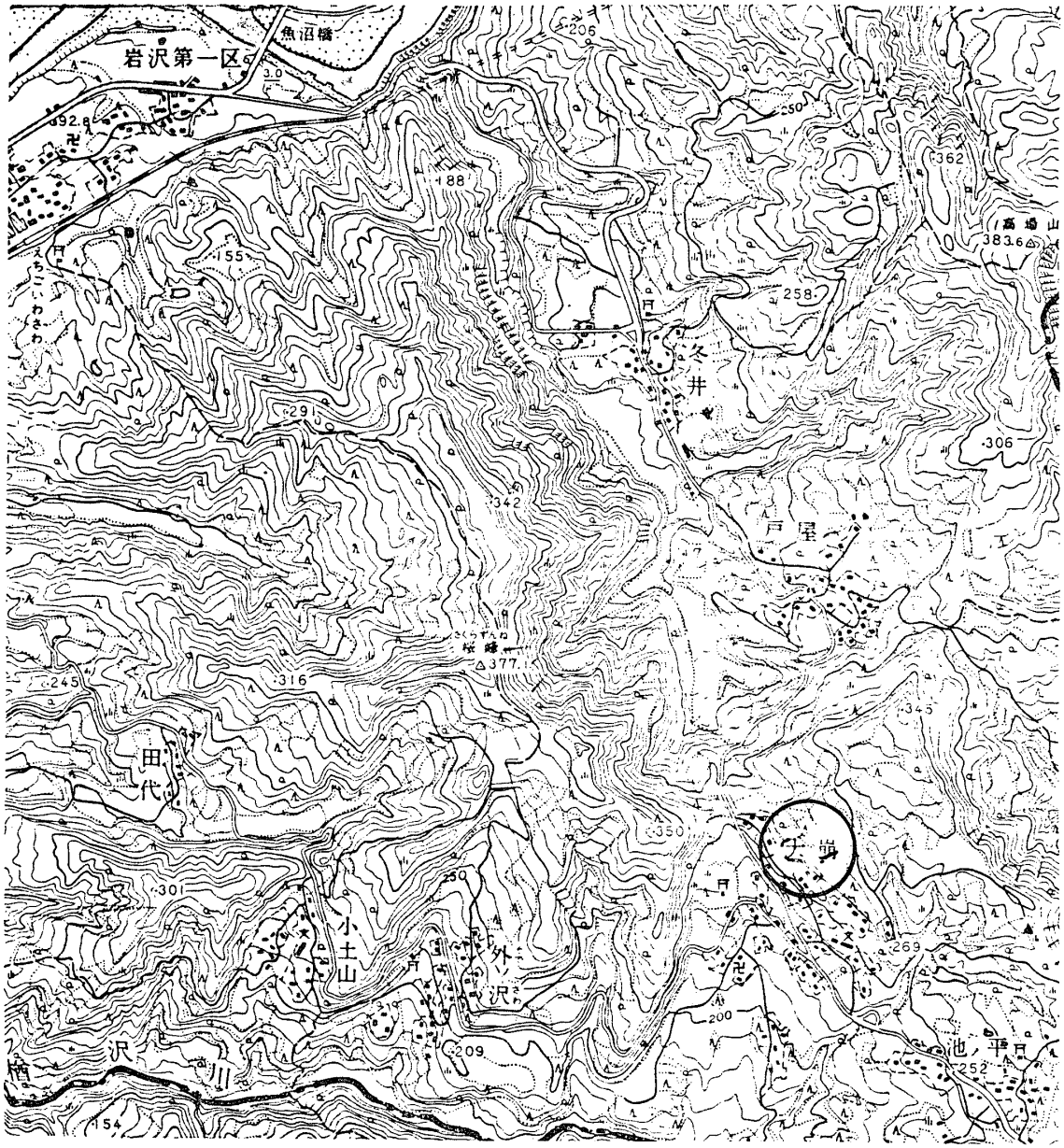
地図2　「蔵王山東麓の白鳥神」関係図＊（→p．50）



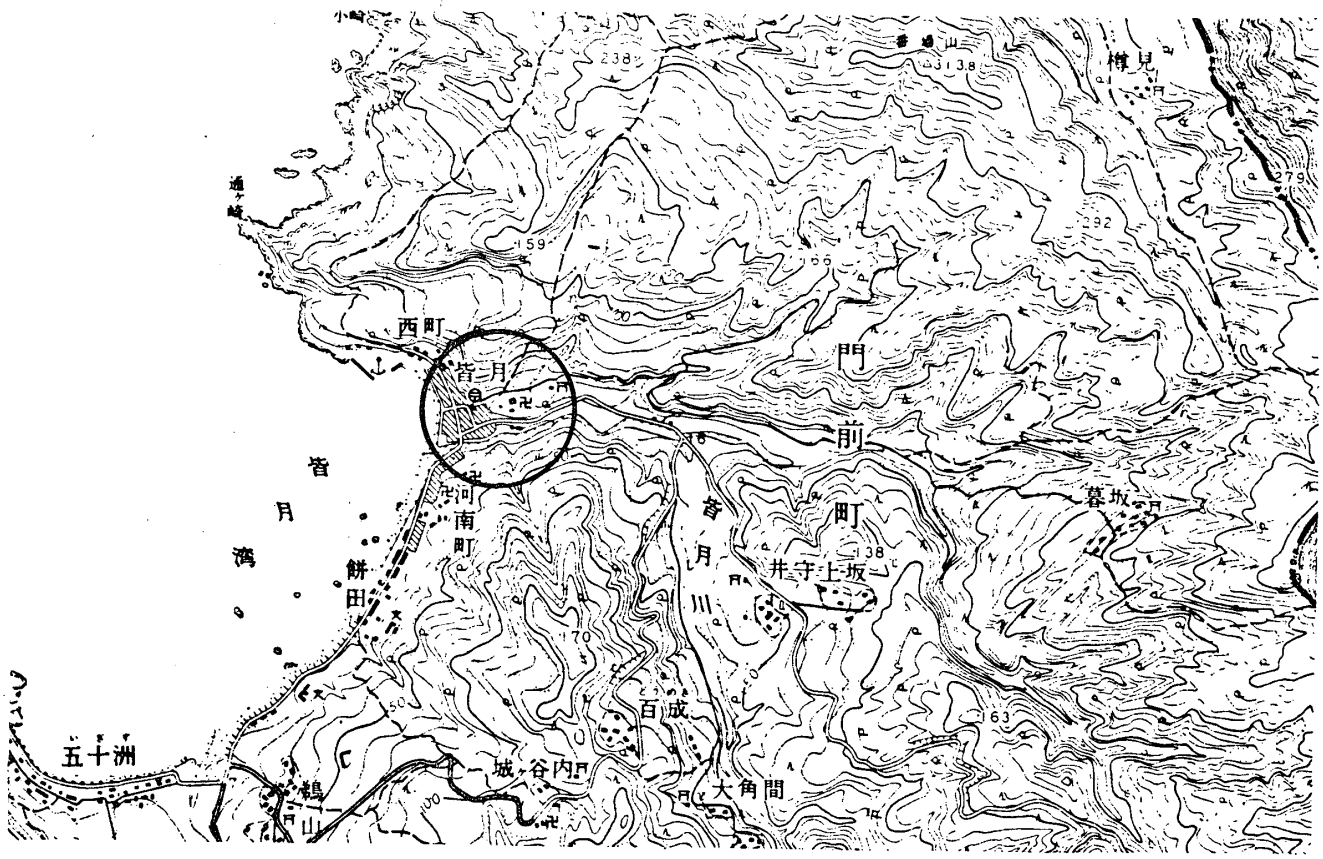
地図3　「大物忌神社の管粥神事」と「山形県遊佐町のアマハゲ」関係図

地図 4　「新潟県越路町神谷の見聞録」関係図（→ p．82）

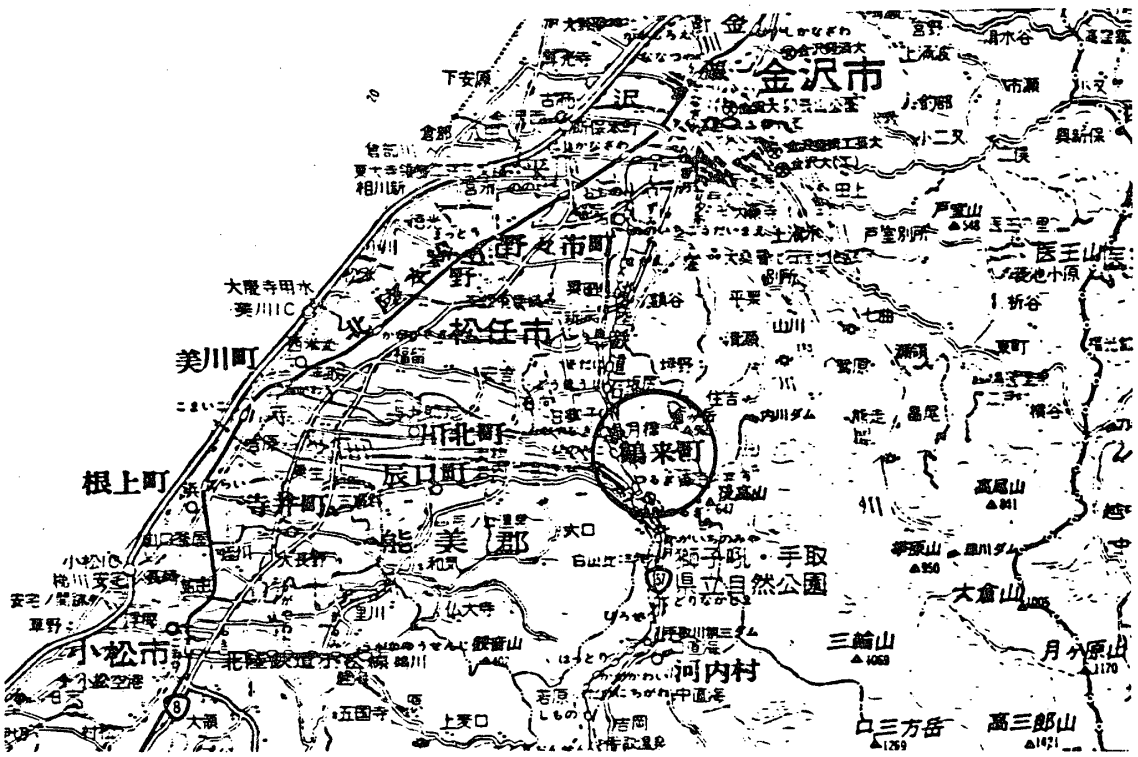
地図 6　「能登一端竜助家のアエノコト」関係図（→ p．112）



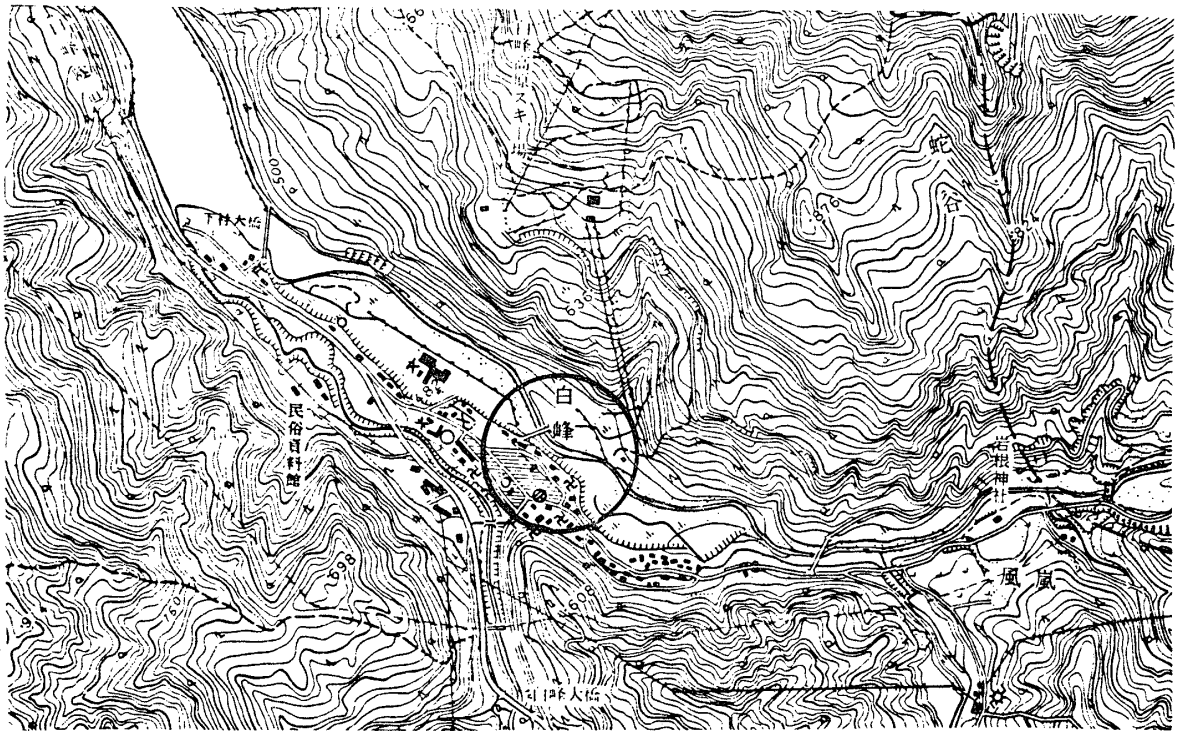
地図 5　「小千谷市大崩の鳥追い」関係図



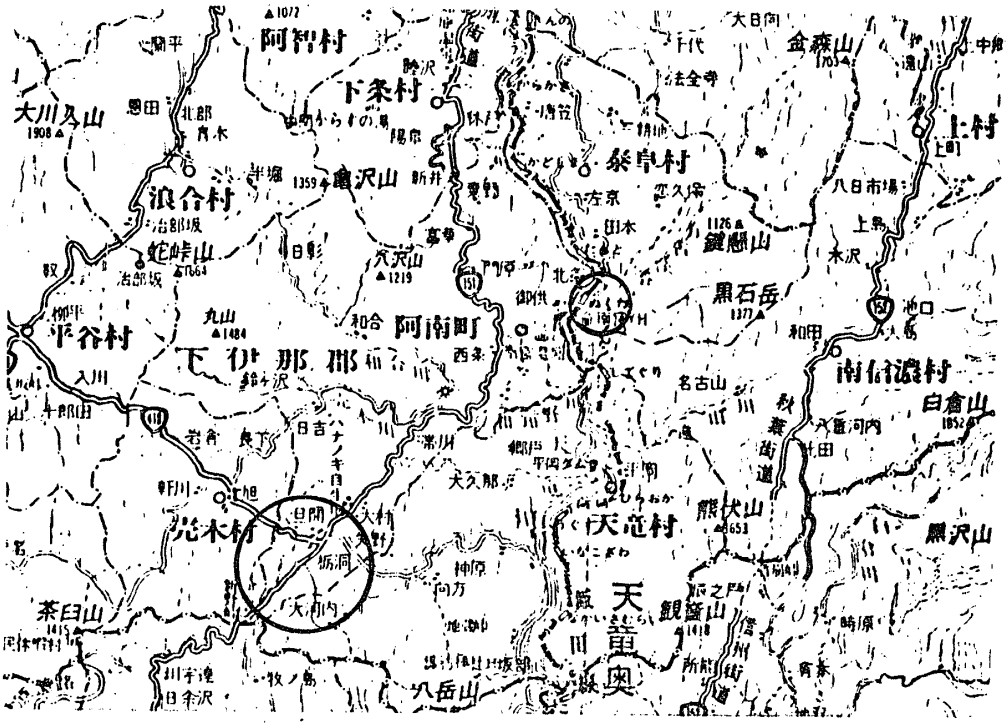
地図 7　「能登―門前町皆月のアマメハギ」関係図



地図 8　「白山麓の見聞録」関係図(1)―鶴来町 *



地図 9　「白山麓の見聞録」関係図(2)―白峰村



地図10　「信州―新野の雪祭り」関係図＊

写真記録

写真1　蔵王山東麓の白鳥神①
—刈田嶺神社（蔵王町宮）の扁額

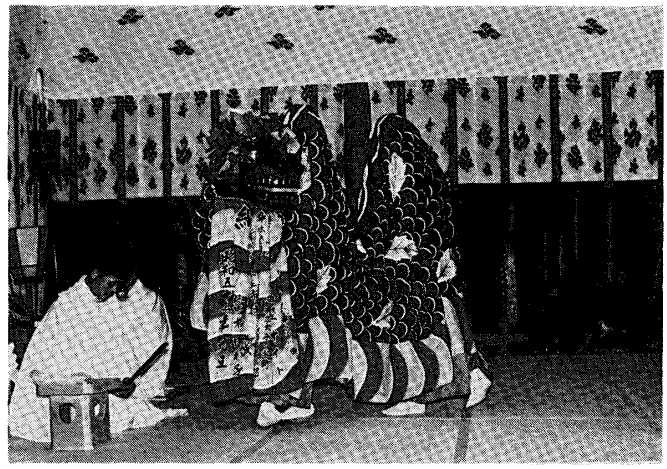


写真3　大物忌神社の管粥神事①
—獅子舞（オカシラマイ）

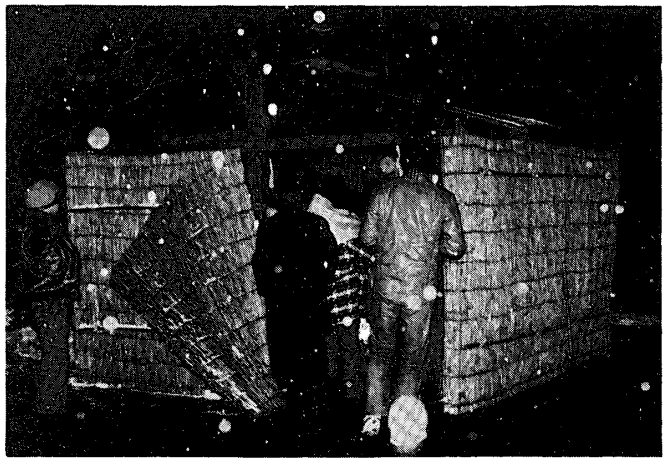


写真5　大物忌神社の管粥神事③
—カガリドウ。拝殿下にあって，人々は餅を焼いたりする。深夜，ここで管粥が煮られる

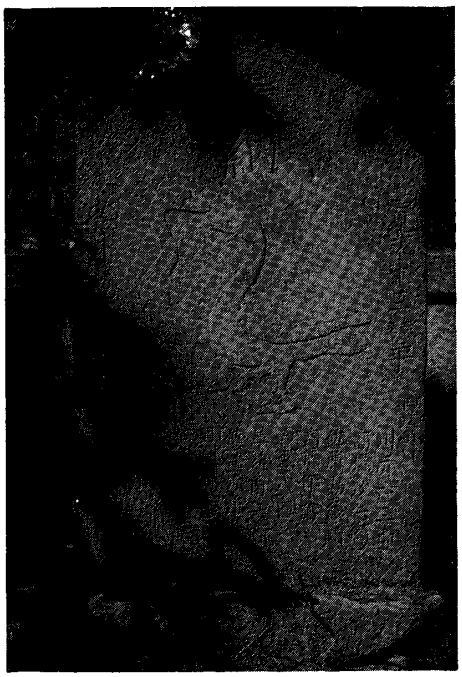


写真2　蔵王山東麓の白鳥神②
—刈田嶺神社（蔵王町宮）裏の白鳥塋域の墓碑

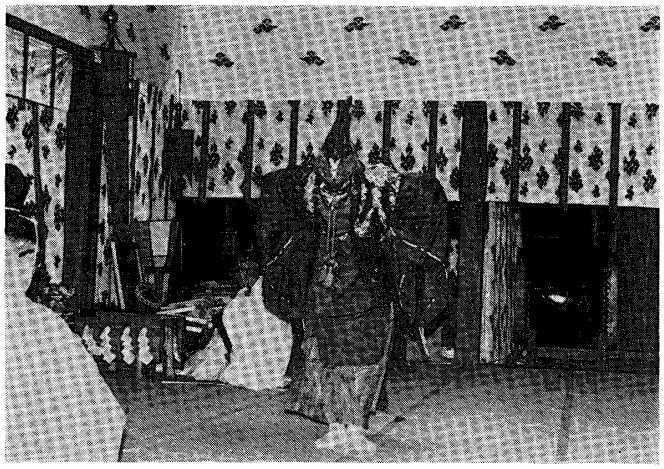


写真4　大物忌神社の管粥神事②
—猿田彦舞

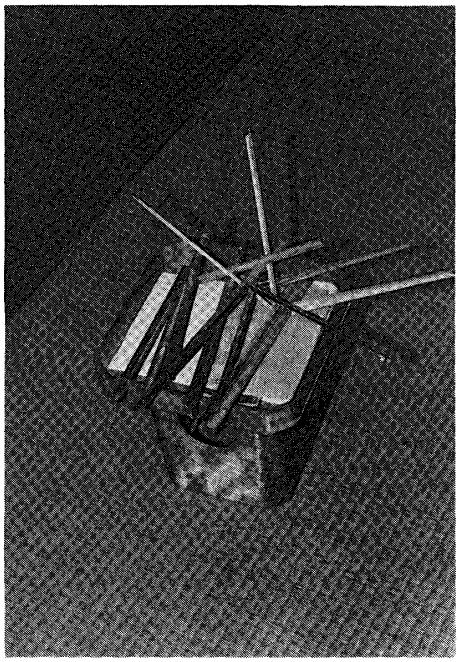


写真6　大物忌神社の管粥神事④
—占い後の葦管

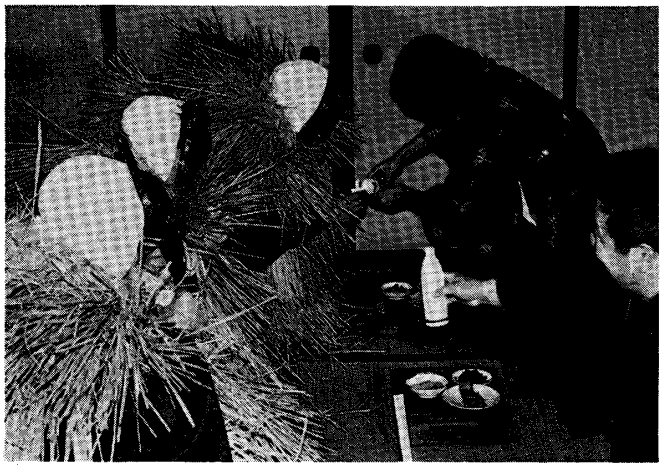


写真8　山形県遊佐町のアマハゲ②
—ごちそうをいただく

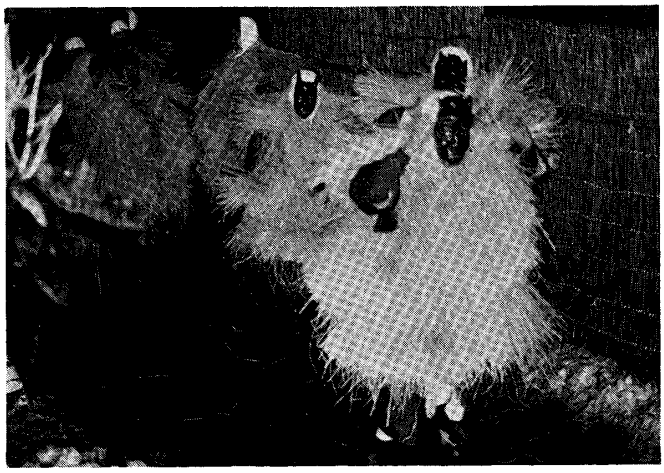


写真7　山形県遊佐町のアマハゲ①
—これから家を訪れる

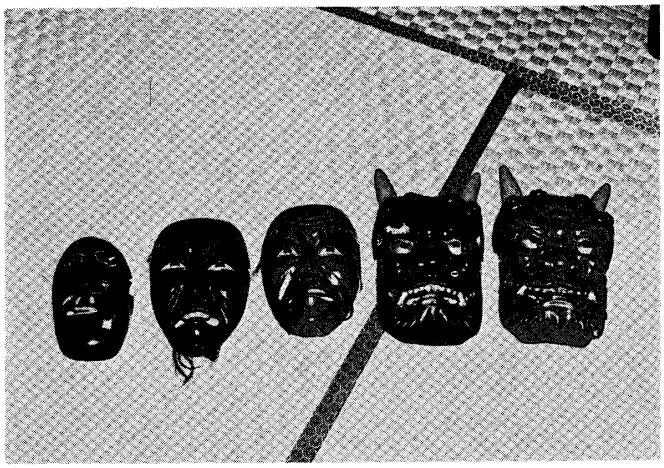


写真10　山形県遊佐町のアマハゲ④
—女鹿の面

写真9　山形県遊佐町のアマハゲ③
—老人の肩をもんでやる

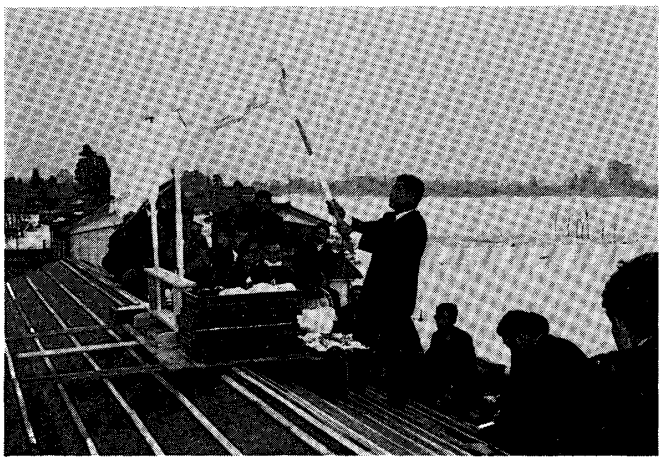


写真12　新潟県越路町神谷の見聞録②
—笠井源造家の上棟式

写真11　新潟県越路町神谷の見聞録①
—笠井源造家の上棟式

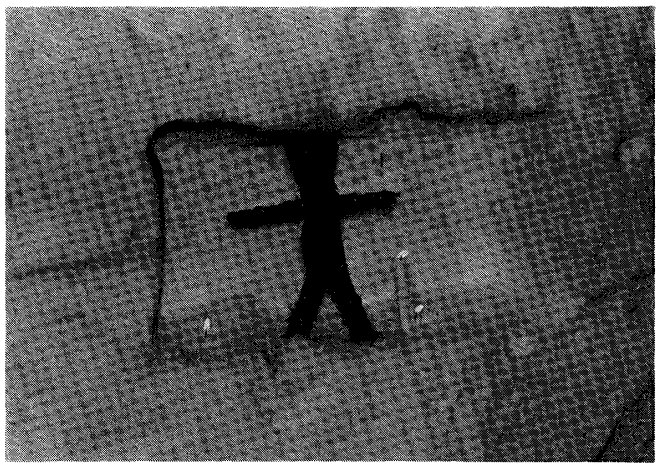


写真14　小千谷市大崩の鳥追い②
—トリメンドウに祀られたドウラクジンサマ

写真13　小千谷市大崩の鳥追い①
—歌いながら村を廻わる

写真16　能登一端竜助家のアエノコト①
—一端家。畦道の左手の田が苗代

写真15　小千谷市大崩の鳥追い③
—トリメンドウの中でごちそうを食べる

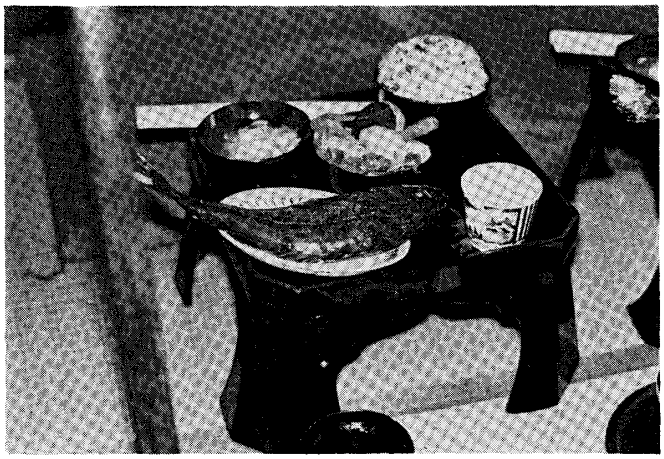


写真18　能登一端竜助家のアエノコト③
—田の神送りのお膳（男神）

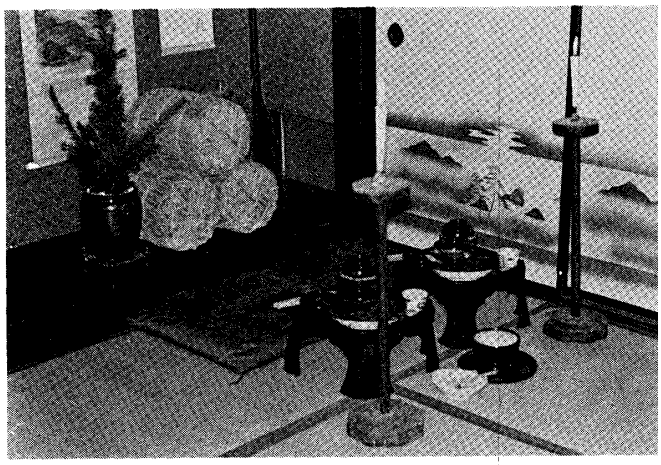


写真17　能登一端竜助家のアエノコト②
—田の神送りの祭場

写真20　能登一端竜助家のアエノコト⑤
一苗代田から田の神を迎える

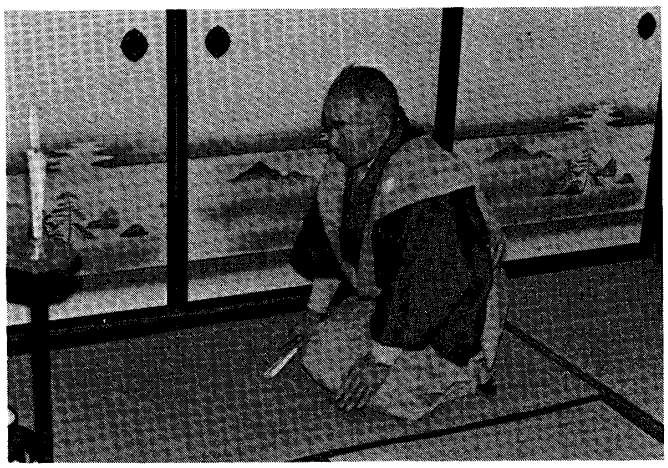


写真19　能登一端竜助家のアエノコト④
一田の神送りの口上を述べる主人

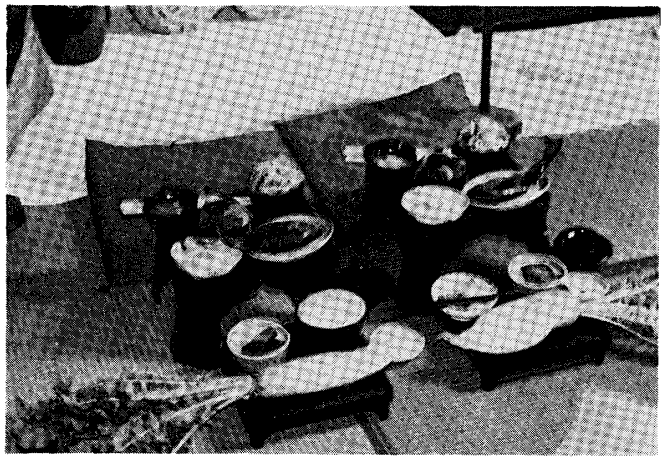


写真22　能登一端竜助家のアエノコト⑦
一田の神迎えのお膳（左が男神，右が女神）

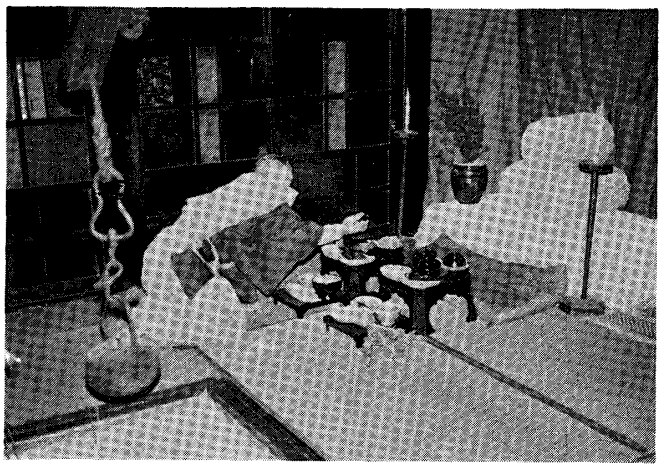


写真21　能登一端竜助家のアエノコト⑥
一田の神を迎えてごちそうを進める主人

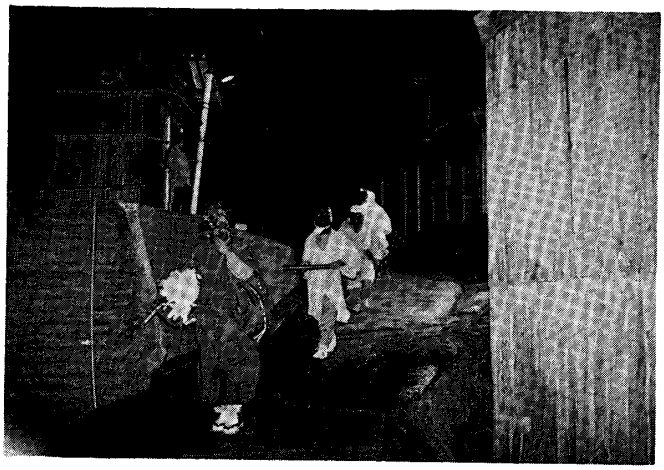


写真24　能登一門前町皆月のアマメハギ②
一家々を訪れる

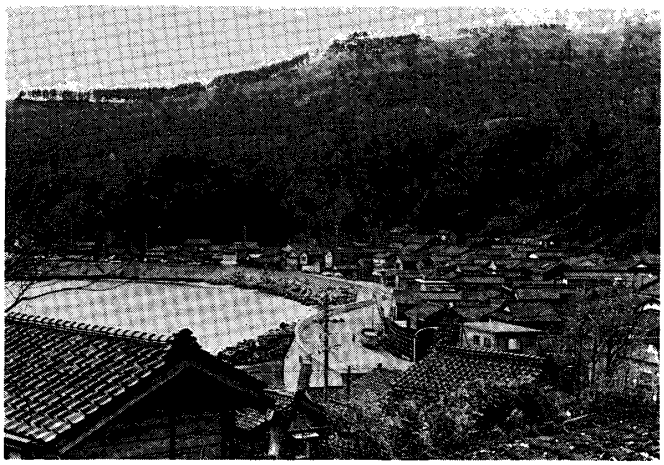


写真23　能登一門前町皆月のアマメハギ①
一集落風景

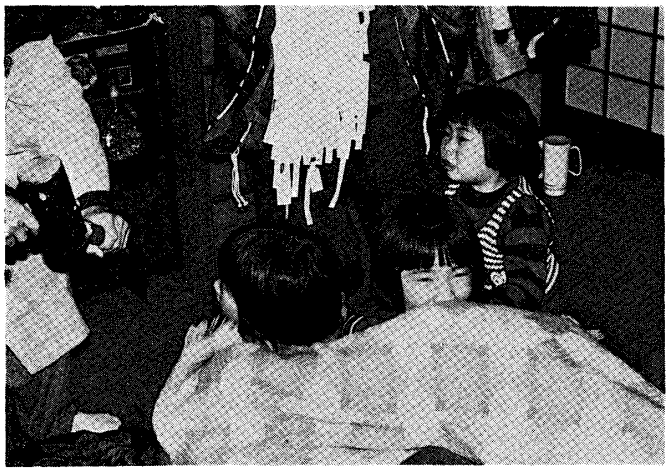


写真26　能登一門前町皆月のアマメハギ④
—子どもたちのアマメをはぐ

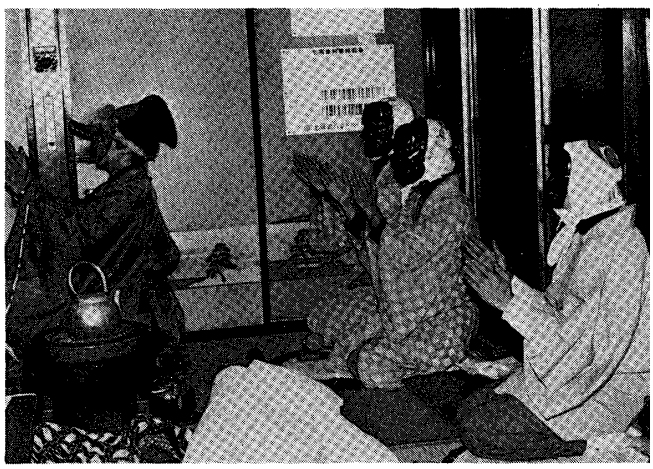


写真25　能登一門前町皆月のアマメハギ③
—お祓いの後，神棚を拝む

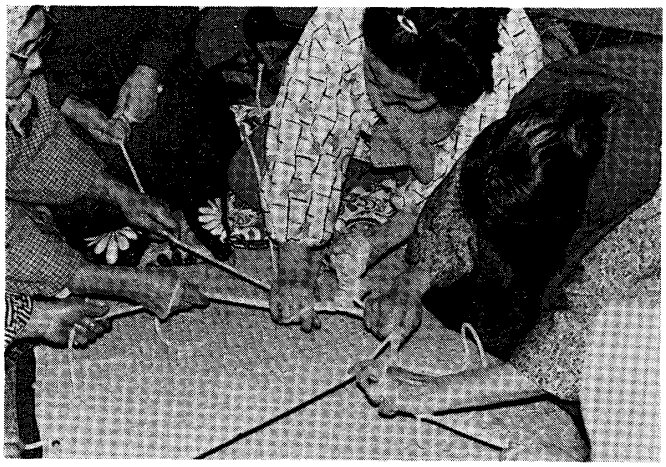


写真28　能登一門前町皆月のアマメハギ⑥
—ホービキに興じる老婆たち

写真27　能登一門前町皆月のアマメハギ⑤
—古面

写真30　白山麓の見聞録②
—雪深い白峰

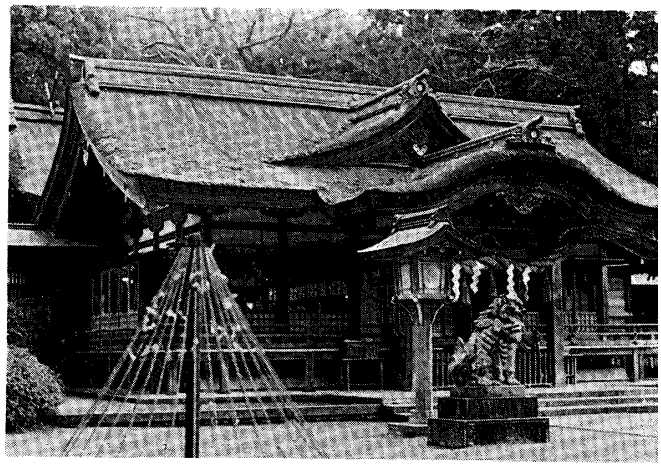


写真29　白山麓の見聞録①
—白山比咩神社

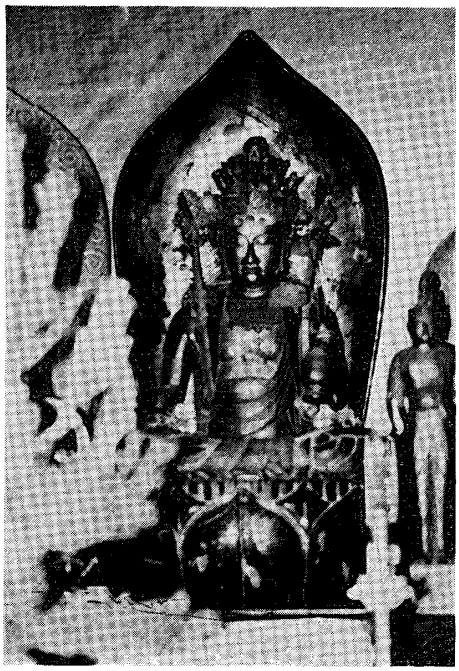


写真31　白山麓の見聞録③
―林西寺の観世音菩薩坐像

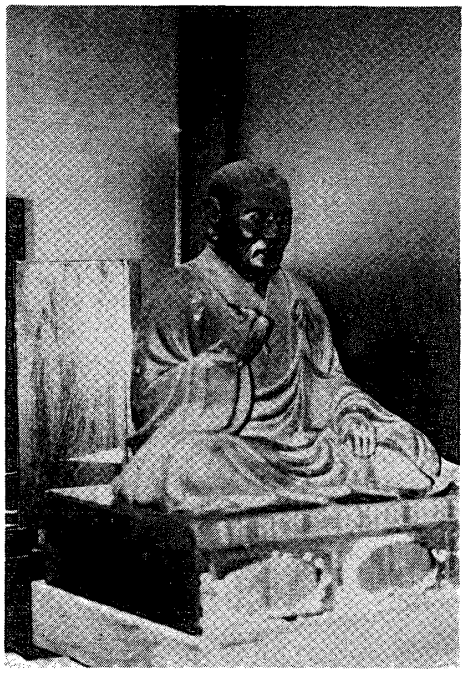


写真32　白山麓の見聞録④
―林西寺の泰澄大師坐像

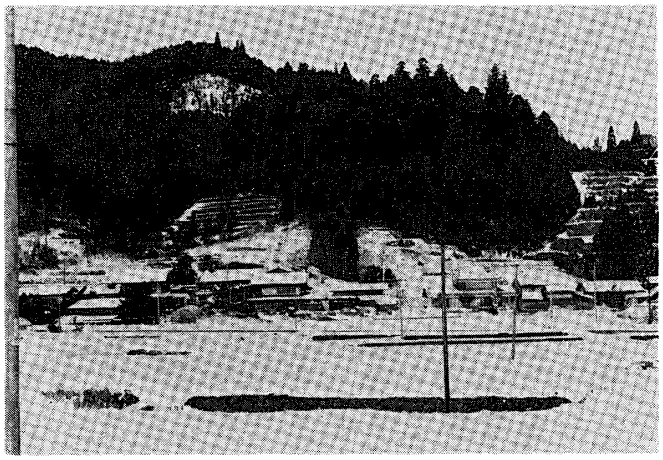


写真33　信州―新野の雪祭り①
―中央の森の中に伊豆神社がある

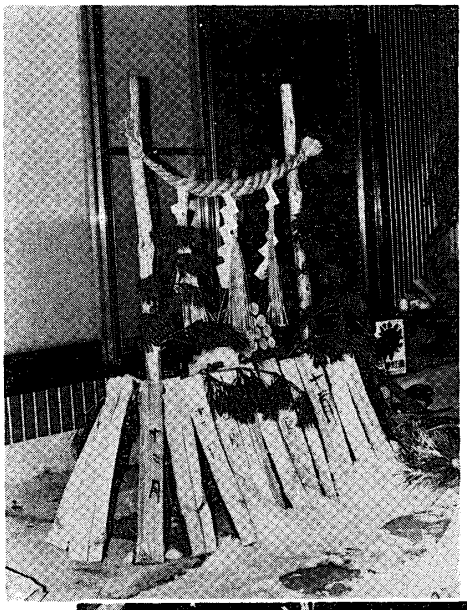


写真34　信州―新野の雪祭り②
―庭先の正月飾り

写真35　信州―新野の雪祭り③
神楽殿の宣命（神おろし）

写真36　信州―新野の雪祭り④
―神楽殿での順の舞

写真37 信州―新野の雪祭り⑤
―神楽殿での順の舞

写真38 信州―新野の雪祭り⑥
―大松明起こし

写真39 信州―新野の雪祭り⑦
―拝殿での修祓

写真40 信州―新野の雪祭り⑧
―ガランサマでの順の舞

写真41 信州―新野の雪祭り⑨
―拝殿での中啓の舞

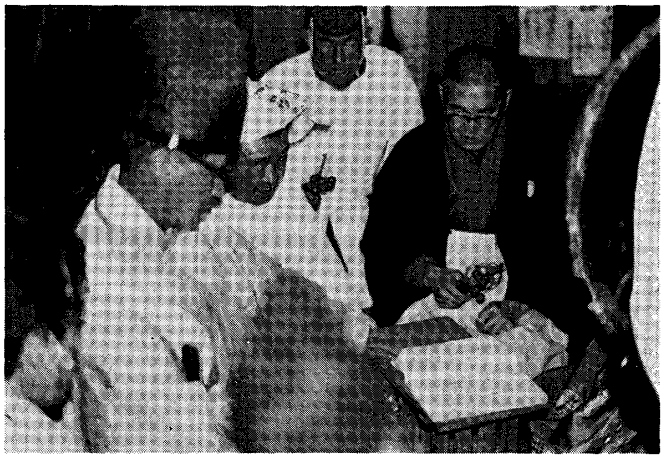


写真42 信州―新野の雪祭り⑩
―拝殿での宣命（神おろし）

写真44　信州―新野の雪祭り⑫
―大松明に点火するための宝船

写真43　信州―新野の雪祭り⑪
―庁屋の壁をたたいてランジョウ

写真46　信州―新野の雪祭り⑭
―サイホウ

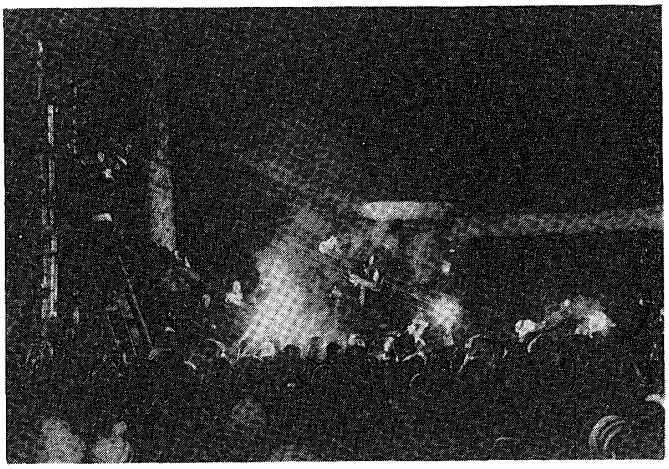


写真45　信州―新野の雪祭り⑬
―大松明に点火される様

写真48　信州―新野の雪祭り⑯
―笹を振る新座(西上手)

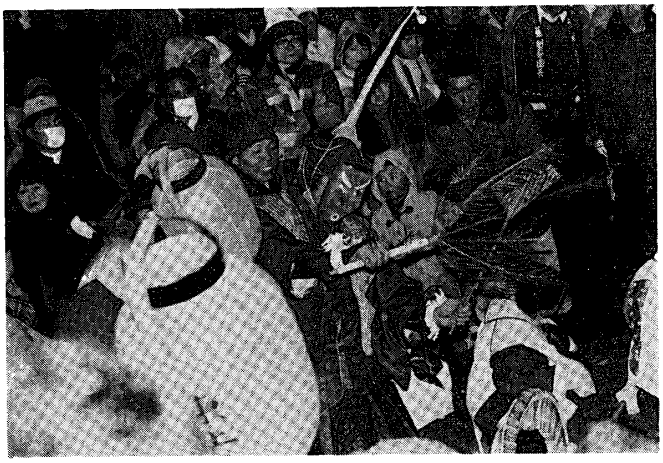


写真47　信州―新野の雪祭り⑮
―モドキ

写真49 信州―新野の雪祭り⑰
―新座のビンザサラ

写真50 信州―新野の雪祭り⑱
―競馬（一の馬）

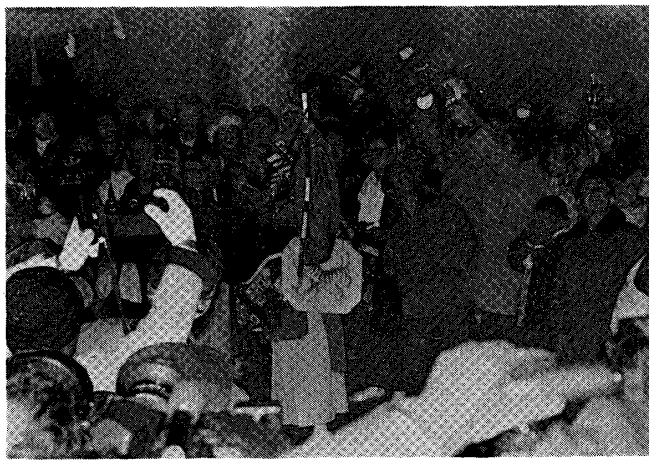


写真51 信州―新野の雪祭り⑲
―牛（宮司が矢を射る）

写真52 信州―新野の雪祭り⑳
―翁

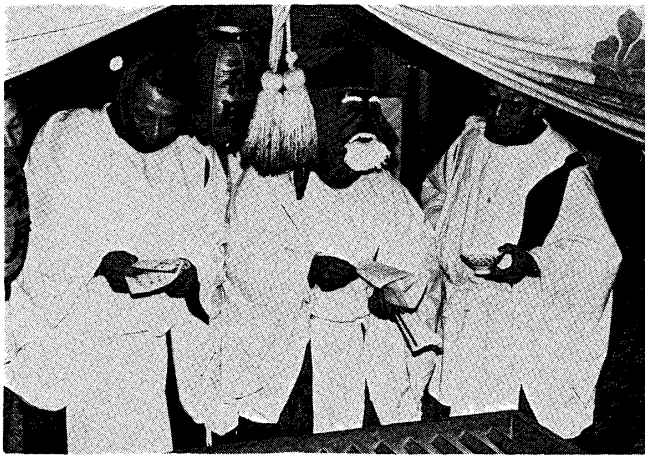


写真53 信州―新野の雪祭り㉑
―松影

写真54 信州―新野の雪祭り㉒
―ショウジッキリ

写真55　信州―新野の雪祭り㉓
―海道下り

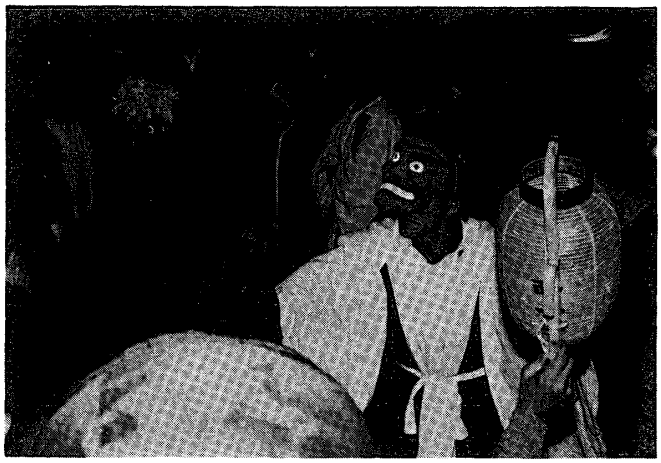


写真57　信州―新野の雪祭り㉕
―八幡

写真59　信州―新野の雪祭り㉗
―鍛冶

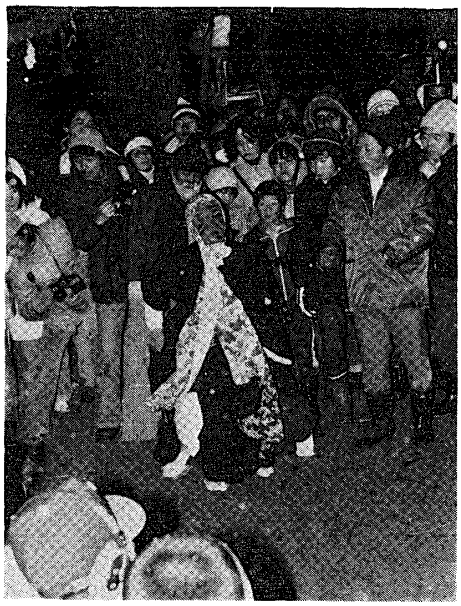


写真56　信州―新野の雪祭り㉔
―神婆

写真58　信州―新野の雪祭り㉖
―シズメ

写真60　信州―新野の雪祭り㉘
―釈迢空歌碑